



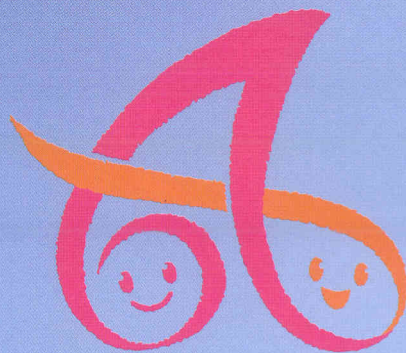
日本女性会議  
男女共同参画  
2013あなん

30th Japan Women's Conference in ANAN 2013  
いきいき わくわく 小さなまちから新たなるステージ!



報告書

REPORT



# 日本女性会議

## 男女共同参画

### 2013あなん

いきいき わくわく 小さなまちから新たなるステージ!

#### 取り組み方針

- 1 市民団体、企業、個人と行政が知恵や力を出して協力し、できる限り手づくりで企画、男女共同参画で運営を行うことにより人材の発掘、育成を行い、市民団体の活性化も図ります。
- 2 昨今の厳しい経済状況、財政状況を勘案し、身の丈にあった開催規模で、市民ボランティアの協力を広げできる限り事業費を抑えながら大会を開催します。
- 3 徳島県の歴史や文化、自然環境を生かした徳島阿南らしさの特色を大会の中に盛り込み、「おもてなしの心」で参加者をお迎えし、一期一会の縁を大切にします。
- 4 徳島県での開催と位置づけ、地方都市の元気を全国に発信します。

#### 大会ロゴマーク

全国公募により、梅村元彦さん（72歳・愛知県 春日井市）の阿南市の頭文字「A」をモチーフにした作品が選ばれました。「笑顔で明るく男女がお互いに話し合い、共に仲良く生きていくこと」がイメージされています。

#### contents

##### 大会メッセージ

大会長 阿南市長 岩浅嘉仁

実行委員長 渡辺 純子

##### 小さなまちの大きなチャレンジ

##### 分科会報告

第1分科会 26

第2分科会 34

第3分科会 42

第4分科会 50

第5分科会 58

第6分科会 66

第7分科会 74

第8分科会 82

第9分科会 90

交流会報告 98

開会式 100

基調報告 102

記念講演 108

アトラクション 109

30周年記念シンポジウム 110

閉会式 124

エクスカージョン 125

阿南大会開催までの経緯 126

大会参加者集計と傾向 128

参加者アンケートより 130

運営組織 132

ボランティア参加記録 136

関連掲載新聞より 137



日本女性会議

男女共同参画

2013あなん

*Massag from Japan Women's Conference in ANAN2013*

大会メッセージ

ひと ひと  
男と女 思いやりと感謝の気持ちで

共に汗を流す

男女共同参画

報告書

## 新たなる 1 ページ



大会長 阿南市長 **岩浅 嘉仁**

北は北海道から南は沖縄まで、全国44の都道府県から予想を上回る2300人を超えるお客様をお迎えし、30回の節目となる日本女性会議を開催することが出来ました。

今大会は、1年余りにわたる準備から当日のお接待まで、さまざまな分野で延べ8000人もボランティアの方々に携わっていただくとともに、貴重な浄財をご提供いただいた多くの協賛者の皆様にも絶大なるご協力をいただきました。こうした熱意ある関係者の皆様の「阿南でも成功させよう」「お客様を温かくお迎えしよう」と思う一念が、大きなうねりとなり力となり、阿南市民の声となったことが、素晴らしい大会となった要因であると思います。

また、大会テーマに初めて「男女共同参画」の言葉を表記しました。これまでの開催都市の中でも一番小さな阿南市が「いきいき わくわく 小さなまちから新たなるステージ!」をスローガンに、市民・企業・行政が協働で大会を運営する独自の方式で取り組みました。特に、実行委員会では、男性の意識改革に力を注いだ結果、運営委員などスタッフの男性比率は25%、大会参加者も20%を超えました。これは今までの大会にはみられなかったことです。日本初の女性代議士で、阿南市名誉市民でもある紅露みつ氏が、昭和21年、戦後初の衆議院議員選挙で「婦人の向上に男子の協力を切望する」と訴えたこの阿南市から、男女共同参画社会の実現に向け、日本女性会議の歴史に新たな1ページを加えることができたと思っています。

大会にご参加くださいました皆様、そのご家族、関係するすべての皆様方に心からの感謝を申し上げご挨拶とさせていただきます。





実行委員長 **渡辺 純子**

全国から多くの方々のご参加をいただきありがとうございました。

私たちは30回を節目とし、地方の小さな町、阿南から男(ひと)と女(ひと)として男女共同参画を発信したいと願い、開催させていただきました。

過去には、大都市でしか開催されなかった日本女性会議が、この小さな阿南市という町で開催の運びとなり、全国の多くの皆様方に交通アクセス等ご不便をおかけしましたが、2,300人を超える大勢の方にご参加いただきましたこと本当にうれしく。心より感謝申し上げます。

皆様方とともに学び、熱い議論を交わし合った2日間の中で、交流の輪も広がり、充実した時を重ね、更なるステージを目指すことが出来たことを心よりうれしく存じます。

延べ人数8000人を超えるボランティアに支えられて、この日まで歩んできた道のりそのものが思い描いた男女共同参画の姿でした。男(ひと)と女(ひと)がともに輝ける阿南であることを全国に発信できたと思います。

阿南にお越しくださいました皆様も、阿南で語り合ったこと、学んだこと、また、山や川、そして交流会で笑ったことや阿波踊りを踊ったことなどを思い出して今後、新たなる出会いを求めて更に前進していただきたく存じます。

どうかこの阿南を忘れないで、ぜひまたお越し下さいませ。阿南人一同、心からお待ち申し上げます。



## 小さなまちの大きなチャレンジ 男女共同参画新たなるステージに向けて



第21回日本女性会議2004松山大会に、阿南市女性協議会より初めての参加。日本女性会議の素晴らしさに感動し「いつか阿南で」と…………



2009年9月「男女共同参画in阿南」を開催。思いを共にする仲間を中心に、有料で開催。当時の担当課からは無理とも言われたが、多くのボランティアに支えられて大成功し、今回の運営委員の土台となった。



2012年3月松江大会より3名の実行委員をお招きし、「日本女性会議2013年誘致しよう会」設立。「大会運営は大変だが、失うものはない！」誘致に向けて絆が深まった瞬間であった。



2013年阿南開催が決まり、「誘致しよう会」を「成功させよう会」に改名し、日本女性会議開催の広報と活動資金集めを目的に「らんぼうパーティー」を開催。2012年7月17日は渡辺実行委員の誕生日でもあった。



2012仙台大会でPR、阿南市長はじめ議会や市民総勢50名の大PR部隊。JAさん提供のすだち配布も好評でした。



第1回 実行委員会



市職員との打ち合わせ



分科会打ち合わせ



心を込めてエコ新聞バック製作



ボランティア説明会



広報用に笑顔でポーズ



発送作業



プレ分科会



新野高等学校のご協力で阿南の花「ひまわり」を



竹の器制作



案山子ボランティアの皆さんと

おもてなしから大会運営まで、多忙な作業を笑顔でがんばりました。  
 9分科会も本番会場でプレを開催しました。

## 市民・行政・企業が連携し 多くのボランティアスタッフで



いよいよ本番の朝。あなんいいところらしいえがおでおもてなし！大会長スローガンを、全員で唱和して各持ち場に



全国各地より参加者の皆さんが続々到着



「お疲れさまです！」小中学生もお接待



阿南の花「ひまわり」ジャンボパッチワークの前で







「ようこそ阿南へ!どうぞこちらへ。」



「いらっしやいませ」 案山子ファミリーもおもてなし



室町時代の女性達?



JAこめっこ号が会場で実演。



天気に恵まれ最高



緊張の交流会スタッフ。さあ始めるぞ。



## 企画から運営まで 分科会運営スタッフで9分科会開催



今が旬。夕映えとして輝いている  
「老後の楽園」は笑顔でいっぱい  
第1分科会



大会資料は、新聞エコバックに入れて。  
徳島新聞販売店女性グループの協力で、2500袋を手作り。  
新聞は8月徳島の阿波踊りの紙面を別印刷で。





阿南工業高等専門学校が会場から備品まで提供いただきました

災害前後に女性の視点を  
グループ討議で活発な意見交換

第2分科会

聞いて学ぶ分科会から、参加者の意見を出し合う分科会運営を  
各分科会が取り入れて進行了ました。



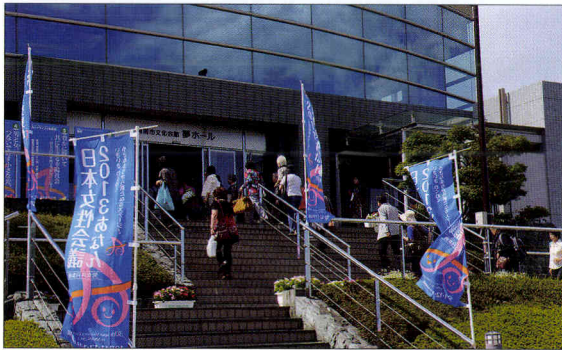
「みんなで子育てをする社会」をめざして  
あなから変わりませんか  
第3分科会



子育てしながらの「ママさんプラス」



かわいい案山子でお出迎え



まちおこし 若者の発表に会場から  
 温かいエールが送られました。  
**第4分科会**



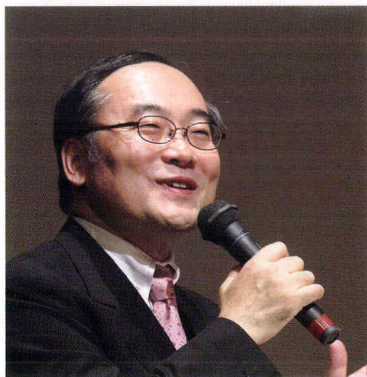
阿南那賀女性歯科医師の皆さんによる、「歯と健康に  
 ついての相談と検査」に多くの参加者が





セカンドライフは今が旬と輝いている  
参加者で会場は熱気につつまれました。  
第5分科会

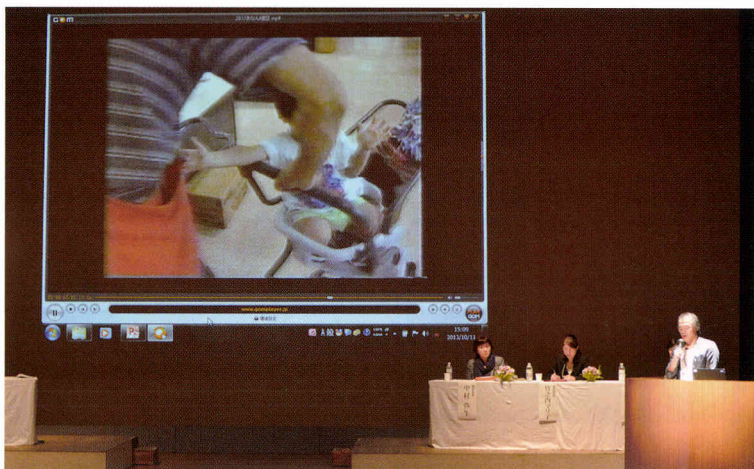
平成18年に徳島大学と四国大学の協力を得て誕生した  
「阿波踊り体操」は各分科会で大人気でした。



飯泉県知事と共に語った阿波の食育  
徳島す・だ・ち大作戦

第6分科会





全国からの公募参加者が、自慢のWLBを  
熱く語りました

第7分科会



地方の抱える農林漁業の実情から、夢ある農林漁業を  
次世代へ継承するために、熱い討議に時間を忘れて



海・山・里の恵みに感謝して  
希望にあふれる地域づくりのために

第8分科会



DVを男性からの視点で取り組んだ  
男たちの挑戦がスタートした

第9分科会



分科会運営を通して気づいたごくフツーの男性たちの提案で撮った写真を、分科会開始前に会場で放映しました。



コーディネーター市場ご夫妻は、お話と歌でメッセージ。



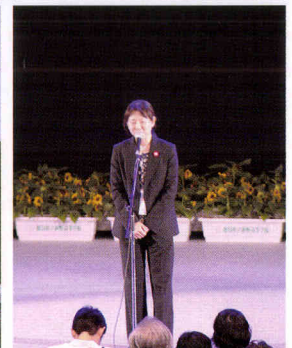
分科会での出会いを交流会で  
阿南流のおもてなしで懇親会 阿波踊りで 800 名が最高潮！



地場産の食材で用意した料理いかがでしたか？

日本女性会議30回大会を記念して、30mの巻き寿司に挑戦！みんなで食べました。



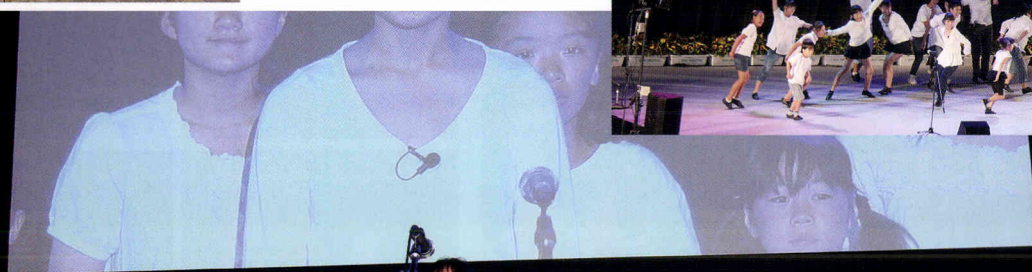


さあ いよいよ好天に恵まれ全体会議  
新たなるステージへの第一歩をあなんから



前日の大懇親会場を、大転換しての全体会議の朝。想定外の事情もあり眠る間もなかったスタッフのみなさんも、笑顔でお迎え。阿波踊り竹人形も踊りながらのお出迎え「ようこそ阿南へ」

次世代へつむぐ思いで  
オープニングから開会宣言を  
劇団夢創の子どもたちから

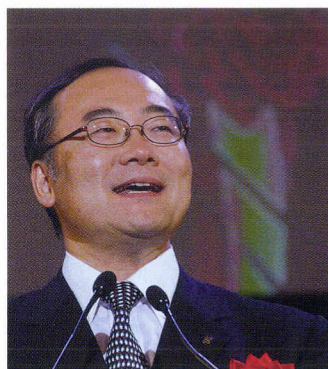




度辺純子実行委員長



島尾重機市議会議長



飯泉嘉門徳島県知事



河内順子、吉田 靖 副実行委員長



ご臨席いただいたご来賓のみなさま ありがとうございます。

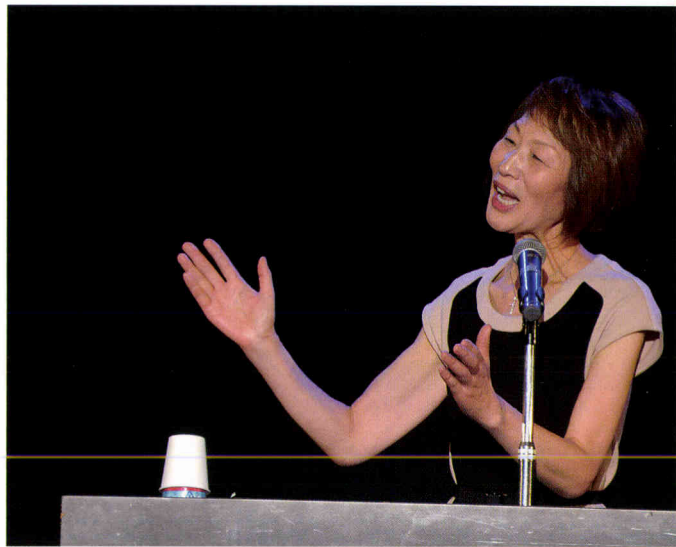
## 基調報告 / 記念講演 アトラクションは本場阿波踊りを堪能



### 基調報告

日本の男女共同参画施策の現状と  
今後の課題について

内閣府男女共同参画局長  
佐村 知子

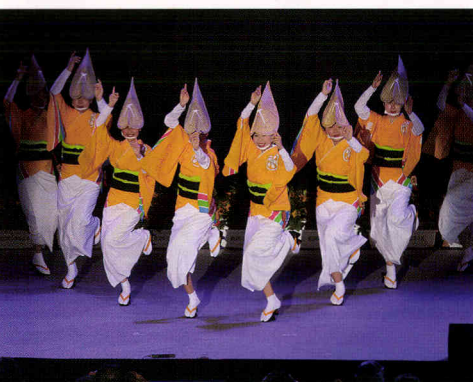


### 記念講演

男女が織りなす食育  
～作り手の心・いただく心～

料理研究家  
浜内 千波





地元阿南市から、徳島県阿波踊り協会所属「達粹連」と徳島市から阿波踊り振興協会所属「うずき連」によるアトラクション。

この日に合わせて初のお披露目をした阿南市イメージアップキャラクターあななん

## 記念シンポジウム 日本女性会議の30年をふり返り、そしてこれから・・・

諸事情により、ご案内のコーディネーターの変更と、コメンテーターが出席できないなか、市場恵子の進行で実りあるシンポジウムを開催することができました。

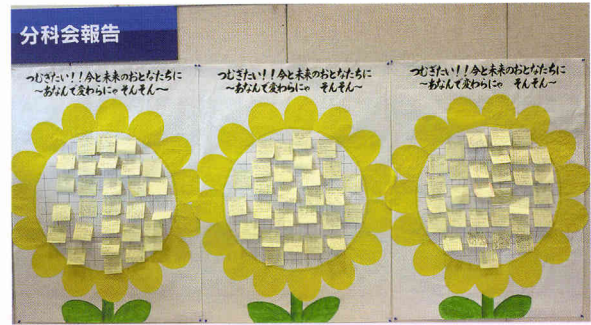


## 県内の商品開発をしている高等学校からも出店 大盛況の物産販売





パネリストに新世代、それぞれの立場の男女をお願いしました。  
シンポジウムの内容は、後日地元徳島新聞にて特集を掲載いただき広く広報することができました。



## 閉会式

歩んできた道のり そのものが男女共同参画 ありがとうございました



2014年開催地札幌の井上副市長より次期札幌大会を紹介。運営委員が壇上から大会メッセージを発信して閉会。ほんとうにありがとうございました。







介護と地域医療 (第1分科会) 子ども (第3分科会) DV (第9分科会)  
 分科会運営の繋がりで男女共同参画 新たなるステージに始動！

**DV根絶へ啓発推進** 勉 強 会 足  
 阿 南 で 発 足



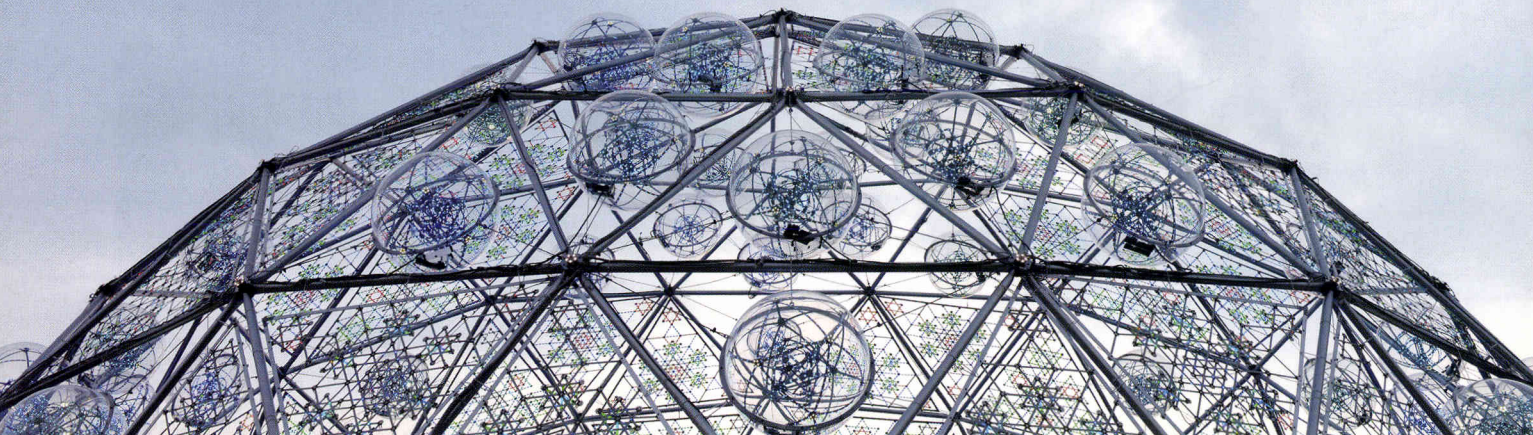
DVについて意見を交わす参加者—阿南市富岡町の市民会館

昨年10月に阿南市で  
 開かれた「日本女性会  
 議」で掲げた男女共同  
 参画社会の実現に向  
 け、ドメスティックバ  
 イオレンス(DV)を  
 テーマにした会合が21  
 日夜、同市富岡町の市

市民会館で始まった。  
 男性7人を含む21人  
 が参加。DV根絶へ、  
 多くの人にDVとは何  
 かを啓発する活動方針  
 を確認した。  
 啓発方法としては  
 「DVのない地域づく  
 りを応援します」など  
 と書いたパネルを使う  
 ことを決定。会の名称  
 は暴力をなくすシンボ  
 ル・パールリボンに  
 ちなんで「紫のたねを  
 まく会」とした。  
 活動は女性会議の運  
 営に携わったメンバ  
 ーが学んだ知識を深め、  
 市全体に広げることが目  
 的。24日には、介護と  
 地域医療をテーマにし  
 た会合が同会館であ  
 る。  
 (阿部研一)

男(ひと) と女(ひと)  
 思いやりと感謝の気持ちで  
 共に汗を流す 男女共同参画

小さなまちの大きな挑戦  
 日本女性会議〈男女共同参画〉2013あなん  
 このまちから男女共同参画の更なる実現に向けて  
 新たなるステージを模索し  
 次世代につむぎたいと思います。



# 分科会

# 11

## Friday

13:30~16:00  
(受付 12:00 ~)

### ● 分科会開催 〈市内公共施設〉

● 第1分科会  
【会場：見能林公民館 体育館】

● 第2分科会  
【会場：阿南工業高等専門学校】

● 第3分科会  
【会場：ひまわり会館 ふれあいホール】

● 第4分科会  
【会場：阿南市文化会館 研修室】

● 第5分科会  
【会場：阿南市文化会館 視聴覚室】

● 第6分科会  
【会場：阿南市文化会館 夢ホール】

● 第7分科会  
【会場：阿南市市民会館 大ホール】

● 第8分科会  
【会場：富岡公民館 大ホール】

● 第9分科会  
【会場：阿南保健所 大会議室】  
(徳島県南部総合県民局保健福祉環境部阿南庁)

18:00~20:00

● 交流会  
【会場：阿南市スポーツ総合センター】

第1分科会（介護と地域医療）

阿南から発信！男女で向かい合う「老後の楽園」



コーディネーター  
**春日キヨ**

臨床社会学者  
前松山大学人文学部社会学科教授

パネリスト  
**勢井啓介**

NPO 法人 AWA がん対策募金理事長

パネリスト  
**石川隆子**

ねたきりになら連実行委員

パネリスト  
**大下直樹**

社会福祉士  
公益社団法人  
認知症の人と家族の会徳島県支部代表

パネリスト  
**植松光江**

農家民宿・棚田の学校主宰  
植松アシスタント 石立刮子

基調講演

夕映え期の終活

**春日** ここに至るまで、私は介護保険制度が始まって、2000年から10年ほどずっと高齢者虐待防止の支援にあたり、支援者の方と一緒に、現場でいろんな形で家族の変化について考えてきました。

そうした中で出会ったのは、高齢になったからこそ輝いて生きている方たちが、たくさんおられるという現状です。

夕映え期というのは、黄昏の時期、変わり三日月、衰えが見えるとき、末期、うらぶれるというようなイメージで語られてきましたが、実はそうではない。特に今が1番いい時と言われる方にいっぱい出会いました。ほんとに夕映えとして輝いている。これは黄昏じゃなくて夕映え、きっとそう呼ぶべきではないだろうかというふうに思っています。

その中で私は気づきました。私の母親は、明治42年生まれ。今100歳の世代ですね。その世代と違って、今の60歳代70歳代ぐらいの私たちは、上の世代が全然持たなかった3つのものを持っているなと思いました。何と思われませんか？

「手帳、運転免許証、自分名義の通帳と実印」すごいことです、これは。手帳というのは、自分の時間を、将来の時間を自分で管理するということ。運転免許証というのは、自分が動きたい空間を自分でコントロールする力です。そして実印というのは自分の金を持つ力です。これはほんとに忍従してきたと言われた上の親世代とは違った、今の夕映えの時を生きる高齢者の実態だろうと思います。

ここで、皆さんにお聞きしますが、皆さん何歳までお生きになるおつもりですか。女性で90歳まで生きる方が、46%。約半数です。いま女性の半数以上の方が90歳過ぎても生きるわけです。そういう未来が待っているわけです。

しかし、今が花の時、夕映えの時だといいながら、90歳を過ぎたことについて、何と言われるか。多くの人が、「私はどこで誰に、どうやって看てもらえているだろう」と、受け身ですね。私はここでこうして、誰に看てもらって、こうやって死んで行きたい、というイメージを一人ひとりがまだ持ち得ていません。私は現場で、認知症の母とシングルの息子の組み合わせで、なんでこんなにも虐待ケースが多いのだろうと考えていました。全国の統計でも、加害者で一番多くて、4割以上を占めるのは、息子です。そしてその4割を占める息子のうちの7割が単身の息子です。単身の息子と認知症の母親という組み合わせが一番高齢者虐待に陥りやすいのです。なぜか？

息子たちがみんな結婚していた時代は、親離れ、子離れが結婚することによって役割移行ができていました。それが現在では、シングルの息子や娘と暮らす世帯が、高齢者世帯の4割を占めています。そうした中で起こっているのは、中学校、高校時代の子ども時代のままの母、息子関係です。母親が世話をし、息子が世話を受ける。60歳になっても70歳になっても、生きる力をつまみ日常生活能力をつけないまま母が85歳を過ぎ、息子が60歳を過ぎます。

女性会議などでは、ずっと夫婦の性別分業の廃止が言われてきました。しかし、単身の息子、娘と暮らす高齢者が多い現代、これから必要なのは母と息子間の性別分業です。つまり夫婦間の性別分業をやめていくのと同様に、母、息子間の親が世話をし、子が世話を受けるという関係を組み替えていく時代になって来てきています。

もう一つは、高齢者が長生きをするようになった。人生90年代どころか、人生100年代時代になってきた。それこそ高齢の父親が、高齢の息子を介護するという、逆パターンの老々介護という事例も現場にはたくさん出てきております。



こういうことも90年代くらいまでは、信じられない事態だと思います。つまり長寿化したということ。それから未婚率が上がってきたこと。このように、あまりにも急速に親世代の高齢化と子世代の未婚化が進んだために、準備していない人が多いということです。

虐待問題も深刻ですが、今後深刻化するのはいままでずっと否認してきた姿。自分が認知症になる、病気で倒れる、判断力を持てなくなるなんて姿は見たくないでしょう。夕映えの時には特に。「あそこに温泉旅行へ行こう」「あそこに旨いものを食べに行こう」そういうことは、いつもアンテナを張っているけれど、最後はどうなるのか、そのためにどんな準備が必要なのかということは、寂しければさびしいほどあまり考えたくない、ということで否認している。しかし、一人暮らしが増える私たちの時代には、自分がどのように生きたいか意向を持つことが大切です。

家族がいる人は、家族が看てくれたら幸せ。家族がいなくて一人で生きていった方がいいと言う人もいますが、家族がいてくれたらその方がいいのです。万が一いないときに、あわてふためかないためには、自分が一人になることを想像することです。家族の中においても地域でも「おひとり様」なのだという生き方を自覚しておくことです。

さらに、家族以外に自分の意向を伝えてくれる「つながりを持っておく」「つながりの場を作っておく」これが重要になります。一人暮らしになっ

ていくリスクに備える終活というのが、必要な時代になります。だから、準備しなくてはならない。つながりをつけることですが、これは一朝一夕に身につく能力ではございません。お金が突然貯まることがないのと同じように。お金も、徐々に貯めていかないと、貯まりません。お金も必要です。「つながり力」も貯めていかないと貯まりません。

夕映えの時、花のときの今の時に、人とのつながりをつける。ボランティアなりなんなりの中で、いろいろな病気を抱えたり、ハンディキャップを抱えた人たちの集まりの中に出かけて、「ああやって老いていくのか」「ああやって人は死んでいくのか」という生涯学習の一環として出向いて行く。そういうつながりが大事です。もう一歩進んで、私自身がそういう気になって各地域を廻ってみますと、時代はもう一歩進んでいます。ケアを受ける認知症の高齢者の方たちが、実際にはケアを提供する側にまわっておられる。

たとえば京丹後に行ったら、ここは、もと西陣織の機織りの産地で、認知症になった女性の方が、いっぱい残っている端布でいろいろな小物を作り、お小遣いをかせいでいる。ケアを受けるだけでなく自分で生み出すこともできる。

もうひとつは、私が以前勤めておりました愛媛県愛南町というところでは、過疎が進んで、3世帯に1世帯は、住民に認知症の人がいたり、障がい者がいたり、なんらかのハンディキャップを抱えるようになってきています。

そうすると、元気な者が支え、弱ったものが支えられるということではなくて、お互いにケアを受けつつ、ケアを提供する、支えられつつ支え手になる。こういう地域がたくさん生まれている。

そんな中で、私自身が痛感したのは、かつて、「子は鎧（かすがい）」つまり、夫婦を結びつけ、子の命を地上に結びつける役割を果たしたが、現

在進行しているのは、そして私たち自身が自覚しなければならないのは、老いや介護こそが鎧かすがいになってきているということです。自分と人とのつながりをつける鎧かすがいになってきているという発想の転換。老いること、病を持つということ、ネガティブに考えるのではなく、「病みつく」「老いつく」そして、「輝いて生きる」「チャレンジして生きる」チャレンジと言っても、すごいことではなくて、自分がささやかに立てた目標、そして人に喜ばれ、人と出会えることを喜ぶ力をつけていくこと。孫にお小遣いをやることだけに閉ざされた世界で生きてはならない。

さらに、もうひとつ。息子さん、娘さんと暮らしている人は、世話をしすぎないでください。世話をしすぎるといことは、パワーのある親に飲みこまれることにほかなりません。子どもたちは、親亡きあとも生きていかなければなりません。ここにデータとして出していますが、息子の家事時間で、まったくしないというのが、71%です。15分未満が9.6%。同居している息子たちの8割は、家事もしないで老いて行く。生きる力を、皆さんが、旨い料理を作ってやりたいとかで、奪っているのです。

さらに、もうひとつ。夫が生きていたら、皆さんが外に出歩く時に、連れ歩いてください。男性はなかなか一人では出てきません。こういう場でも、つれあいさんが同行されたら、どんなにいいでしょう。良くないですか。

女性は、まだつながる力があります。しかし、つい最近発表の調査結果では、男性の一人暮らし世帯で、会話頻度2週間に1回以下という人が、16.7%、すごい割合ですよ。

男性も同じように老いて、妻の介護をして、妻に先立だれて、ということが増えていくわけです。そうした中で、男性の孤立度が高くて、「助けて」と言う関係もないような環境というのは、



非常に悲惨なことです。

風景が一変したこともあります。家族について男女平等と語られていましたが、女性が職場に進出して、夫婦間の役割が対等になりました。そして、これからの高齢期、定年退職以降の歳月が30年近く待っているときには、夫が存命であれば、夫婦共に自分たちの命を支える。成人した子どもと同居しなければならなかったら、一人の自立した大人と大人との関係を。親と子と、母と子というような関係を抜きにして、大人同士の共同生活に組み替える形での男女平等な家庭という新しい視点が必要だと思えます。

家族の役割の組み換えと同時に、家族を開いて、人とのつながりの組み換え、再構築、そして新しい世界を開いていくことが、これからの大事な目標とすべきことではないでしょうか

### パネルディスカッション

**石川** 阿波弁で、「してはいけません」と言うのを、「せられん」というような言い方をします。それと、阿波踊りのグループのことを「連」と言います。それをひっくるめて、「寝たきりになってはいけませんよ」ということを、「寝たきりなら連」ということで名前がつけました。

リハビリの考え方の中に、「心が動けば、体が

動く。体が動けば、心が動く」というリハビリの考え方があります。阿波踊りは、「手を挙げて、足を運べば阿波踊り」って言われます。そのように「自分なりに動けば、それがもう阿波踊りです」それなら「障がいがあってもできるんちゃうん」という話になりまして、約1年間の準備の中で、「寝たきりなら連」が設立されました。

ここに「Watch me」とロゴが入っております。このロゴが入っているのは、つまり、そこが、演舞場で踊るということが、その時はそこが檜舞台で、スターになれるってということです。みなさんも経験あると思いますが、一回そういう場に立ったら、「また出てみたい」と思うようになります。

よく言われている言葉に「いいことがあったら、うれしいことがあったら、いつ死んでもいい」って言いませんか。それは違います。「こんなに楽しいことがあったら、死ねんわ」って。「来年も行くわ」っていう言葉でいつも「また来年もね」っていう言葉で、終わっています。

**石立** 植松さんは現在79歳です。お住まいの上勝町一宇の標高650メートルの森と山々は、「上勝ブルー」と呼ばれております。空の視界が開け、おいしい名水と、棚田に恵まれた、「天上の楽園」と称される地であります。

70歳を過ぎた頃です。県内外の人が訪れての「棚田の学校」や番茶作り、町内の小学生が来て、芋作りの活動をはじめました。「泊まりたいなあ」という人のための民宿もいつの間にか始まり、現在に至っております。植松さんは「今が一番幸せです」と言っています。「植松さん、民泊される方は長い時間滞在されるでしょう。何をされていますか？」

**植松** 1泊2日の人も居るし、2泊3日の人も居るし、ぼうーっとして、ご飯食べたら、縁側に腰掛けて、向こうの風景見よったら、鳥の声とか、向い側の山のお日さんの当たっとうところと、当たってないところが変わるんでな、退屈せんのじゃって。「これが一番都会から来たもんはごちそうなんじゃ」と言うてくれます。

**石立** いろいろな活動を長いことしてきて、うれしいと思うときはどのようなときですか？

**植松** うれしいと思うのは、私はほんまに元気で、朝起きたら、お日さんに拜んで、深呼吸を3回して、1日が始まるんですけど。この前、風邪をひいて、9日間入院しました。そうしたら泊まりに来てくれとった静岡の人が、「徳島へ来たらな、体調崩しとるって言うけん、どんなで」って言うて、お見舞いに来てくれたんです。うれしかったです。

**石立** ほんとやな、それはうれしいことやなあ。

**植松** 私は元気であることを自慢言よったんじゃけん、これは病気になったけん、これでは自慢は言われん。でもな、こんな人とのつながりがいまは自慢やなあ。こんなことを心の貯金にしたいと思う。ほして、ひとつ心の貯金にしました。ほなけん、来てくれる人をほんまに笑顔で迎えて、笑顔で帰って行ってもらうことができるんです。

**勢井** 活動のきっかけは、ちょうど今から10年

ちょっと前ですね。会社を起業したのと同時に、がんを罹っていることがわかりました。S状結腸がんでステージがⅣ、肝臓にもすでに転移しておりました。

地元の病院で手術をしまして、さあ、治った、というか、治ったと思ったんですけども、これからが本当の戦いでした。がんは肝臓の中にあつたものを、取り切れていないということも後からわかったのですが、それ以上に手術による後遺症がでてきたんですね。おしっこが出ない、便が漏れる。これは非常に大変でした。普段の生活が出来ないのは本当につらいことでした。

当時、僕は48歳でしたので、子どもが、まだ、上の子が高校2年、下が中2でした。うちのかみさんからは、「元気に7年生きてくれ」と言われていました。入院中に知り合いになり、治療をいっしょにがんばっていた人がなくなり、落ち込んだりしましたが、手術が終わっても、生きることをがんばり続けました。しかし、いまでも後遺症がありまして普通の生活はなかなかできません。

そこで僕は、ここにありますように、「AWAがん対策募金」を立ち上げ、徳島県内でがん患者の方の生活の質やがん検診の受診率向上に取り組みうと考えました。がん検診の受診の呼びかけの1つとして、家族にがん検診を受けてもらおうとメッセージカードを書いてもらう活動を、小学生、中学生、高校生、大学生を対象に行っております。

**大下** 私自身は、社会福祉士として専門職の立場から「認知症の人と家族の会」に関わっております。

20年前、平成5年に特別養護老人ホームの相談員になって、それで認知症の高齢者と出会いました。認知症の人とのかかわりの中で、その置かれている立場が理解されないでいるということが



見えてきました。家族の介護力の低下により認知症の人たちが、施設なり、そういったところで、ケアを受けざるを得ないという現状がありますが、なんとか彼ら自身を理解しつつ、支えられる場が作れないかなと考えていたときに、代表になってくれないかというお話が来たわけです。

月に1回、会議室等を借りて、家族の会をやっています。もっとアットホームで、ふらっと寄れるところがあったらいいよね、ということでカフェをはじめることになりました。

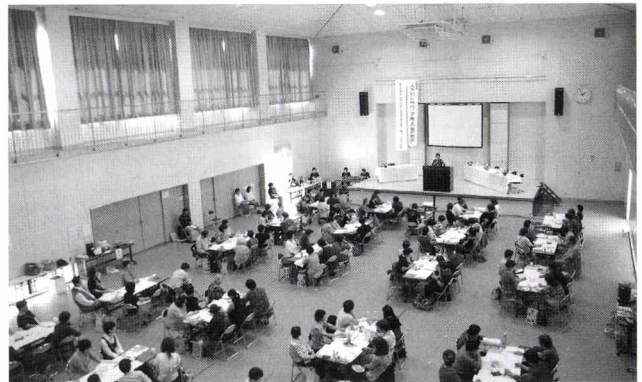
最初は認知症の人だけって考えていました。しかし、地域には社会的孤立をしているなどいろいろな人が住んでいることに気づきました。障がい者の方も、施設との間には行き来するけれども、地域の住民とは認識されてもいない、地域の中には住んでないんですね。そういう人たちも「ここに来て集える」ちょっとくつろげる、そんな場があればいいなと思ってみんなが集まれる「ミックスカフェ」をつくりました。

**春日** それぞれ実践経験を語っていただいたので、少しお聞きしたいのですが？

もう20年なさっているわけですね。石川さん自身がこういう活動に加わる前と後で、人生観というか「人っていうものはこんなものか」とかね。そういう人に対する見方っていうのは変わりましたか。

**石川** ずいぶん変わりました。ボランティアって、職業が何とか、看護師ですよとか、理学療法士だからとか、関係ないんですね。人としてはみんな一緒だなと。みんなで良くしていこうとか、こうやったらいいんじゃないかっていうことが、フラットにフラットに話せるようになったんじゃないかと思ったんです。

それともうひとつ、私たちの車いすの「連」は、ほんとうにパレードをするだけなんですよ



ね。20分間、演舞場を歩くだけです。それを迎えてくれる、お金を出して栈敷で見てくれる。応援をして「がんばれ」って言ってくれるという阿波踊りの持つ力、奥深さ、というのを私はこれに参加して初めて気づかされました。

**春日** そうですよね。高齢期になるっていうことは、地位とかいろいろなものを脱ぎ捨てて、私そのものが出てしまいます。その時期にそれに即して生きていけるっていうことはすごいことですよ。晴れ舞台に立つというのは大きいですね。

**石川** そうなんです。やめられないです。檜舞台に立ったら、「また来年も」って、一番最後の（演舞場の）出口のところまで来たら、みんな言うんです。「また来年も」って。

**春日** ありがとうございます。

次に、植松さんは70歳から今のような仕事をなさり始めてですね。「もう70歳だから、そんな新しいことはやるまい」とかね、「今更」とかは思わなくて、なぜされたのですか。

**植松** そうですね。棚田学校はみんなに励まされてな、「もう年じゃけん、辞めよか」と思ったんやけんどな、「ぜひ続けてください」って言うんで、てんでに手伝うけんや言うてくれて、ほんで始めています。

民宿は、棚田学校に来よる人が「泊まりたい」って言うて、民泊を始めたんです。自分なりに、料理も昔から自分が食べ染めとるものを出し

始めたらお客さんがようけ来てくれてな。

**春日** 植松さんの話を聞くと、面白いですね。年だからってことはないんですね。呼びかけられたら応えていって、それってすごいことですね。やはり年の枠を設けてはいけませんね。それを痛切に感じました。

次に勢井さんの場合は病気とわかるまでは、ばりばりの仕事人であったと思います。そこで、病気になる前と後では何が変わりましたか。

**勢井** そうですね。仕事だけの人間だったから、仕事関係の人だけのつきあいだったのですが、今では、医療関係者に始まり、別のNPOの人も含めているんな方と、それも全国の方と知り合うということがありました。いろいろな生き方、考え方があるということがよくわかりました。

**春日** 大下さんは出版社に以前は勤めていたそうですが、そういうところから今のお仕事をなさって、人を見る目とか変わってきましたか。人と人とのつながりとか。

**大下** つながる、つなげるというのは、仕事というより趣味の延長線上のように感じています。

**春日** 時間も迫ってきていますが、何かこれだけは言っておきたいということがございましたらどなたでも。ありませんか。

**大下** 知り合いで閉めたスナックを貸してあげると言ってくれる人がいて、夜だけの認知症カフェをオープンしたいと思っています。男性はそういうところに来て、酒を飲みながら愚痴を言って、家に帰るとまたがんばれると思っています。そんな場がもっとあればいいかなと。

**石川** どういう形でもいいので、いろいろなつながりを大事にしていくこと。新しい人間関係を作っていくためには、ボランティアはとて面白いと思います。これからの老後を考えるうえで、ボランティアということも大事ではないかと、私は感じています。

**春日** そうですね。ボランティアとかかわりを持つというのは人を変えていきますし、知らない世界をわかろうとすることは自分が関わらなきゃわからないということで、どんどん自分が知らないうちに変えられていっているというのが、私自身のこれまでの人生でした。

先ほどお話した愛媛県愛南町という非常に過疎化が進んだ地域で、もう真珠もだめ、ハマチもだめ、みかんもだめっていう中で、生活がやっつけられない人が地域の中にたまっていく。そうすると、ケアをする、されるという余地が地域全体でなくなっていく。とにかく生きていくという営みをみんなで支え合うしかないっていう、もうそこまで時代が来ています。

そこで、精神科の先生方を中心に愛南にアボカドの森を作ろうと行動して、下にシイタケの原木を置いた。その作業は、すべて精神障がい者の方とか、日常でも働ける方が一緒に作業なさるんですね。

アボカドの森を作るっていう時に、私のちょうど知り合いが、アボカドの種から育った60年経った大きな木が何本かあるとおっしゃったから、私が愛南の方と広島のアボカドの木の持ち主の方をつなぎました。愛南町から木を見に高齢者が6人来られました。アボカドの木は大きいんですね。6人の男性がみんなそのアボカドの木によじ登って、「ええなあ、わしらが今植えている木が、60年経ったら、こんな大木になるんだ。」「アボカドの森というのは、こんなに大きな木が、ぼこぼこ立つのが、わしらが死んだ後の森かあ。」と言われるんです。

私が、「夢が実現すればいいですね。」と言ったら、一緒についてきたリーダーの人が「夢は未来に見るんじゃないです。今ここに僕らが木にぶらさがって見ているじゃないですか」と言われて、そうだなあと。

人はどうしたら生き生きとできるかと言うと、他人とのつながりの中で未来に希望を持った時、それが今の輝きに通じるわけじゃないですか。アボカドの森をイメージして大きな木にぶら下がって今夢の中にあるのが、ああこの人たちだと思ったときに、こういう仕事を私も大学を辞めて他人とのかかわりの中で、もう年だからとか思わずにやっっていこうと思いました。

ここに参加された皆様方も、それぞれ課題をお持ちだと思います。

このあとワークショップがありますのでそこで語り合っていていただいて、それを地域におかえりになったら皆さんリーダーさんになれるような方々ばかりだと思うので、もう年だなんて思わずに自分を開いてつながりを開いてはっきりとした自分の意向を固める、そういう歩み方をともにやっていきましょう。

## ワールドカフェ

---

これから、「ワールドカフェ」を行います。これからの皆さんが迎えるであろう、「夕映え期」に、幸せを実感する生き方っていったい何か？今からこのテーマについて、話をさせていただこうと思います。

まず、テーブルにつかれています方で、一人だけ「ホスト」という方を決めていただきます。この方は最初から最後まで、(席を)動かない方です。まず初めに、このメンバーで「幸せを実感する生き方って何か？」について15分間話をさせていただきます。そのあと一人のホストだけを残して、あとの方は違うテーブルに移動していただきます。

そして、二つ目のテーブルでまた同じように全く新しいメンバーで、また15分話をさせていただきます。そのあと、最後の15分ですね。最後の15分間は今度は元いたテーブルに帰っていただ

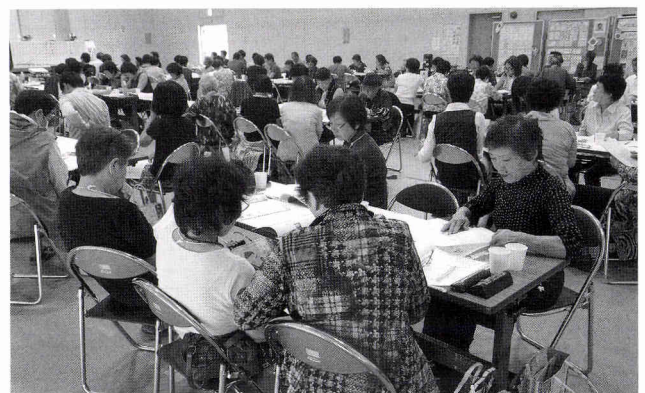
いて、他のテーブルで話したことを最後にここでまとめていただきます。いろんな意見が出てくると思います。

## <ワールドカフェを実施>

そろそろ時間がきました。皆様のテーブルにポストイットがあります。それを1枚ずつお取りください。お話された中で、明日からみなさまがしたいことを具体的に書いてください。書いたものは、うしろ入口のところにあります「幸せを実感するために」というところに、帰りにお約束として貼って帰ってください。

素晴らしい意見がたくさん出ているみたいですね。私たちのこの第1分科会は、1年半前から活動を開始しました。全く福祉に関係のない市民が集まり、私たちの考える「老後の楽園」とは、いったい何だろうということを進めてきました。二つあります。一つは、「自分の人生は、自分で決める。」二つ目は、幸せを実感するためには、「人とつながらなければならない」人のために働いてこそ幸せを実感できる、これが老後の楽園じゃないか、ということになりました。

今日、基調講演、パネルディスカッション、ワールドカフェで貴重な意見をいただきました。今ポストイットに書いていただいていると思います。それを明日からの活動に続けていただきたいと思います。



第2分科会 (防災)

# 女性防災リーダーの育成のために

～災害前後に女性の視点を～



コーディネーター  
**湯城豊勝**

阿南工業高等専門学校副校長  
建設システム工学科教授

講師  
**小川美紀**

防災士・地域自主防災会会長

発表者  
**松本有加**

阿南高専建設システム工学科5年

講評者  
**山崎忠雄**

阿南市防災対策課防災監  
阿南防災士の会事務局長

発表

## 阿南市の紹介 (災害・防災文化について)

阿南市は四国最東端に位置しています。市のロゴマークは、山や海の豊かな自然環境の中、市民が健康に満ちて、日々活動する姿が描かれており、平成23年1月に決定しました。次は四国本島最東端の蒲生田岬上空よりラジコンヘリで撮影したもので、岬の先には伊島が見えています。



発表者  
**松本有加**

現在の阿南市は平成18年に那賀川町・羽ノ浦町と合併し、面積280km<sup>2</sup>の中に77,000人の人が住んでいます。産業について、第一次産業としては、タケノコ、早場米、スダチ、魚のハモなどが有名です。第二次産業については、光とエネルギーのまちとして、信号機でよく見かける青色発光ダイオードで有名な日亜化

学工業があり、南へ行くと石炭火力発電所があります。第三次産業としては、古い商店街はシャッター通りとなっていますが、郊外には大型店が進出しています。その他、発光ダイオードで作った巨大なマンダラドームは各種イベントに使われ、竹人形も特産品の一つです。

阿南市は季節ごとに様々なイベントや風物詩があります。川には、椿町ではヒウオと呼ぶシラウオの漁が行われたり、海では海の幸がたっぷりとれる地引き網が体験できたりします。夏になると商店街を中心に阿南の夏祭りが3日間行われます。期間中、地元小学校のパレードや阿波踊り、花火などで賑わっています。秋になるとあちこちの神社で秋祭りが行われます。各地に花の綺麗な所もたくさんあります。冬になると発光ダイオードを使ったクリスマスイベントが行われます。また2月になると梅が咲き明谷梅林という梅の名所もあります。これ以外にも“光のまちあなん”を全国にPRするための“光のまちステーション”

ラザ”が、四国アイランドリーグ plus で総合優勝した徳島インディゴソックスのホームグラウンドとなるアグリあなんスタジアムもあります。

それでは、このような阿南市にある災害文化・防災文化について話をさせていただきます。災害文化・防災文化とは「災害から命や財産を守るために先人が残してくれた知識・知恵であり、昔の人からのメッセージ」と言えます。最近ではこのような知識を防災計画に活かす傾向があります。

まず、阿南市周辺の気象特性ですが、24時間雨量は日本ランキングのトップ3を占めています。日本の平均降水量1700ミリ強に対して、これらの雨量がいかに多いかが分かります。また1時間当たりの雨量も日本ランキングの上位を占めています。このように阿南市周辺では一過性の雨が多い地域となっているため、その影響により洪水につながる場合があります。阿南市の災害は、洪水以外に地震や津波についてもあります。これを見ても分かるように、100～150年ごとに襲ってきていることが分かるかと思えます。

洪水に関する災害文化について説明します。那賀川においては、洪水から堤防を守るため、江戸時代の遺産となっている“大岩”、明治時代以降には“ガマン堰”がありました。また地名にも「島」「津」「浦」「池」など水に関する名前がたくさん残っています。当たり前のことですが、台風通過後は西風・北風に変わるということも言われています。科学的根拠はありませんが、下に書かれた三つのように、鳥・昆虫・植物に関連する言い伝えもあります。

目に見えるものとしては、洪水から人や財産を守るため、石垣の上に家を建てたり、一階部分に教室を設けないピロティ形式の学校があつたりします。次に地震・津波について説明します。聞いたことがある方もいるかもしれませんが、地震

後、海の水が引けば津波に注意しなければなりません。東日本大震災の時、リアス式海岸で湾が入りこんでいたため津波が高くなったといわれているように、V字型入江の津波は高くなります。津波の情報が伝えられると、家の前後の戸を開けるという言い伝えには興味ありますが、これは家にかかる抵抗を小さくするためと思われます。先日山口県の土石流災害時にもよく似たことがあり、施設が流されないように建物の扉を開けて被害を少なくしたというニュースも聞きました。東日本大震災の時、古い神社や碑文がある場所は津波災害を免れたということを知りました。そのため地元阿南市でもそのような傾向にあるかを調べました。この高さを見ても分かるように、本殿の高さは津波履歴よりも高い所にあります。

それでは、現在いろいろな取り組みが行われていますが、今後防災文化になりそうと思われる試みについて学校周辺で調べてみました。このように、海面からの高さを電柱に書いてあるものや、海拔の高さを書いてある看板が本校の目の前のバス停近くにありました。最近では標高とともに海岸からの距離を表示するようになりました。道路に県庁からの距離を表示しています。ひまわり誘導灯は阿南市の避難場所の方向を示しており、夜でも光るようになっているため、災害が夜に起こっても安全に避難できるようにしています。津波が発生すれば高い場所へ避難しなければなりません。避難タワーや防災公園もあります。またこの公園のベンチは、災害の時に竈（かまど）として調理できるようになっています。

皆さんも、地域に残る災害・防災文化を調べ、防災計画に活かすのはいかがでしょうか。ご清聴有難うございました。

## 講演

### “ふるさとで生き切るために”

こんにちは、私は防災士の小川美紀と申します。まだ防災士として二年目の未熟者ではございますがよろしくお願ひします。私は昭和30年11月24日阿南市福井町に生まれました。この福井町は、全国でも有名な1時間当たりの降水量の多い町で、私も実際に被害に遭った一人です。そして20歳で結婚し、28年間福岡で生活しましたが、夫が他界したためふるさと徳島に移り住んできました。現在阿南市那賀川町に住んでいます。この那賀川町は海も近く全体が平地で高台がなく津波がきたらひとたまりもありません。子どもは三人で、次男は障がいを持っているため、近くにある“公方の郷 なかがわ道の駅”の喫茶店“きらきら星作業所”に通っています。



講師  
小川美紀

さて、私にとっての3.11ですが、私の夫は平成13年3月11日に亡くなり、東日本大震災が起こった日は夫の10年目の命日でした。これはただの偶然でしょうか。夫が私に何かメッセージを送っているのではないかと思いました。それから平成15年7月18日、実家がある福井町の集中豪雨で、福井川増水のため、ダムが放流が夜中にあり、早朝母が気付いたとき、納屋が60cmも浸水していたそうです。引越しのため預けていた3トンもの大切な本を失ったのです。災害によって私はとても悔しい思いをしました。

それで私は防災士を目指すことを決めました。防災士の講習内容は防災の知識や技術を得るための講義が多かったのですが、東日本大震災直後だったので、災害時や取材時の動画・写真が多く

てとてもリアルでした。この講習で初めて知りましたが、私は人のために自分の命を捨てて他人を救助するのが防災士の仕事だと思っていたのですが、「まず自分の命は、自分で守ること、それから人を救助すること」と説明を受け、当たり前のことながらすごく印象的な言葉でした。

防災士の資格を取得してからは阿南市防災士会に参加し、防災に関する活動をしています。また、阿南市の動きを知るためと市への要望を出すために市議会の傍聴をしています。町内会では会長が兼任している自主防災会会長を今年からさせていただくことになりました。つまり、女性防災リーダーとして活動することになったのです。防災士になる前には、防災訓練も行事をこなすだけの町内行事と考えていたのですが、資格を取ってからは一人ひとりの命を災害から守るために何が必要かを考えるようになりました。活動としては、阿南市の最新情報の収集、講演会、防災グッズの紹介、消火訓練、救命講習、炊き出し訓練などが挙げられます。

最近では携帯スリッパや防災頭巾の講習、ロープワークの講習を行いました。町内会だけではなく、小学校の子どもたちにも紹介して指導をしています。小学校は私たちの地区の避難場所です。私は塾を経営しています。それを活かし、小学校のT.T.ボランティアをして6年目です。昨年は小学校の避難訓練に参加させてもらい避難場所の確認ができました。また次男の通っている“きらきら星作業所”でも障がい者を対象に防災学習と避難訓練を行いました。

私が防災リーダーになっての町内会活動の目標は月1回の避難訓練です。目的は災害に備えての準備、住民のコミュニケーションの場所として行っています。定期的に行うことで災害時すぐ持ち出せる非常用リュック、ヘルメットや防災頭巾、ライフジャケットなどを準備しておけるから

です。そして避難場所に集合することで、住んでいる人たちの顔合わせやお話が自然にできます。また女性の活躍にも期待しています。スピーカーでの放送は女性の声が聞き取りやすいと言われ、避難訓練の呼びかけをお願いしています。いつ災害が起こってもいいように、早朝・夜間訓練等、時間帯を変えて行っています。訓練に参加された方には、保存水や保存食、防災グッズの配布をし、参考にしてもらっています。80世帯ぐらいの町内会ですが、毎回40人前後の方が参加され、格好も様になってきました。中には避難用の高台建設の設計図面を描いて持ってきてくれる方も出てきました。これからの予定は、保存食、炊き出し用食事の試食会、災害経験者による講演会などを考えています。自分の命を守るための訓練だということで住民の方も真剣に取り組んでいます。そして町内会では、今年も女性防災士が誕生する予定です。看護師をされている方が仕事上勉強したいと言われ、現在防災士の講習会に行っています。防災訓練にも進んで参加し、協力してくださっています。

行政への要望ですが、那賀川町は始めにお話をしましたように海に近く広い平地です。そこで空地や耕作放棄地などを利用して高台を作って欲しいと要望を出していたのですが、既に市の方では要望を受けて動きが出てきています。歩道橋型避難タワーなども考えているようです。

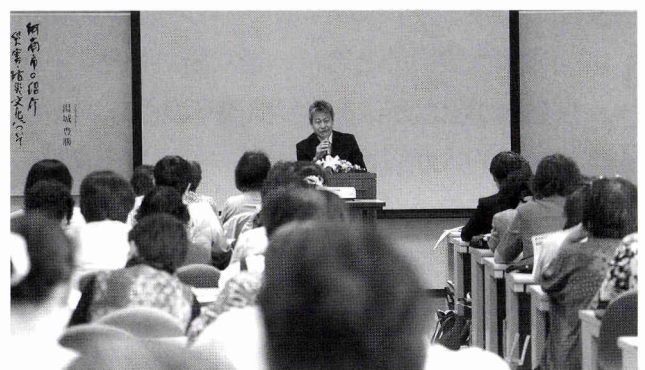
女性の視点で考えますと、災害弱者という言葉も聞かれると思います。実際プライベートルームがないために起こる避難場所でのレイプ事件なども耳にします。例えば、乳児を抱えている母親が授乳できる場所、女性は特に生理の時などはトイレに困ります。知的精神障がいの方は場所が変わることや大勢の中ではパニックを起こすことがあります。病気や高齢者の方もそれぞれ個室が必要だと思います。だから、段ボールなどを使い、プ

ライベートルームを作っていかなければならないと考えています。また病気や高齢者の方々の運搬方法についても工夫と訓練が必要だと思います。

それから先程女性防災士を目指している方のお話をしましたが、看護師・介護士・ヘルパー・支援センター指導員などやはり女性の思いやり、気遣いや心遣いが必要ではないでしょうか。女性らしさを活かし、運営リーダーも女性がいいのではないかと考えます。今年五月に、内閣府から災害前後の活動については女性がリーダーとして運営する方がスムーズにいくと発表されています。

今後の課題ですが、災害が起こっていないからと無関心だったり防災訓練を単なる行事だと思ったりしている方が多いと感じています。行事の消化だけに終わらず女性としてアイデアを出し、どんどん活動していける場にしていかなければならないと思っています。また私たちの地区は1/4位が高齢者世帯です。要援護者を多く抱えている地区はどのように避難すればいいのでしょうか。そして備蓄品を用意するための資金作りはどのようにしたらいいのでしょうか。皆さんに考えて欲しいと思います。

最後になりましたが、この発表だけではないのですが、一年間いろいろな勉強会をしてみたいです。ご協力して下さった方にこの場をお借りしてお礼申し上げます。どうもありがとうございました。これで私の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。



## グループ討議

※参加者が8グループに分かれて、各自の事例・意見発表や討議をした。

討議内容発表（要旨等箇条書き）

### ◆第1グループにおける意見等

- ①避難場所については、女性の意見、女性の視点が必要になってくるのではないか。
- ②女性からの視点が活かされ、生理用品やアレルギーを持っている乳児に対応するミルク等の備蓄もしているとの発表があり参考になった。
- ③男性では気付かない提案が女性からされることは重要である。
- ④女性から意見を出せるのが当たり前という環境づくりが重要である。
- ⑤炊き出しは女性の仕事ではなく、男性の参加も必要である。
- ⑥防災についての次世代への教育も重要である。
- ⑦防災士の資格がもう少し取りやすくなる環境整備が必要である。
- ⑧防災士の資格のより一層のPR（広報）も必要である。
- ⑨一人ひとりの意識を高めることが大事である。

### ◆第2グループにおける意見等

- ①火事の時、女性だけではポンプを使う消火活動ができなかった体験がある。女性も色々な防災知識を身につけておくことが必要である。
- ②東日本大震災のときに、遠く離れた地にも津波警報が出たが、あまり危機意識がなかった。
- ③家族や知人が災害に遭った。普段から女性の視点での備えが必要である。
- ④防災訓練で炊き出し等をする女性はいるが、「女性のリーダーになってください」と呼びかけても成り手がいない状況があった。



- ⑤高齢者、弱者、要援護者等の方々にも、普段から防災意識をもっていただくための呼びかけをしている。
- ⑥自治体の防災計画の見直しのための会議に、四名の女性委員の登用を実現させた。防災の意思決定の場にも女性が必要である。
- ⑦町内会、自治会等の地域の意思決定の場においても女性の参加が大切である。
- ⑧防災に限らず、常日頃から男女共同参画の視点を広げることが重要である。
- ⑨自治体の男女共同参画プランの中に防災に関する項目を必ず入れることにしている。

### ◆第3グループにおける意見等

- ①被災経験した人の防災意識が高いが、経験のない人の意識は低い。
- ②地域のコミュニティが大事であるが、最近は夏祭り等もしていないので当地域の防災に疑問や不安がある。
- ③地域の一人暮らしの高齢者を訪問している活動があるが、女性の視点に立った行動がなされていると感じられない。
- ④防災の女性リーダーは絶対に必要である。数を増やすためには、女性が防災士の資格を取ることも必要ではなかろうか。
- ⑤女性が看護師、介護士等の資格を活かし、それから女性リーダーを増やすのがいいのでは



ないか。

- ⑥男女共同参画の視点を防災計画とか関連マニュアル等へ書き込むことが課題である。
- ⑦女性の防災リーダーを増やすため、知識の啓発も重要である。

#### ◆第4グループにおける意見等

- ①防災手帳には服用している薬を書き込んで携帯する。
- ②災害の経験のある人から傾聴して、女性がどのように関わるかを考え、できることから実行していくと良い。
- ③食料は最低でも3日分の備蓄が必要である。
- ④普段からの取り組みが重要である。
- ⑤防災訓練において、女性からも積極的に声を上げるべきである。
- ⑥女性が声を上げるためにも女性防災リーダーを育てることが肝要である。
- ⑦自分を守る。家族を守る。地域を守る。

#### ◆第5グループにおける意見等

- ①女性防災リーダーの必要性を、この会議において理解できた。
- ②防災訓練のとき、羽釜でのご飯炊きを男子高校生にやってもらうことで男女共同参画につながる。
- ③防災対策というように考えず、もっと女性が暮らしに根ざして活動することが災害時にも生きてくる。
- ④女性がリーダーになれるかどうかは、女性が発言すること、自らが動くことである。

#### ◆第6グループにおける意見等

- ①女性防災リーダーの講習会として、AED操作、避難所伝言システム、東日本大震災時に女性に起きた問題点についての話し合い、避

難所のパーティション設営、炊き出し、消火訓練等をして、認定証を受けた活動例がある。

- ②防災組織の会長職等に女性が少ないため、会議で女性の意見が通らないこともある。
- ③防災に関する女性の参画には、行政のバックアップや地域の盛り上がりが必要である。
- ④「防災は我が家から見直そう」ということで、消防の防火クラブに入ったり、防災の勉強をしたり、交流会を持ったりという事例がある。
- ⑤女性の防災参加について機運が高まった面もあるが、個人差、個々の温度差もある。
- ⑥女性は控えめだが、女性にしかできないこともあるので、もっと前に出て行きましょう。
- ⑦作りたいこと、したいこと等の情報発信をすることが必要である。
- ⑧防災訓練は、参加・体験が大事である。
- ⑨政策決定の場に女性が進出していける社会になって欲しい。
- ⑩気配り、心配り等女性としてできることはたくさんある。

#### ◆第7グループにおける意見等

- ①地元での日頃のコミュニケーションが災害の際にも活かされる。
- ②障がい者、高齢者、外国人も災害弱者になる。災害ノートにも細かな視点が要求される。
- ③昼間に災害が起きた場合、地元地域にいるのは男性よりも女性が多いため、救助活動は女性が中心になる。
- ④リーダーは男性、女性は炊き出しというような固定的役割分担の考えを改めることが必要。
- ⑤様々な人たちが発言することでお互いの意識が高められる。
- ⑥女性だから、男性だからという考えではなく、みんなが同じように幸せに生きていける

ような社会を考えていくことが大事で、そのための学ぶ場が必要である。

#### ◆第8グループにおける意見等

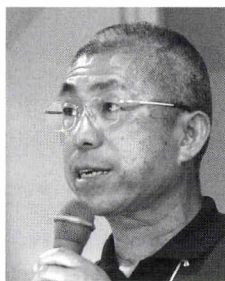
- ①比較的安全な所の住民は防災意識も低いようである。
- ②災害に関する課題が多い所では、様々な要因に応じた避難訓練等をしている。
- ③特にこれからは、女性のリーダーが必要である。
- ④各種委員会等における女性の登用率の向上は大事である。
- ⑤実際に3人の子どもと一緒に避難した経験があるが、避難先に女性リーダーや女性の対応者がいたら、頼りになるし安心する。
- ⑥防災組織において女性リーダーが必要という課題を持つ所もある一方で、地域を取りまとめるべき自治会組織自体が壊れていて憂慮している。
- ⑦女性が防災リーダーになることで、悩みを抱えた女性の新たな相談先になることもある。
- ⑧行政は当てにならないから、まず自助で、その次に共助。災害が起これば、リーダーも被災者となるので、そのことも想定して対応策を作っていくのが本当のリーダーである。

#### 講評

### 女性防災リーダー育成のために ～災害前後に女性の視点を～

何故 防災に女性の力(視点)が必要か?

- ①災害特に大規模災害発生時、甚大な被害と膨大な避難者への対応が必要
- ②自治体も被災し、主体的



講評者  
**山崎忠雄**



な避難所運営は困難→自主防災やボランティアの協力必要

- ③避難所生活の一番の問題点：プライバシーがないこと  
 プライバシー：高齢者、乳幼児、妊婦等、トイレ、更衣室、間仕切り、ベット等
- ④上記 避難者・プライベート、メンタル等に配慮できるのは 男性より女性
- ⑤避難所運営は、女性が責任者等の役割を担うのがベスト

何故 女性防災リーダーが必要か?

- ①避難所運営の責任者は自主防災会の会長が適任（避難所＝ミニ町内会）
- ②平時から自主防災組織において会長や副会長に女性になることが必要

平時：女性が自主防災会会長や副会長だったら何が変わるか?

- ①画一的な訓練でなく、女性の視点にたった訓練ができる  
 例：防災頭巾の作製、間仕切り作製・避難所生活体験、炊き出し等
- ②備蓄防災倉庫の必需品等きめ細やかな配慮ができる
- ③お隣さん等情報収集能力が秀でていて、要援護者対応が確実
- ④日中の大規模災害発生時も共助・協働のリーダーになれる
- ⑤とにかく苦境（＝災害）に強いのは女、男はあかん

総括

「やっておいてよかった」(安堵)  
「やっておけばよかった」(後悔)

いかがでしたか。本、女性会議でのモットーは「小さなまちの大きなチャレンジ」でしたが、この部会で目指したものは、「無理な背伸びはしない、身の丈に合った方式、手づくり、みんなが主役」でありました。そして何よりも一番の大きな目的は、会議に向かってみんなで勉強をし、会議後はそれぞれが地域の防災リーダーに育つことを合言葉にやってきました。まさしく、今からが私たちのスタートです。お陰さまにて皆様方からもたくさんのヒントを頂きました。今後の防災活動に活かしたいと思います。特に私の感じたことは「命と愛」についてでした。命の尊さはもちろんです。すべての人がしっかり生きていかねばなりません。まさしく問題提起の演題「生き切る」、何があろうとも生き切る覚悟とと思います。また愛については、自分への愛、他者への愛、ふるさとへの愛、これが防災でよく云われる「自助、共助、公助」ではないでしょうか。さらに「人」という字です。長い棒と短い棒が支え合っているのです。男性も女性もありません。強者や弱者もありません。お互いが支え合っているのが「人」の社会です。これが災害時に必要にな



コーディネーター  
湯城豊勝

るものと思われます。最後に、人生・防災に関して次のような言葉で結びたいと思います。「やっておいてよかった」(安堵)「やっておけばよかった」(後悔)、さて皆さんはどちらを選びますか。これにて終了します。多大なご協力に感謝します。

【御礼】湯城 今回の会議での長は、各方面からのご協力により展示コーナーも充実していたことです。それぞれの立場における活動・取組報告、防災食・防災グッズの展示が素晴らしかったです。提供品も多々ありました。企業の方、小中高・高専の教育関係、公的機関等バランスのとれた展示内容になりました。ご協力頂きました、株式会社丸本、(有)正和製作、株式会社谷商店、(株)フジタ建設コンサルタント、FM徳島、坂野小学校、津田中学校、海部高校、阿南高専、阿南市、徳島県、国交省那賀川河川事務所に厚くお礼申し上げます。

さらには、生花を飾って頂いた森田多恵子様、県展特選の腕を活かした毛筆で講演の演題や机上札を作成していただいた本校専攻科の田村元帥君によって会場が一段と華やかに、かつ引き締まりました。お世話になったすべての方々に御礼を申し上げます。最後に、今回展示の協力を頂いた坂野小学校と津田中学校は、防災教育に取り組んだ学校や団体を表彰する「ぼうさい甲子園」(1・17 防災未来賞)において、平成 26 年 1 月 12 日に優秀賞を受賞されたことを付記します。



第3分科会 (子ども)

つむぎたい!! 今と未来のおとなたちに

～あなんで変わらにゃ そんそん～



コーディネーター  
**遠矢家永子**

NPO 法人 SEAN  
副理事長・事務局長

パネリスト  
**服部大輔**

パパサークル  
「お父さんといっしょ」代表

パネリスト  
**堀江敦子**

スリール株式会社代表取締役

パネリスト  
**本浄敏之**

NPO 法人  
赤い屋根上板事務局長

基調講演

自ら紡いでいく縁によって次世代の子どもたちを育てていく社会を

**遠矢** SEAN とは Self Empowerment Action Network の頭文字です。「私が私の力を信じてアクションを起こし、ネットワークでつなが



コーディネーター  
**遠矢家永子**

ていましょう」という意味を含めて活動をしています。すべての人が存在意義を持ち、その力が活かされ、認められ、発揮できるような社会を目指すというのが私たちのミッションです。

1997年に保育グループとしてSEANを立ち上げました。私たちは、女性が家の中でやってきた保育というものをキャリアとして位置づけ、有償ボランティアとして労働対価が発生するようなシステムを作りました。

SEANでは子育て支援ではなくて「自立支援」という位置づけで保育をやっています。

2001年に「子育てママのおしゃべり広場」と「ぐちぐち電話相談事業」というのをしました。当時DV法が出来たところだったのですが、子どもについての悩みだと言いながら、話をよくよく聴いてみると毎日夫からなぐられているという話がでてくる相談が多々あり、ジェンダー平等教育をして、そういった問題を予防していくべきだという考えにたどりつき、2002年にプログラムを開発しました。

子育て期の親たちには、つながりと学びの場が必要です。子育て中はすごく閉鎖的になるし、初めての子育ては本当に戸惑います。昔は良いとされていたことが今はそうではなかったり、子育ての考え方もどんどん変わっているので、何をどうしていったらいいか分からなくなってきます。そんな時に頼りになる人が身近にいない。そして子どもを通して自分の生育歴に直面するのです。特

にひどい状況の中での生育歴をもっておられる方は、常に子どもの中に自分を投影してしまうので、子育てをしていくのが本当につらいという状況に陥ります。もう家族だけで次世代の子どもたちを育成するのは無理なのだということをいろいろな場面で私は感じています。

子どもを育てる時期とは一度着込んだ価値観を脱学習していく時期です。子どもを育てながらもう一度着込んだものを外して、新しく考え直していく時期なのです。そんな貴重な大事な時期を母親ひとりだけではなくて、お父さんもおじいちゃんもおばあちゃんもいろいろな人が、子どもを通してもう一度自分と向き合う作業ができれば、もっと豊かな社会になるのじゃないかと思います。

常日頃私がやっている研修では、最初に人権の話をしていきます。日本国憲法第13条には「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」とあります。命が守られ自分で決めていくこと、そして幸福追求、私にとっての幸せはこれですと自分で決めて、それに向かって自分で人生を切り開いていくことを人権として保障しますということです。公共の福祉に反しない限りってことは、誰かの幸せを踏みにじらない限り、それぞれの幸福や自己選択が認められますよ。そして命を継続していく衣食住も保障されるということです。ありのままの私がいてその私が自分の幸福感を勝ち取る、そして自分で選んでいくことを人権として保障しているということは、これが行使できる大人として私たちは子どもを育てないといけないということです。

子どものエンパワメントのためには、子どもが条件抜きで尊重され、存在意義を実感できる体験が必要です。子どもが一人前の大人として成長するために、子どもの権利条約というもので守られ

るべきですね。これは1989年に国連で採択され、1994年に日本で批准されています。何が書かれているかというと生存と発達と保護と参加なのです。参加というのは主体性を持つということです。子どもが自分の意志で自分を表明する。それは何も子どもの言いなりになるということではないのです。子どもが自分で考えて意志を表明する。そして大人との合意形成のもとで子どもの人生についていろいろ考えていくのだということです。

ところがこの条件抜きで尊重されるというのがなかなか実現できていません。条件付きでということのほうが多いです。この条件付きという考えの中にジェンダーという問題が入り込んできます。実は私たちは性別規範というものを、ものすごく取り込んでしまっているんですね。中学生の子どもたちのアンケート調査を見ると、女に期待されることは、1番家事、2番子育て、3番思いやり、4番身だしなみ、5番礼儀作法です。男に期待されることは、1番力仕事、2番収入、3番頼もしさ、4番スポーツ、5番決断力となっていて、本当にコインの裏表のような状態です。年々悪化しているような気がしています。メディアやいろんなところでジェンダーの刷り込みがあって、こういった役割分業意識を着込んでしまっている子どもたちが非常に多いというのが私の実感です。

女性が男性から守られる弱い存在として押し込まれ、他律という関わりの中で、一人前の男と男を支える女に仕立てあげられ、そこで子どもを育てていくというのがジェンダー規範です。女は優しく、男は強く、血縁、家族責任みたいなものをすごく重視しています。画一化ですね。病気があって働けない男性もいるし、この役割の中で収まりきれない人もいっぱいいるのに、これをよしとしてしまうことが多様性を否定してしまうこと

になっているということです。

人権規範のほうは子どもを自立させていき、責任ある大人になってもらいます。その責任ある大人が子どもを養育し保護していきます。人として強く優しく、次世代の責任をみんなで分担していくのです。多様性、いろんな家族があっという間ということですね。それが人権規範ということなんです。

では、自立と依存と聞くとどっちがいいと思いますか？ 追手門大学の落合先生は、自立と依存はコインの裏表ではなくて連続したものだと言っています。赤ちゃんは大人に依存していますが、この依存した状態を分化していき、一人との密接な依存関係を、もっといろんな人との依存関係に広げていくことが自立だと言うのです。私たちは死ぬまで誰かと依存関係にあります。助けを求めたり、支えあったりしている依存関係をいろんな人とつなげていくことが自立であるというわけです。

ジェンダー視点で見ると、女子には依存は許されるけれど自立はあまり期待されない。男子には自立は強要されるけれど依存は許されない。このいびつさがいろんな問題を生み出しているということです。男子は彼女に対して気配りや優しさを求め、女子は彼氏に対して頼もしさや優しさを求めています。男女平等教育が進んでいると言われてはいますが、意識のほうはすごく後退していて、恋人関係になった時に彼氏役割、彼女役割というのが相互にジェンダー化しているというのが現状です。それがどこから生まれるかというメディアの影響が大きいですね。

ジェンダー規範が何を生み出しているかというと、一つはDVの問題です。子どもの育ちの中で父親と母親の関係に支配構造があると子どもの生育歴に大きく影響を与えます。日本では

直面する現実社会で必要となる大人の責任力

- ◆ 人生100年、経験したことのない時代の到来
- ◆ 地方分権推進一括法…2000年4月施行
- ◆ 少子高齢社会
  - 税収入の減少
  - 家族形態の変化等による福祉ニーズの多様化と増加
  - 経済の悪化
- ◆ これまでの社会システムの老朽化と限界
- ◆ 血縁・地縁・社縁の崩壊、三万人を超える無縁死

市民協働・市民自治  
自助・公助・共助  
新しい公共（2010年）共助社会づくり（2013年）  
新たな自縁づくり  
「助けて！」と言える地域社会

4日に一人、妻が夫に殺されています。ジェンダー規範というもので役割分業していく中で、こういう悲しい事件が後を絶たないというわけです。一方、男性も追い詰められています。自殺者は圧倒的に中高年の男性が多いですよ。経済力を男性に求め、家のことを女性に求めていく中で、今の不況下で、リストラにあたり、倒産したり、妻子を養えなくなった男性が自殺しているということです。また児童虐待の問題もあります。虐待を英語でアビューズと言い、abuseと書きます。abは何々から離れるということで、useは使う、ですよ。大人は子どもから見れば権力者、強者であり、この力を使って子どもを養育したり、保護したり、教育したりしていくのですが、この力を乱用したり、誤用したりすることがアビューズなのです。生活費の責任は父親に、子育ての責任は母親に押し込まれることで、男性の自殺があり、母親から子どもへの虐待が起こり、その中で男性が女性にDVをしているというような図式が見えてくるわけです。

これまでの社会システムは老朽化し、限界にいたっているのが現状です。血縁地縁社縁は崩壊していますし、3万人を超える無縁死というのが起こっており、5時間に一人餓死をしているというデータもあります。これが日本の実態なんです。

その中で私たちは市民協働とか、助け合いをしながら、次世代の子どもたちを支えていく、大人みんなが手を携えて子どもに関わっていくことをやるべきなのです。またそれが豊かなことになっていくのです。自助公助という言葉がありますが、私は自縁づくりをしていきたいなと思っています。血縁地縁社縁でなくて自縁です。自ら紡いでいく縁によって次世代の子どもたちを育ていく社会を私たちが作っていくということです。

この後、いろいろな形の事例を発表していただく中で、みなさんも一緒に考えていただけたらと思っています。お互いを助け合い、「助けて」と言えるような社会を目指していきたいと思います。

## パネルディスカッション

**遠矢** 今から3人の方たちにこれからの新しい子育ての形を報告していただき、未来に向かって、私たち一人ひとりに何ができるかを考えたいと思います。はじめにそれぞれの活動の内容や想いを話していただきます。

## 自分たちのやれる範囲でゆるやかに

**服部** 4人の子どもを持つ普通のサラリーマンです。父親と子どもが参加できる親子イベントを企画運営しています。



パネリスト  
服部大輔

「三輪車の1時間耐久レース」をやった時には、大人と子どもが本気を出し合っ、すごく盛り上がりました。

活動を始めるきっかけとし

ては三つあり、一つ目は違和感と偏りです。

参観日とか病院に行くとき母親の割合が多く、母親目線での子育て環境でもあり、父親の私にとっ

ては物足りないところとか、淋しいなと思うところがありました。

二つ目は妻が一卵性の双子を出産した時に半年間入院し、育児と仕事の両立ということが自分の身にふりかかってきて、育児の大変さを痛感したことです。三つ目は同じ想いの仲間がいたということです。

活動について感じていることは、「優先順位を間違えたら大変」ということと、バランスが大事だということです。「三輪車レース」の時ですが、あまりにもものめり込みすぎて、妻から「他の家の子どもを見るくらいだったら自分の子どもを見てよ」とよく言われました。

やりすぎて入院してしまったということもありました。また活動当初はすごく高い志を持っていて、月2回は集まろうとかNPOを目指そうとか意気揚々と頑張っていたんですけど、やっぱりどこかで疲れてしまい、このままでは団体を継続できないということで、今は自分たちがやれる範囲でゆるやかにやっています。継続することが一番大事だと思っています。

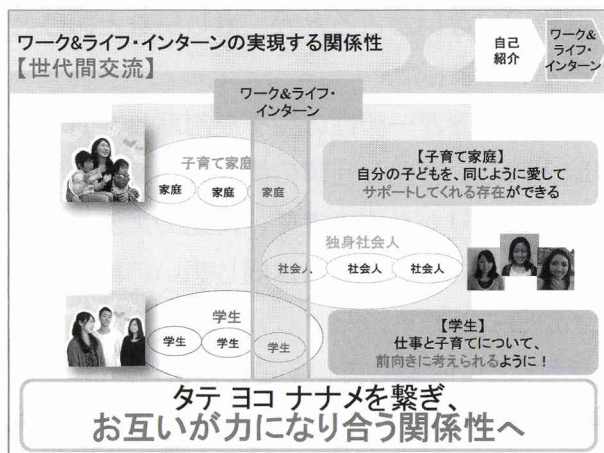
## ワークライフインターン事業を起業して

**堀江** 私は今28歳なのですが、25歳の時にこの会社を立ち上げました。子どもが大好きで中学時代からベビーシッターをし、大学では社会



パネリスト  
堀江敦子

福祉を学びました。某IT企業でマーケティングリサーチ業務を3年半し、2010年8月に会社を退社、11月にスリール株式会社を設立し、ワークライフインターン事業というのを実施しています。



スリールというのはフランス語で笑顔という意味です。自分らしいワークライフの実現というのを会社のミッションとし、誰もが自分らしい人生を生き、笑顔で子どもを育てられるそんな社会を目指しています。

ワークライフインターンというのは、大学生が共働きの家に出向き、子どものお世話をし、それを通じて働くことや子育てすることをリアルに学んでいくというインターンシップです。学生にとっては、キャリア教育になり、家庭にとっては子育てサポートになります。また学生たちが子どもにかかわることによって、子どもを産んで育てたいと思うようになり、そのことが少子化対策にもつながっていくと考えています。こうした3つの課題を解決していくものとしてソーシャルビジネスとされています。

学生たちは将来に対して漠然とした不安を持っています。でも子育てをリアルに体験し、10年先の先輩にあって話を聴き、更に話し合える仲間ができたことによって、自分の目指す方向性が見えてくるようになるのです。それが自信に変わり、「私にもできるかもしれない」というふうになっていきます。また家庭のほうも変化するのですね。学生と話をすることによって自分自身の振り返りの時間を持てるようになったり、今までは会社と保育園と家の往復

だったのが、子どもが大学生のお兄さんやお姉さんと楽しく過ごしている時間を親自身の学びやリフレッシュの時間に変えていこうと考えるようになるのです。

その結果気持ちに余裕ができるので、子どもにも夫にも優しくなれるし、子どもを預けることが罪悪感ではなく、社会貢献とか楽しみに変わっていくということなのです。

このように学生、社会人、家庭と今までバラバラだったものをインターンという形でつなげることによって、お互いが力になりあう関係性となり、世代間交流になりました。

学生時代に働くことや家庭を持つことをイメージし、笑顔で子育てができる人が増えていってくれたらいいなと思っています。

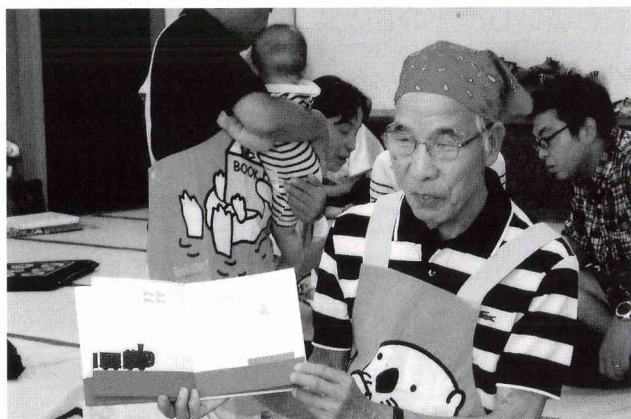
## 母親父親の子育てサークルが連携して活動



パネリスト  
本浄敏之

**本浄** 地元の中学校在学が大変荒れていた時、黙って先生方や学校の応援をしようということで、平成14年に「上板教師OBOG会」を発足し、その後「上板あいいく会」という名前に変えました。母親の自主交流グループ「クロー





バー」子育て行事の時にお互いに手伝いあう「上板子育て支援ボランティア」母親の子育て自主交流サークル「いちごミルク」父親の子育て自主グループ「カルアミルク」この5つの団体がいっしょに連携をはかりながら、活動をしようということで「NPO 法人赤い屋根上板」を立ち上げました。

活動としては、親子体操をしたり、絵本の読み聞かせをする「親子の交流活動会」田植え、稲刈り、もちつきをし、みんなで食べる「子ども総合体験活動」発達障害の子どもを持つ母親を対象とした「子育て教育相談活動」中学校の除草、樹木の剪定をする「学校環境美化支援活動」などを行っています。中学校が非常に厳しい状況だった時に、黙って協力しようということで、まずは環境からと空き缶拾いということから始めて、地域住民がいっしょになって活動を続けています。

**遠矢** ありがとうございます。パネリストのみなさんで互いに何か聞きたいことがありますか？

**服部** 働きながら家事育児やると時間も心のゆとりもないというのが現実なのですが、おじいちゃん、おばあちゃんが家に来てくれると子どもがすごく喜ぶんです。本浄さん、おじいちゃん、おばあちゃんの役割の中で子どもとの関わりをどういうふうに考えているか聞かせてください。

**本浄** 祖父母世代には時間があり心のゆとりがあ



ります。現役の時はよく怒っていましたが、今は子どもを褒めるということができるようになりました。「おまえ、よう頑張るとるな。その頑張りが素晴らしい」とか言ったり、プレゼントを渡す時にちょっとコメントを書いたりもします。子育ての現役を退いたじいちゃん、ばあちゃんは孫育てということで、さわやかに応援ができるかなと思っています。子どもにかかわる活動は楽しいし、子どもと話が出来るということで元気が出てきます。この子どもが小学生や中学生になった時にはどうなっているんだろうと思うと心が沸きたつような感じになります。

**遠矢** 子育て中の人たちは余裕がないし時間がないですよ。活動を通して現状の子育てにはどんな問題点とかどういうしんどさがあると思いますか？

**服部** 仕事も家庭もばりばりやりたい思いはあるんですけど、子どもがいるとしないといけないことがたくさんあって、学校行事やPTAとか地域活動とか、色んな事を女性は今までよくやってきたと思います。

国際競争が激化ということをよく会社でも耳にするんですけど、これは家庭にも子育てにもやっぱ影響が出てきていると思います。頑張っただけではだめなんです、成果を出さなければいけない。

そうなると心の余裕がなくなって、夫婦喧嘩

になってしまったり、子どもにきつく当たってしまったり。この前PTAの清掃活動をさぼってしまったんですけど、地域活動も億劫になってしまったり、更には自分の時間が持たなくて、ちょっと体調を崩してしまうということもあったり。成果を出さないといけないとなると、体も疲れてしまう、こういうところが課題になるかなと思っています。

**遠矢** 成果ってなんですか？

**服部** やっぱり稼ぐということですね。

**遠矢** それやめませんか。結局妻子を養うというのを全部引き受けた上で子育てもということ、やるが増えてがんじがらめになっているわけですね。それが子どもの育ちにプラスになるのでしょうか？堀江さんとか本浄さんが違う形での関わり方っていうのをご提案されましたよね。では子どもを成長させていくため子どもと関わっていった中で生まれてくる成果って何でしょうか。

**本浄** 子どもは地域の宝です。子育てというのは無償の取り組みであると思うのですが、子どもを育てる苦勞、その苦勞の中での喜び、それが私は自分の人生と重なりあいました。人生そのものが子育てではなかったかと思っています。子どもがはいはいをしたとき、歩き出したとき、子どもが入学した時とか、そういうような節目節目には、自分の人生の喜びも味わうことができる。子どもが受験する時には自分が勉強するわけではないけれど、いっしょに勉強したつもりでやっていく、卒業して子どもが結婚するということも私にとっては自分の喜びとなったと思っています。

**堀江** 子育てにおいて大変なのは、意識の問題なのかなと思っています。罪悪感があって「助けて」と言えないということです。人と関わることは楽しいこと、しんどい時には助けを求め

てもいいし、そのことに罪悪感を持たなくていい、一人で抱え込まなくていいと知ってほしい。いろいろな子育てがあるということ、また相談できる人を知るということも大切です。実際におじいちゃんに「助けて」と言ったらおじいちゃんのほうがよろこんでいるし、元気になっていることもある。学生に「助けて」と言ったら学生も楽しんでるし、学んでいる。お互いにいいことなのだと思うことがすごく大事だと思います。

**遠矢** 多分現状をそこから降りたいと思っても、そこから降りられない社会構造というものがあって、抱え込まざるをえない性別役割みたいなものがあるのだというところでの服部さんのご発言だったと思うんです。「将来のために今がある」というよりも「豊かに今をどう生きるか」ということが3.11の震災後、私たちにつきつけられていますよね。今、豊かにどう生きるのか、子どもたちの未来を考える中で私たちがどういう社会を目指していくのかということかなと思ったりします。ここで会場からのご意見なりご質問なりをお受けできたらと思います。

#### 質疑・まとめ

#### 意識を変えて行動へ！！

#### ～世代・性別を超えバトンを次へ～

**参加者** 株式会社、NPO法人、ボランティア、それぞれの形態の違いによるいいところと悪いところを知りたいと思います。

**参加者** 活動仲間の増やし方をお聞きしたいです。

**堀江** うちではお金を払ってでも必要とされる、他と比べていいものにすることを一番に考えています。またビジネスをやることによって、拡がりが増えていくと思っています。プラスなところは自分が思い描くことを中心にできるということです。行政とか顧問に何か言われたりするこ



参加者に今の思いや今後の行動について書いていただきました

ともなく自立的にやっていけるというところがいいです。マイナスは寄付には頼れないというところですね。自分でちゃんと運営資金を得ていかなければ確実につぶれてしまいます。また仲間を増やすためにはどういう会社にしたいのかという自分の想いを伝えていくこととそれを実現すること。小さい成功体験でいいのですが、ちゃんと実践して目に見えるような形にしていくことが大事だと思います。この人は実践する覚悟があるんだということ、みなさん集まってきてくださることがあると思うのです。まず想いを伝える。実践する。覚悟を持つということ、ずっと続けるしかないと思っています。

**服部** NPO 法人、株式会社という周りの期待に応えなければいけないというのが使命としてあると思います。うちは任意の団体です。自分ができることを提供するということを考えていけばいいというのがメリットです。デメリットは質が低いということです。限られた時間の中で、限られた人、物でやるし、お金はありません。だから人の助けを得るしかない。どれだけ人脈を築けるか、どれだけ横のつながりを持てるかということが非常に大きいと思います。仲間づくりについても、横の連携で協力を得るということですね。そこで見つけることができれば、次は勇気ですね。



未来のおとなたちのしあわせをねがって……

声掛け。そこでどれだけ想いを伝えることができるかということ。実際には声をかけたらやりたいという人はいるので、根気よく続けていくのが大事なかなと思います。

**本浄** うちメンバーの会費とリサイクル回収料でやっています。あとは夢基金、いろんな団体、財団に補助金申請をしています。行事についてはメンバーの負担にならないように、無理をしないで無理をする、出来る範囲で出来ることをするという感じです。参加メンバーに関しても無理強いはしないで、都合がついたときをお願いをするということをやっています。

**遠矢** みなさんといろいろな話をしてきましたが、意識を私たちがまず変える。そして必ずそれを行動に移していく。そして横につながっていく。世代を超え、性別を超え、バトンを次に移していく。みんなが手をつないで、具体的に行動に移していくということをこの分科会からは提案したいと思います。今日はありがとうございました。

第4分科会（まちおこし）

ひとひと 男と女 つないで灯す小さな光 拡げていくのも女と男



コーディネーター

**澤田俊明**

南環境とまちづくり・代表、  
徳島大学・客員教授

パネリスト

**萩野敦士**

阿南スケートボード協会(ASK) 会長

パネリスト

**武市篤浩**

宝田青年会会長

パネリスト

**福岡一郎**

加茂谷経祭り前実行委員長

パネリスト

**坂本真理子**

上勝自然体験学習研究会代表

パネリスト

**松本真樹**

樹CS阿波地域再生まちづくり代表理事

**日下分科会長** 「おまはら遠方より阿南へよう来たのう」これ阿波弁です。時々阿波弁が入るかもしれませんがお許してください。たくさんの方がおいで下さって、本当に感謝しております。

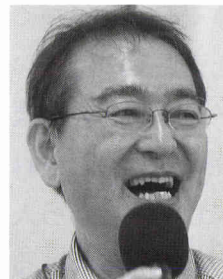
さて、秋祭りのシーズンです。村のお宮さん、八幡さんに本当はたくさんの方が出かけて賑わはずだったお祭りです。しかし今、八幡さんのお祭りに行っても、人は少なく賑やかさが消えています。地域社会が衰退しようとしているところがたくさんあります。この村を何とかしたいという思いで、イベントに取り組む人たちがいます。その思いを光ととらえ、地域で暮らす人と人とのつながりを再生したいと考え、「ひとひと つないで灯す小さな光、拡げていくのも女と男」という、この分科会テーマを掲げました。

しかし、まちおこしにつなげるには多くの壁があると思います。まちおこしにどうつなげていったらいいのか、ということをつ分科会で議論してほしい。そして少しでも、まちおこしに近づけた

らいいのではないかと考えております。

人と人が、認め合い支え合い助け合って補い合ってこそ、地域の再生があり、まちおこしができると考えています。皆さん、短い時間ですが、十分な意見を交換していただければと願っています。よろしくお願いいたします。

問題提起



コーディネーター  
**澤田俊明**

**澤田** ようこそ阿南市へおいでいただきました。コーディネーターの澤田でございます。今、お聞きしますとこの分科会には、全国からお見えでございます。

私は今、四国でいちばん小さな町の上勝町というところで、棚田オーナー制度事務局等々のいろんな取り組みをしています。

身近で小さな市民おこし活動 = 女性と男性のつながり  
(全国で直面しているテーマ)

- こんないいことが
  - 楽しい、地域に貢献、みんなの笑顔、感動
- わからない、どうしようもない
 

<ul style="list-style-type: none"> <li>- いろんなことが集中してしまう</li> <li>- 活動にお金が必要</li> <li>- 活動メンバーの情報の連絡</li> <li>- 一緒に活動するメンバーがほしい</li> <li>- 行政や地域自治会などの応援もほしい</li> <li>- 事務や経理もたいへん</li> <li>- 次の展開をどうするか</li> <li>- など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>役割分担</li> <li>継続的資金</li> <li>情報共有</li> <li>活動の参加者</li> <li>活動連携</li> <li>事務局</li> <li>方向性・合意形成</li> </ul>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------
- 特に「継続」「拡がり」 = 大切さ、たいへんさ

今回の2013年日本女性会議の、テーマとしては初めて「男女共同参画」というキーワードが入った大会です。この分科会で今日皆さんと議論したいのは、「身近な活動」です。大きな活動ではなく、身近な活動で市民の男性の方、女性の方が、身近な生活空間の中でやっていらしゃる活動。これがどうしたら続くのかとか、どうしたら拡がるのか、そしてその中で男性と女性のつながりはどうしたらいいのか。ここに焦点をあてたいと思います。

市民まちおこしの課題と可能性

スケートボード協会の取組み

**萩野** 2009年9月に県内で初めてスケートボード協会を設立し、2011年4月にスケートボード専用施設を完成。協会の目的はスケートボード人口の拡大とスケートボードを次の世代につなぐことです。



パネリスト  
萩野敦士

なぜ協会を設立したのか。阿南市には、スケートボードをする施設がなく、一般の公園や駐車場でしかすることが出来なくて、近隣住民や警察に注意を受け、思う存分に楽しむことができません

阿南スケートボード場 オープニングイベント

完成して終わりではなく、ここからがはじまり



でした。一緒に滑っていた仲間たちも「スケートボード場が欲しい。より多くの人に広げたい」そういった思いが芽生え、建設活動を開始と同時に協会を設立しました。

初めは、すぐスケートボード場もできようと思っていました。しかし、そんなに甘いものではありませんでした。その大きな原因のひとつは、スケートボードに対する世間のイメージでした。

最初にしたのは、2回にわたる署名活動です。建設賛成の署名を900人分集めて、阿南市長に届けました。私たちの熱い思いが届き、行政も動き出しました。当初の建設予定地周辺から反対の声が上がり、建設計画は白紙に戻りました。反対意見は、「子どもたちの学習環境の劣化になる」「空気が汚れる」等でした。

そのことをパートナーに伝えると「最後まで頑張り」と前向きな意見が返ってきて、これからの活動にも理解を示してくれました。

その後メンバーも再度奮起し、スケートボードへのイメージを少しでも変えていこうと「地域草の根活動」をスタートさせました。地元のお祭りや阿南市の祭等の裏方支援、地域清掃、スケートボード教室等を行う中で「スケートボード場ができるといいね」等と応援の言葉をかけてくれるようになり、地域とのつながりを感じる事ができ

ました。あきらめずに継続した活動3年、2011年12月ついに阿南スケートボード場が完成しました。

第1回滑竹祭では地域とのつながりを目標に「餅投げイベント」第2回は四国で初となる「女性クラスコンテスト」日本女性会議メンバーからは屋台販売をして資金の支援があり、新たな活動の拡がりとなりました。活動が本格化していく中で、家庭への労力、時間、金銭的な面での負担も大きく陰で支えてくれなければ継続は困難でした。男性だけが活動してきた中にもすでに、男女共同参画は始まっていることを日本女性会議をとおし感じる事ができました。

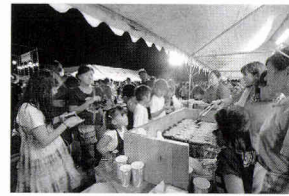
### 宝田花火大会の取り組み

**武市** 宝田町は、野球が盛んでいつもの草野球メンバーの飲む会で、「小さい頃楽しんだ神社の奉納花火を今の子どもたちにも味わって欲しいな」という意見が出たので、パートナーに話すと「家の手



パネリスト  
**武市篤浩**

伝いができなくなるからあかん」と言われ非協力的でした。しかし、一度火のついた思いは、止められない。「とにかくやる」という思いを強くしました。花火を打ち上げるには、資金が必要なので、メンバー5人で町内一軒一軒を協賛金のお願いに回りました。信用がなく断られることが多かったが、どうにか花火を上げる資金ができました。



女性の友人を勧誘

共感

「私もやりたい！」

第2回大会開催

交流

普段味わえない  
楽しさ(非日常的)

女性同士の輪が広がる

を迎えることができました。露天をしているパートナーの楽しそうな表情や参加している子どもの家族、町民の笑顔を見て心からやってよかったと思いました。

第2回目からは、女性も企画段階から参加し協賛資金集めもしてくれました。大会イベントでは、それぞれの家庭の料理を競い合おうと「T(宝田のT)級グルメ選手権」小学生は水鉄砲大会、子ども太鼓演奏、阿南市の有名連や園児による阿波踊り等で大会が盛り上がりました。女性が主体で考えることにより、みんなが楽しめるものとなり、会場に笑い声が響き渡りました。

回を重ねるたびに女性の意識も高まり、友人に声を掛け合って、輪を広げていきました。日々育児、家事に追われている女性も心から楽しめる場となり、男女が協力し合ってできる達成感を味わいました。

今では、協賛金のお願いに伺うと「感動した、喜んで協賛する」と言ってくれるようになり、活動への大きな励みとなっています。

盛大に花火をしたいと、資金を得るための河川除草作業では、手伝いに来てくれた地元の人たちとの出会いもありました。そして、「河川除草作業はセニア部、環境部がおこなうので、青年部は大会運営に力を注ぐように」と言ってくれています。活動を通して、各組織との交流もでき、消防

団も当日には警備をしてくださり、青年会のメンバーも増えました。

第5回目になると打ち上げ数 3000 発県南一の花火大会となりました。宝田花火大会は、人が人を呼ぶことで継続していくまちおこし、そして、私たちが輝ける場所でもあります。

### 加茂谷鯉祭りの取り組み

**福岡** 25 年前、私たち団塊の世代が働き盛りの頃、私たちの地域に鯉祭りが始まりました。那賀川両岸にワイヤーロープを渡して、鯉のぼりを吊り下げたら子どもたちが喜ぶだろうということになり、



パネリスト  
福岡一郎

すぐに実現されました。手作りのお祭りは子どもたちに好評で、年ごとに大きなお祭りに成長していきました。けれども、回を重ねるごとに、安全の確保や運営スタッフ・運営資金の不足等数々の課題と直面しながら 15 回まで実施しました。有効な解決策がなく、続けることは無理か。16 回目苦肉の策として、大型クレーン車を会場に入れ、鯉のぼりを吊しましたが、大不評に終わりました。いよいよ続けることはできない。打つ手のない私たちに、「やめたらあかん」と強力に声をかけてくれたのが女性グループの皆さん。そ

のエールに実行委員は、心を熱くし、再び開催へのアイデアを模索しました。17 回目の鯉祭りは、会場を 500 メートル上流の河川敷に移すことで、数々の課題の克服に挑みました。そして、無事に存続の危機を乗り越え、現在に至っています。

お祭りを支えてくれた 2 つの女性グループ。1 つは、農家の主婦が中心に、餅投げのため約 300 キログラムの餅つき作業。当日はたこ焼き屋さんにも。数百匹の小さな手作り鯉のぼりも会場を飾りました。もう 1 つは地域婦人会、毎年総点検をして吊り紐を付け替えたり、鯉のぼりのほころびを直したり手間のかかる作業をしてくれています。当日は、参加者の食を満たす様々な露店の運営をしています。鯉のぼりの期間中、春の嵐で鯉が破れたりちぎれたりした時の補修も大変な作業ですが、持ち前の明るさでてきぱきとこなす女性グループに私たちも元気をもらっています。

課題は後継者づくりと運営資金の確保等がありますが、未来に向けて、祭り人らしく明るく発表を締めくくりたいと思います。汗を共に流し、飲んで、地域の将来を語り合う、信頼で結ばれた仲間たちと、鯉祭りを年に一度のお祭りに終わらせたくなくて、「加茂谷を元気にする会」が誕生しました。「できることを、できるときに、できる人が」をモットーに、これからもみんなと力を合わせて頑張ります。

### 活動の拡がり・継続に向けて

(徳島・会場からのヒント)

### 活動における継続的資金

**坂本** 鴨島駅前に、賑わいを取り戻そうと頑張っている団体があります。「鴨島駅前まちづくり会議」その活動の成果があって、現在、駅前に明かりがひとつ灯るようになりました。今回は、その

鯉まつり当日 5月3日



### 市民まちづくりを通して 男と女のつながり再生

『ダイバシティ・マネジメント』より

- 重要視される女性の能力
- 「リスニング(聞く)」「コラボレーティング(協力する)」「ニューチャリング(育む)」「舞台裏での調整」
  - フラットなネットワーク型組織
  - チームワーク
  - 継続的な改善と絶え間ない変化
- 男女参画による成果の向上
  - 男女の特性を活かし、組み合わせるというアプローチ

市民まちづくりでこそ実践できる  
市民まちづくりを通して、男と女のつながり再生

「五九郎マーケット」の取り組みを紹介します。

空き店舗を活用した取り組みです。空いたスペースを活用して、屋内に常設されたフリーマーケットです。店内にはブース(棚)が設けられていて、出品したい個人や組織が、ブースを有料で借り、商品を値付けして陳列しています。販売はお店が代行するので、出品者はお店に行かなくても売上が得られる仕組みになっています。活動資金創出という視点でとらえてみますと、「市民活動支援ブース」と「寄付ブース」です。「市民活動支援ブース」というのは団体がブースを借りることができ、売上金を挿入出店団体等で活用ができる。販売商品を並べながら、団体の活動のPRもできる。「寄付ブース」は市民活動を支援したい人から持ち込まれた寄付商品を並べたブースです。売り上げの一部は、ボランティア団体等の挿入活動資金として還元されます。今後、市民まちづくりを通し男と女のつながり、再生が可能であると考えています。男女の特性を活かし、組み合わせながらアプローチしていくことが重要である。市民まちづくりの活性化と人と人のつながり再生、それが新たな社会の



パネリスト  
坂本真理子

創出につながることを期待したいと思っています。

### 活動の拡がり・継続

松本 徳島県小松島市で13年間まちづくりをしてきた中での2つの事例を紹介します。1つは、港を中心とする活動です。時代と共に海が使われなくなってフェリー航路の廃止等で港が衰退しました。お金はないが場所はあるという状況の中で始めたのが常設屋内フリマです。交流人口が0人だったが10年経って、10万人にまで回復しました。



パネリスト  
松本真樹

もう1つは、「古民家再生」でのまちづくりです。小松島の空洞化された中心市街地のために、少し古びた建物を借りて、男性がリフォームする。地域の女性が「ワンデイシェフ」一日シェフになって、地域の特産品のやまももを活用したアイスクリームの開発とか水産物のちりめんを使った新しいメニューを提供し、カフェとかコンサートを行っています。漁業と農業を連携させた取り組みです。いろいろなまちづくりを通して、活動の拡がり人は人と多くつながることで新たな事業がだんだん増えていく。いろいろなことにチャ

### 男女の活躍の場づくり

- まちづくりでの男女が果たす役割

キーワード

- ①役割分担の明確化
- ②小さなルールづくり(協働の場)
- ③男性の役割の認識



(力仕事の応援、制作作業等)

- ④女性の役割の認識

(お料理提供等)



レンジしているうちに、事業活動が拡大してしまう。課題を途中で再認識して、5年ぐらいの中期で思い切ってやってきた事業を選別する。

活動を継続するための課題と問題点の3つのキーワードは(1)何のために、誰のためにやるのか(2)目標設定を作っているのか、資金の確保、事業の収入と事業のバランス(3)人の確保、どれくらい関わってくれるか要は、人と活動資金とのバランス。人を考えたときには、内部の応援者と外部の応援者、活動を上手にプランニングしてくれる人とかコーディネートしてくれる人。活動が広がったり、継続されていくために、大切なのはやっぱり人です。女性が頑張ると男性の応援者が倍増してくる。男女のまちづくりが、お互いに活動する中で大切なことは、(1)役割分担を明確化すること(2)小さなルールづくりを行うこと(3)男性の役割を認識する(4)女性の役割を認識する。の4つです。

#### 会場から

##### 5つのグループの横のつながりはどんなのだろうか

- 女性会議に参加して初めてこういう団体があることを知った。滑竹祭で女性会議のメンバーの方が屋台販売をしてくれた。そういうつながりが女性会議で生まれた。
- 加茂谷鯉祭りには小さい時から行っていたが、今回福岡さんが主体的にやっていて苦労話があることを知った。スケートボードは知らなかったが、女性会議で出会い若い萩野さんが一生懸命頑張って行政を動かしてスケートボード専用施設を作ったという素晴らしいことに気づいた。今年の花火大会では女性会議のメンバーの方が駆けつけてくれて嬉しかった。
- 素晴らしい出会いがあった。ありがたい。みんな温かく、つながりが嬉しい。



##### まちおこしで関係者をどうやってつないでいけばよいか

- それぞれ組織によって特徴があり、人も十人十色の性格、年齢、性別によって様々である。その人の、その組織の長所をみてどう協働するか、どう手を取って地域活性化をやっていくかを心がけてきた。
- 組織のつながりをどう継続するかで重要なのは事業ばかりに目を向けるのではなく、協働維持をするもの。交流とか、楽しみとかそういう場を大切にしていくことである。あと、組織間でお互いをよく知ること、目的を理解し合うことが重要である。
- まちおこし市民活動の中では、異なる組織、異なる個人がいるのでつなぐ人がいる。つなぐ人がいなくなると情報が途切れ協働がなくなる。コミュニケーションをとるには、聞くことである。相手のことを聞いてお互いのつながり、組織をみていく。

##### 若い人を取り込むにはどうするか。年齢、会議の場所、時間、会費について

- 阿南スケートボード協会は補助金等はなく、協会員8名が出し合って、活動資金としている。会議は1か月に1回、午後7時から9時頃まで、場所は公民館など阿南市の施設である。



社会的な活動として清掃活動等をしてイメージを変え、次の世代につなげていきたい。

- 会議は地元の公民館で開催。花火大会後1か月位は反省会や計画を話し合い、次年の3月から10月に月1回集まって話し合う。資金は町民からの協賛金、阿南市からの補助金、河川除草作業による補助金である。
- 資金は市よりの補助金、各戸からの協賛金、ふるさと会からの補助金、駐車料金である。加茂谷地区は8地区あり、年明けから実行委員14～15名で相談し、各地域各種団体ありとあらゆる団体に拡げ3月には決定している。集会は地元の公民館で月に2、3回もっている。決まったものがないので、新しいものを取り入れながら、女性の方の意見も吸い上げ、毎年少しずつ変化させて継続している。
- 鯉祭りの話の中で2点。変化をつけていることと意見を吸い上げること。これが組織を連携する秘訣であり会議運営である。

## パネルディスカッション

### 継続と拡がり

**松本** 継続する時に3つのキーワード。1つめは何のために、誰のために、目標設定。2つめは資金の確保。3つめは人が変わっても大丈夫な体制

作り。その3つがクリアされることにより活動の継続や拡がりが見えてくる。人とつながれば事業が増えるが、組織みんなで見つめ直す時期が必要である。賛否両論あるが思い切って変えることによって必ず新しいものが作れる。

**坂本** 組織が安定すると、事業の推進ばかりに目が行って本来の目的とか動機、楽しみ、わくわく感が薄れてくるが、協働の活動の場合は何のためにするのかを確認し合いながら、そういう場、時間を意識的にもつことが重要である。

**澤田** 檜原の棚田でオーナー制の支援をしているが、同じようなことが現実起こった。やはり何のために、誰のためにというところが重要である。次に資金について。継続的支援の中とか地域の中でどうしていく方向か。

**萩野** この会議に参加するまでは、お金は不要で情熱があれば続けていけると思っていた。でも、会議に参加し、「つなげる」と考えた時にお金は必要だと気づいた。女性会議の方に屋台販売を教えてください全額寄付して頂いた。そういうつながりがあったから継続していける。

**澤田** つながりの仕方は、つながることによっていいものができるけれども作業が減るといふような知恵出しをすると成功するのだと思う。

**坂本** 成功の方程式は「まちづくりの方程式」として、1、社会的使命感 2、情熱 3、知恵

4、連携 5、循環的資金の5つである。全てがかけ算で成立するもので1つでも0が入るとうまくいかないということ。今回もう一つ協働コーディネートを挙げた。つなげる間に入る人や組織に価値をおくべきである。

**澤田** この女性会議をきっかけに阿南市内のいろいろな団体のネットワークができつつあり、阿南では市民資金ができる可能性がある。

**坂本** 私も可能性を感じている。みんなで一つの運営の組織を作り、場所を見つけてみんなで一つを回していく。家庭を巻き込むのは市民まちづくりにおいては重要であり、巻き込む一つとして屋内フリマ活用できるのではないかな。

#### 地域での男性と女性のつながり

**萩野** この場に座っているのもパートナーのおかげであると女性会議に参加してあらためて気づいた。これからも大切にしていきたい。

**武市** パートナーのサポートは非常に大きいものである。パートナー同士が友達になり、絆を深め花火大会が続いてきたと気づいた。今後もこのような会に積極的に参加したい。

**福岡** 皆さんが言うてくれた通りである。お祭り

になったらパートナーには一番迷惑をかけている。「すまんのう」という気持ちである。

**坂本** つながりが大事ということで今までは横の団体とつながるネットワークといわれたが、家庭とつながっていることを意識することが大事だと再確認した。今回横のつながりができたので新しい仕組みを共有することで新しいまちづくりができる。

**松本** 大正時代の古民家をカフェ風喫茶店に開店した時に男性のサポートが大きかった。女性ががんばると男性が応援してくれるという温かいまちづくりに出会った。

**澤田** 「出番を作る」こと「変化を見せる」ことで継続、広がるんだと思う。私からは「やりとり」を。いろいろな組織がある場合に一方通行でなく心のこもったやりとりが大事である。

#### 挨拶・閉会

**日下** 「学び続けるってすごいことなんだ」ということを肝に銘じて学び続け、男性も女性もが輝ける男性であり女性でありたいなど、これから踏み出していこうと思っています。



第5分科会 セカンドライフ（高齢者）

豊かに輝いて共に生きる幸齢社会

～男女共同参画で次世代へつなぐ～



コーディネーター  
**中條 信義**

徳島大学名誉教授、徳島学習センター所長  
前放送大学長

パネリスト  
**長尾 弘**

大仏連連長 奈良徳島県人会副会長  
徳島県交流大使

パネリスト  
**濱尾 巧久**

こども歩き道路実行委員長  
徳島市退職校長会会長

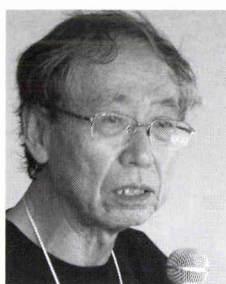
パネリスト  
**湯浅 幸子**

NPO 法人アシスト理事

美馬義明分科長の開会の挨拶

皆様ようこそ、四国最東端の阿南市へ。心から歓迎申し上げます。さて、今回のテーマは「豊かに輝いて共に生きる幸齢社会」となっています。幸齢が当て字になっていますが、幸せな齢でありたいという意味が込められています。

**中條** この分科会のテーマであります、セカンドライフは人様々でないかと思えます。今日おこしの皆様方はセカンドライフを心豊かに、また社会に貢献できるような素晴らしい活動をされているのではないかと思います。更に、健康と言うことでは、健康寿命を延ばそうではありませんか。そうしたら輝く幸齢社会・いわゆる幸せな高齢社会が送れるのではないかと思います。それが、今回のテーマです。



コーディネーター  
**中條信義**

次に話の進め方ですが、分科会スタッフ一同で考えて、出来るだけ皆様方が参加出来るような、またお話が出来るような会に出来ないものかと考えました。出来るだけお互いに男女共同参画ということをつまえた形で、セカンドライフのあり方を話し合ってみようと考えています。そのため、皆様方で話し合う時間をとらせていただきますので、その時はよろしくお願い致します。会場が狭いため、やかましいかも知れませんが、話し合っていたきたいと思います。それでは、まずパネリストの方のお話を聞かせていただき、その後わたしの話をとっています。

**長尾** 私は、阿南市出身で高校卒業するまでこの地で過ごしました。関西で就職、大阪八尾市から奈良に移り住んで40数年。奈良市で大仏連を立ち上げたいきさつ、苦勞話、その喜びについて話したいと思えます。今回、こんな素晴らしい発表の場所を与えていただき感謝しています。

23歳で、河内音頭の本場 大阪の八尾市で所帯を持ちました。もともと踊りが好きで、河内音頭を習い踊りました。河内音頭も素晴らしいが、阿波踊りの「ゾメキ」は二拍子のリズムで速く、この魅力が何とも言えません。奈良に移り住んでから、神戸で阿波踊りをやっていることを聞き、神戸まで10年程通いました。奈良市にある徳島県人会に入りましたが、阿波踊りができる人がいなく、10人ぐらいに声をかけて、立ち上げました。当初は単なる同好会という趣味の世界でありましたが、奈良にふさわしい名前をと考え東大寺の住職の了解を得て「大仏連」を誕生させました。はじめは女性ばかり12～13人でスタートしましたが、女踊りを指導する人がいなくて1年間ぐらい苦労しました。ビデオを借りてきて女踊りを練習し、3年目ぐらいからやっと阿波踊りらしくなり、鳴り物も少しずつ増え、「ゆかた」も揃えました。これなら徳島へ行っても踊れるのではないかと簡単に考えていました。自分としては、高校野球の生徒が夢である甲子園を目指すように、踊る者の聖地は徳島で、何とか棧敷舞台上で踊りたいと思っていました。しかし、そうは簡単にはいなくて、そんなに甘いものではありませんでした。4年目にしてやっと初デビュー出来ました。



パネリスト  
長尾 弘

有料演舞場である市役所前とか、藍場浜で踊ると本当に興奮しました。気持ちがたかぶりこの感激は、阿波踊りをやった者でないとわからないと思います。それ以後新しく入ってくる人たちは、徳島へ必ず連れてきています。とにかく徳島で踊ることが大事なことで、有名連に負けじと踊ると自信がついてきます。そんなことで帰りのバスの中で、「本場徳島へ行ってよく分かった」と言います。あの4日間の熱気とパワーはものすごいもので、今では阿波踊りを私のセカンドライフとして楽しんでいます。私は若い頃に阿南市を去っているので、実家もなくなっていることもあり、懐かしくて仕方ありません。とにかく 伝統文化に携わることで、少しでもふるさとを忘れることなく、家はなくても帰る場所があるというだけで、私は十分満足しています。何とか奈良と徳島の懸け橋になればと思っています。

阿波踊りは、女性の可憐でしなやかな踊りと男性の豪快な踊りで、互いにサポートし合っています。両者が一体になっているから、阿波踊りは良い。まさに今回のテーマである男女共同参画です。阿波踊り400年の歴史のすごさ、奥の深さを感じます。昔から男女共同参画を受け継いでいるのではないかと思います。

大仏連は現在65名おり、その内女性が47名で子どもを入れると70名を超える大所帯となっています。最年少は幼稚園児、最高齢は83歳のおじいちゃん。子どもを除くと平均年齢は59歳で、高齢社会の入口の人ばかりです。

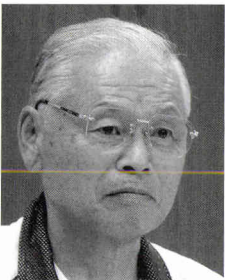
大仏連は、奈良県下でのいろいろなイベントに参加しています。神社・お寺とか、徳島の物産展などで踊っています。また年に数回は老人ホームを訪問し、女性のサポートでお年寄りや車椅子の人たちの手を取って一緒に踊ります。自分が生まれた徳島の文化を、離れた奈良で広めることが出来るのは幸せ者だと思っています。地域の皆さん



徳島市役所前演舞場で

に喜んでいただきながら、自分のセカンドライフとして、生きがいというか、今回のテーマである「幸齢社会」の、まさに、私たちは年を取って幸せな齢をエンジョイしています。体力の続く限り、これからも徳島県の交流大使として、奈良で徳島の伝統文化を拡げていきたいと思っています。

**濱尾** 私たちはセカンドライフをどう生きていくかを考えたときに、今までの教職の経験を活かして子どもたちに関わっていくことが、自分の人生の充実と社会、特に教育界に恩返しすることに繋がっていくのではないかと、「子どもある



パネリスト  
濱尾巧久

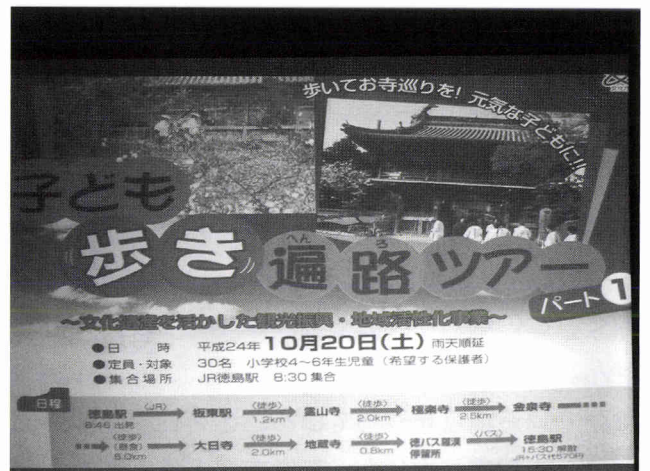
き遍路ツアー」を5年前から始めました。

次に子どもたちが活躍する時代は、今よりもっとグローバルな社会であると思います。世界の人々と共に生きるためには、世界の「共通語である英語」に親しむこと

が必要であると考え、英語と日本語で礼所やマナーについての解説を3年前から始めました。

子どもたちは英語に対する興味・関心が高く、抵抗なく受け入れてくれました。また中・高生対象のボランティア講座で「歩き遍路で見えてくるもの」という話と、「実際に歩いて絆を深める活動」があり、そのサポートをしています。四国遍路の歴史・空海の伝記、マナーや遍路用語を出来るだけ日本語と英語で話しました。子どもたちだけでなく、英語で礼所について話ができるようになることを夢見ています。これもお接待だと思っています。

私自身も歩くことを習慣づけることで、自分自身の健康を保ち、歩く楽しさ、目的地に到達したときの充実感、そして地域社会との絆も深



まってくるように思います。もっと多くの子どもたちに身近な文化遺産に親しんでもらい、歩くことの楽しさや体力の向上を目指し、学校行事の遠足に歩くことを取り入れることができればと、3年前から、学校に働きかけています。私たちが現職時代に実施できなかった経験から、何をサポートすればよいか、安全なコースの設定、トイレの確保、休憩や昼食する場所の確保、緊急時の対応、天候の変化への対応等々について検討し、学校の先生方と下見を繰り返し実施しています。

次に必要なスタッフをどう確保するかと言う課題については、幸いに徳島市退職校長会の組織に教育支援部があり、男女がそれぞれの特性を活かして子どもたちに関わっています。

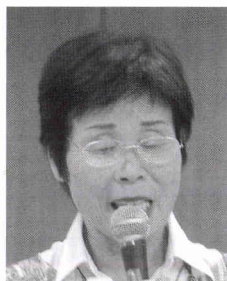
**井上** (子ども歩き遍路実行委員) プロジェクターにて活動の一端を説明。

#### 県北コースの一番礼所での報告

お遍路と言えばお接待。この日は、鳴門渦潮高校の生徒さんが、自作の藍染めハンカチをプレゼントするというお接待をしておりました。子どもたちも私たちもお接待を受けて、高校生の皆さんといろいろお話をすることが出来ました。子どもたちはさわやかな高校生のお接待に徳島のお接待文化を学ぶ機会となりました、と報告。(一部)

**濱尾** 終わりに、「子ども歩き遍路ツアー」「歩き遍路遠足」とは、私たちにとって何なのか、とよく問われますが、それは子どもと直接活動することで子どもたちから力をもらったり、新しい子どもの姿に驚いたり、新しいものの考え方を教えられたりしていることです。子どもたちのためにと取り組んできた活動が、今では私たちの「生きがい」となりつつあることを実感しています。

**湯浅** 私はこの阿南で生まれ育ちました。静岡出身の夫と、21歳で家庭を持ちましたが、私が43歳のとき、子どもたちと私の両親を残して旅立ちました。今年で23年になります。生活の基盤で幸いだったのは、近くに働く場所があったことです。8割が女性という製造業の職場で定年まで勤めました。仕事と子育てで、とても厳しい時期もありましたが、母がいて職場では上司、同僚、後輩に恵まれて、退職した今でもいいお付き合いをさせていただいています。50歳過ぎの時、友達から「料理習いにいかん?」と声をかけられた時が、グループアシストとの出会いでした。料理を通じた国際交流や地域活動の輪を広げようと取り組む姿勢が、輝いてまぶしいグループでした。その後、私もその一員としてボランティアで地域を支えあう機運を高め、阿南の先駆けになりたいという思いで、平成13年阿南市で第1号の特定非営利法人「NPO法人アシスト」としての活動をスタートさせました。



パネリスト  
湯浅幸子

国際交流として、南の島国「フィジー」「オーストラリア」に行き、地元の市場で食材の調達から、身振り手振りでの調理交流。食事会に招かれ、その国の作法に悪戦苦闘し、良い経験をさせ

ていただいたこと。外国の人たちとの心の交流が私の人生の後半を描く、まさにセカンドライフが見えた時でした。

ボランティアグループ「アシスト」は、配食・宅配、ランチサービス事業をスタートさせて、今年で14年目を迎えています。毎月ゼロの付く日10日・20日・30日、月に3回実施しています。地元産にこだわり、季節感を大事にして、毎回30品目を目安とし、全て手作りです。お弁当の中身全てを食することができる食材で季節感を大事にし、安心安全をお届けしています。

毎回お弁当には、季節のメッセージを添えて配達。この会場の後ろの掲示板に、この14年間のほんの一部ですが、掲示してありますのでご覧ください。こんなこともありました。利用者さんが亡くなり、県外で暮らしている娘さんが、父親の遺品の整理をしていて、お弁当の上の季節のメッセージを保存しているのを見つけたそうです。それを読まれた娘さんから、一人暮らしの父は寂しくなかった、地域の人とつながっていて良かったとお礼の電話をいただきました。またある方は、お棺の中へ忍ばせてくれたとも聞き、ほんとうに嬉しかったです。

特に高齢者には、配達時の安否確認は欠かせません。「暑いな」「寒いな」「元気にしよったけ?」など、声かけしながら手渡します。大雨、大雪の



寒い日も、1日も休むことなくお届けできたのは、いつか行く道を合言葉に、してあげているのではなくさせていただいていると思う心と、「ありがとう」「美味しかっただよ」この一言が大きな励みになっています。私たちの仲間は、現在男女で35名います。

今の課題は、仲間の高齢化です。今はみんな横一列で、後輩がないことです。この状況は、どの活動グループにもあてはまることではないかと思えます。男だけでも女だけでも、満点は取れません。お互いに認め合い、補い合い共に活動できることに感謝しあい、人と人との繋がりを大切に、セカンドライフを送りたいものです。在職中から、アシストと関わり退職してから6年風邪一つひくことなく、飛び回ってセカンドライフを楽しんでいます。都会にない田舎のよさを、次世代の男女に繋ぎたいと思っています。「阿南良いとこ嬉しい笑顔でおもてなし」ありがとうございました。

**中條** 3人のお話は、まさに絵にかいたようなセカンドライフのお話でなかったかと思えます。これから、議論していただくための基礎として、資料に基づいて説明させていただきます。

世界の中で高齢者が住みやすい国はどこなのか？健康だとか、医療だとか、5項目を基準に調べた結果、スウェーデンが当然1位で、日本は9位。日本では、昨年、「東洋経済」と言う雑誌に高齢者が住みやすい町として、1位は鳥取県の倉吉市、2位は広島県の三好市、3位は東京都の港区です。ここ阿南市は28位、徳島県では阿南市が、高齢者にとって一番住みやすい町になっています。

阿南の女性、また高齢者の方は、非常に活発です。従ってこんな大きな大会も男女共同参画というか、市民の皆さんの協力で実施され、参

加者の2割が男性です。男性の参加が高くなったのは、大会始まって以来初めてのことです。また阿南市は徳島県内では最初に男女共同参画室をつくり、行政が先頭をきって力を入れた町でもあります。こんな背景があるのでご紹介しておきましょう。

この後、中條さんは、高齢社会の課題、地域社会の課題・状況について、長寿化社会における人生の変化、女性の視点でのライフ・ステージの変化、性別の役割分担に対する意識の変化、高齢者の家族と世帯、一人暮らしの高齢者推移、離婚件数の推移、高齢者の経済、家計の内訳で見た高齢男女の生活状況、年金生活等社会保障給付の割合等について、統計資料に基づいて説明。また高齢者の健康・福祉、健康寿命や心の病気、また高齢女性の介護問題等、介護の担い手というのはいはり同居している配偶者が主で、その7割が女性である。女性に多くの負担が掛かっている、配偶者間の老老介護ということになり、悲惨な事件、事故が起こっている。また自死率、無縁社会という孤独死についても報告された。

続いて中條さんは、それでは、どういう社会がいいのか。今年の7月に出されたデータで、早稲田大学の岡先生が、徳島県の旧海部町について長年、科学的な研究をされ、このたび本が出されたので紹介します。高齢社会をどのような生き方をすればよいのか。一つ目はコミュニティは緩やかな紐帯。二つ目は、身内意識は決して強くない。三つ目は、援助を求めることに抵抗が少なく、助けてと簡単に言える社会。そして、他人を評価するときには人物本位でということである、意欲的に政治参画する意識、比較的に格差感が少ない、等提言されました。

更に中條さんは、生きがいとして、次の三つがあげられました。一つは心身の健康、次に社会参



高齢社会をどう生きるのか？  
～岡 檀の提言～

- ①コミュニティはゆるやかな紐帯
- ②身内意識が強くない
- ③援助希求への抵抗が小さい
- ④他者への評価は人物本位
- ⑤意欲的な政治参画
- ⑥主観的「格差感」が小さい



- 「人に強制したら『野暮』なことと言われる」=説教しない。
- 損得勘定を馬鹿にしない。=人の業を利用する(世事に通じ、機を見るに敏であり、合理的に判断し、損得勘定が速く、その項合いを知る)。
- 「病」は市に出せ。(旧海部町の研究からの提言)

2013年7月22日 講談社 1,470円

加、三つ目は生涯学習。生涯学習で大切なことはリメイクです。もう一度学び直し、自分を見直し、新しい発信を次世代に伝えることです。これらを実現されたのが、先ほどの発表だと思いません。新しい視点から、次世代や世界に発信しなければいけないのだと思います。

パネリスト、コーディネーターの発表の後質疑応答に入り活発な意見交換がなされた。その一部を記す。

Q. ゾメキとは？

長尾 辞書を引くと騒々しいの「騒」と書く。阿波踊りには、大太鼓・締太鼓・三味線・鐘・笛等いろいろな鳴り物がありやかましい。しかしそれぞれの楽器が見事に調和して、あの素晴らしい躍動感のある阿波踊りのぞめきとなっている。さらに詳しくは本場徳島県の方におたずねいただきたい。

Q. 障がい者が参加するには？(大阪の方)

濱尾 障がいを持った方のグループが是非お遍路をしたいということで、この20日に実際に歩くことにしている。9月29日には、中・高・大学生のボランティアの育成を兼ね、勉強会を実施した。当日は、その人たちと一緒に歩くことにしている。

中條 阿波踊りには「寝たきりになら連」という

心身の健康

(楽しみたい)

社会参加

(人と接したい)

生涯学習

(実らせたい)

生きがい

(生きがいに関する調査GAINの調査・2007年12月)

徳島県高齢者なんでもサイト(<http://www.pref.tokushima.jp/docs/2012111600145/>)



幸  
齢  
社  
会

連も有り、車椅子で参加している。

長尾 来年は、車いすの人たちも仲間に入ってもらって一緒に踊りたいと思っている。

Q. グループの活動の経費捻出は？(沖縄の方)

長尾 鳴り物(楽器)を買うため、当初は借金もした。軌道に乗ってからは、いろいろなイベントに参加し、ご祝儀をいただき貯めて返済、また交通費などに使った。公的な助成はない。

濱尾 活動の経費は、県とか文化庁、銀行などのいろいろな助成金を利用。

Q. 男女共同参画社会というが、男性は退職すると家にこもりがち、引っ張りだすには？(沖縄の方)

どこの地域でも同じ悩みを抱えており、今後の課題である。

また 意見として 福島の女性から。

私たちの故郷は、何時が来たらこんな楽しいシンポジウムで話せるのでしょうか。徳島の阿波踊りは素晴らしいですね。徳島の「阿波踊り」に対





し福島には、「ヨサコイソーラン」があります。それを踊っているときの皆さんは震災で失った全てのことを忘れて、生き生きとしています。人間やっぱり復興に頑張っている時心が癒されるような、自分を忘れる時間がすごく必要なんだなあと感じています。

また濱尾さんの活動に感動、自分もセカンドライフで被災地の勉強の遅れた子どもたちを夏休みで教えたり、赤十字、裁判所、市の相談員等、その他いろいろ退職校長会の一員としてやっています。

質疑応答の後、セカンドライフの話し合いに入る前に休憩時間を利用して、三人の指導者によるリードで阿波踊り体操で体をほぐし、後半の話し合いに入った。(座席は徳島県内の方と、県外の方が交互に並ぶようお願いしてあった。)

**中条** このあと、出来るだけ皆様が参加していただくということで、隣どうしで少し話し合っていたらいい。最初は、県内の方が県外の方に、自己紹介とセカンドライフについて2分間話していただき、次に交代して話していただきたい。……話し合い……ガヤガヤ。

話し合いの後、私は素晴らしいセカンドライフを送っている。聞いてほしい、話したい、しゃべりたい方がおられましたら、どうぞ。

**滋賀県 78歳女性** 男女共同参画についてですが、NPO 法人を立ち上げ、約4年になります。5年前に、海外・ブタペストで、乳がんを見つけ手遅れであったが、「もう残った人生を遊べよ、ばあさん」ということで、社会のこともやりながら、勉強しながら海外も一人であちこち回っています。セカンドライフは忙しすぎて、どうしようかなというくらいに楽しくやっています。癌と闘いながら残るセカンドライフを目いっぱい輝いて生きたいと思う今日このごろです。

**中條** ありがとうございます。次に、今度は男女共同参画をふまえて高齢社会におけるセカンドライフをどう生きるか、その課題、または問題解決について、話し合っていたらいい。

**佐渡の 82歳女性** 男性の方に料理を教えて、15年になります。男性セミナーを立ち上げて、その中で料理教室を持ちました。定年でリタイヤした方が社会に出て、もう一度活躍してもらおうと始めました。ここに出席の男性の方、生き生きと生涯を過ごしていただきたいと思います。

**茨城県から女性** こうした分科会は初めてで、自分は女性の視点が好きなので、湯浅さんのお話を少しお聞きしたいと思います。私も夫を亡くし、毎週読み聞かせだとか、学童保育とか、お年寄りの買い物の手伝いをしています。また、40歳になっても結婚していない人が沢山いるので、マ





リッジサポーター（お見合い、出会いサポート）を3ヶ月前から実施しています。次世代の方たちに何かをしたいと思っています。湯浅さんに、信念、気を付けてきたことをお聞きかせください。

**湯浅** 在職中は、上司・先輩に気をつかい辛抱してきました。退職してからは、嫌なところへは行かない、嫌いな人とは付き合わない。私の信念は、好きなようにしてやろうと思ってきました。今まさにその場面にきていると思います。

**鳥取県女性** 退職して17年目ですが、議会議員になり、今5期目です。地域の組織が衰退の方向にあり、婦人会、JA、更生保護、高齢社会の樋口さんの会とか、6～7つもの会に入っています。議会議員として、男性の啓発と、地域をよくするために頑張っております。

**中条** ありがとうございました。男女共同参画の中で問題なのは、会社でいえば要職の係長、課長、部長、役員、研究部門でいうと教授等、女性が非常に少ないのは、大きな問題であります。時間も押し迫ってきたので、まとめたいと思います。

今日皆さんがお話いただいたことから、お互いに自立することが、セカンドライフでは大切であるということが確認できましたね。また幸福という観点から言いますと、それは「何をするか」「何をするんだ」だと思います。

私たちは長寿という贈り物の設計者ですので、余裕のある有益な活動に充て充実させるためには、私たち自身が動かなければいけないのではないのでしょうか。大学では私はいつも学生たちに“how to die is how to live”と知っているが、ついつい、“death”の方ばかりに気が向くのだが、実はそれは、“how to live”であると話しています。

今日、皆さん方のお話をお聞きして生き生きとして活躍されている方々、また、東北で頑張っておられる方々にいくらかの応援や支援が出来れば幸いです。

#### 美馬（司会）

まだまだお隣の方との話も尽きないと思いますが、この後の交流会で話の続きをしていただけたら、有難いと思います。コーディネーターの中條さん、パネリストの3人さん有難うございました。

お接待について、最後に説明。四国八十八ヶ所のある四国四県には、お接待文化というのがあります。私たちスタッフからの、お接待の真似事として、小さな袋をお帰りに出口でお受け取りください。この中に阿南の花「ひまわり」の折り紙と、お遍路のときに無事に八十八ヶ所をまわるようにと、小さな小さな「草履」を入れてあります。折り紙の折り方の説明書と折り紙も一枚入れてあるので、お帰りになって、お楽しみください。



第6分科会（食育）

郷土の人・自然・食でつくる絆

～これが阿波の食育だ！～



コーディネーター  
**飯泉嘉門**

徳島県知事

パネリスト

**田木 勲**

パートナーシップセミナー  
男の料理教室 受講生

パネリスト

**松浦浩二**

阿南商工会議所青年部 直前会長

パネリスト

**久保恵美子**

大塚製薬株式会社  
ニュートラシューティカルズ事業部  
徳島支店 学術担当

基調講演

すこやかに だんらん 地産地消  
徳島すだち大作戦

飯泉 食育基本法ができた平成17年度に徳島県食育推進計画で、公募により食育推進計画の副題を決めました。その頭文字をとって「徳島すだち大作戦」と銘打ち、徳島ならではの食育のいろいろな戦略を計画、実行しております。そのラインナップを大きく3本柱で紹介いたします。



コーディネーター  
**飯泉嘉門**

発祥となりました、うだつの町並み。世界一の鳴門の渦潮。こちらは瀬戸内海国立公園として来年が指定80周年となります。そして、徳島の南の海にお越しいただければ、千年珊瑚をご覧いただけます。こちらは室戸阿南海岸国立公園、来年6月1日に指定50周年を迎えます。

そして、徳島が誇る文化であります「阿波藍」ジャパンプルーの異名を持つ色は、この阿波藍しかないのです。そして、日本を代表する阿波踊り、阿波人形浄瑠璃、農村舞台。それからベートーヴェンの第九のアジア日本初演の地は、徳島の鳴門であります。この4大モチーフで、平成19年度、24年度と全国初の2回の国民文化祭を開催させていただきました。

徳島の自然と文化

西日本2番目の高峰、霊峰の「剣山」来年の3月3日が剣山国立公園の指定50周年を迎えます。「うだつがあがる、あがらない」その言葉の

徳島の土壌で育まれた農林水産品

まず、徳島の4大ブランドは、焼き芋の代名詞「鳴門金時」、どんなものにもあう名脇役「すだち」、地鶏ナンバーワンの「阿波尾鶏」、「鳴門の

わかめ」です。そしてこれに続く、農林水産品に徳島の洋にんじん、蓮根、しいたけ、いちごがあります。

阿波の畜産では、牛は「阿波牛」、鶏は「阿波尾鶏」、今回新しく開発された豚は「阿波とん豚」とんとん拍子に売っていただくことを願っております。

また、京都の祇園祭や大阪天神祭にかかせない「鱧（はも）」、渦潮の中でもまれた「鳴門鯛」そして、お花。シンビジュームとえば日本一の生産は、徳島県であります。

こうしたものを更に付加価値を高め多くの皆様方に知っていただこうと、徳島特選ブランドということで、贈答品として「温室みかん」「桃いちご」「シンビジューム」「薔薇」「芽生えわかめ」や「美肌鍋」があります。

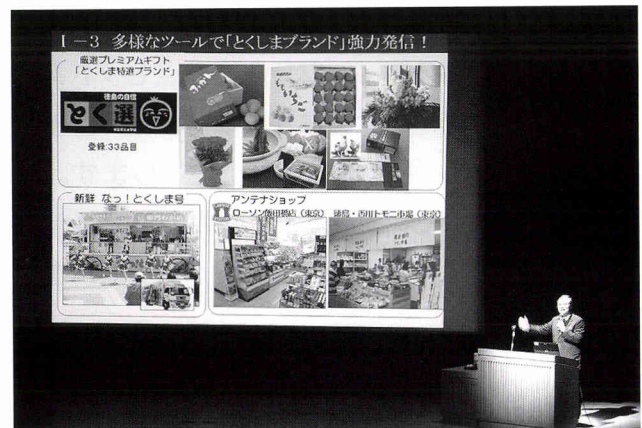
東日本大震災にも派遣した11トントラックを改造した「新鮮なっ!とくしま号」は、全国に旬を発信しています。また、アンテナショップを各地に展開し、徳島をPRしております。

## 食育と地産地消の取組について

### 健全な食生活の実施

食育基本法が制定されて、それから栄養教諭の制度が導入されました。「教壇から食育を」であります。全市町村にいち早く整備をさせていただくと共に、更にその数を倍増させていこうと複数の食育・栄養教諭の配置を進め、独特の食育を教壇から発信しています。さらに、高校生などに学校給食のアイデア料理コンテストを開催し、そば米を活用した「そば米ミネストローネ」など、徳島の素材を活用して全県下の学校給食レシピを子どもの手で作っています。

徳島は長く関西の台所を担ってきています。安全で安心なものを、そして顔の見える農林水産品



流通販売までトレーサビリティを独自にこの中に盛り込み、これに国がギャップ制度を設置いたしました。あんあん認証制度にギャップ制度を加えた、あんあんギャップ認証制度を全国で初めて導入し、これによってトレーサビリティはもとより、安全から環境保全までと、まさに地産地消から合同安全までを考える取組がされてきました。

### 地産地消の体験活動の促進

安全で安心な食材を率先して活用する地産地消協力店を指定しています。まさに顔の見える協力店です。また、収穫体験や食育体験に努めています。小中学校では副読本として「徳島の郷土料理」を提供しています。

### 食育活動とネットワーク

食育活動を全県下隅々まで広げていくためには、食育推進をするリーダーが必要となります。そこで徳島では食育推進ボランティア制度を作り登録していただき、毎年講習会を持ち最新の食育情報をお伝えし、リーダー養成を行っています。

### 食育が地域の活性化につながるように

「四国の右下」つまり阿南市、那賀町、海部郡の3町で「『四国の右下』みぎあがり」というキャッチフレーズで全国に発信しています。なかでも平成23年度には「南阿波弁」を食博覧会

を通じて発信し、昨年24年度には「南阿波鍋」を、今年は「南スイーツ」と、三点セットとなります。来年開催の全国丼サミットがこの四国右下で開催され、全国の丼自慢が参集します。また、「農山漁村・女性の日・推進大会」で毎年9月にいろいろな料理の腕自慢を競っていただきます。

### 野菜の摂取量アップ運動について

徳島の男性は、日本で一番野菜を食べない、女性は2番目に野菜を食べないという現状です。しかも糖尿病の死亡率ワーストワンです。野菜の生産量を誇りながら、摂取量が低い。これには食べ過ぎと運動不足があります。野菜の摂取を高める活動としては「ヘルシーレシピコンテスト」などを行うと共に、それをビジネスチャンスとして商品化していただいています。さらに8月31日を含めた1週間を野菜摂取の促進週間と位置づけ、街頭での周知活動等を実施しています。今年はタマネギを320g配布したり、浜内千波先生と共に「サラダ元気日曜日」を制定し、PRを展開しています。

### 今後の食育、地産地消の取組

T P Pの問題がクローズアップされております。日本がT P Pに本格参加すると安倍総理が表明されましたが、農業をはじめとして第一次産業にとってこれは将来なかなか厳しいものがあるのではないかと、一斉に声が上がりました。第一次産業というのはそれぞれ地方といわれるところの基幹産業でもありますし、ただ作るだけではなく、そこから生み出されるいわゆる加工食品、今では6次産業化とも呼んでおりますが、この生産額となるとすごい数になってくるのであります。そこで、全国知事会としても間髪を入れず総理に

知事会を代表して会長の京都の山本知事、副会長の私と2人で、しっかりと第一次産業に対しての目配り気配りを、ぜひよろしくとお願いに参りました。こうした中で、アメリカが早速動き出しました。日本の安全基準があまりにも厳しすぎると言ってきました。そこで全国の消費者の皆さんから、じゃあ子どもに対して、あるいは自分たちとして安全で安心なものはどうやって食べたらいいんだろうか、まずは子どもさんたちの食育を考えました。

そこで、まずは徳島から提言をさせていただきます。学校給食であります。

徳島では早くから地産地消の学校給食を進めていこうとして、品目がなかなかそろわないということで進まないところが多かったのです。しかし、そうした場合でもJAに協力いただいて、徳島では全国より地産地消の学校給食が進んでおります。しかし、それでも30%を少し上回るくらいなんです。全国平均をみると、なんと25%程度です。是非これを50、60、70、80とあげていく方策を農林水産省、文部科学省で考えていく支援をしてもらえないかという提言をすでにさせていただいているところです。

また、これだけでなく、自分たちも自ら顔の見える食品が必要になる、また女性や高齢者の皆さんが小規模で家庭菜園などで野菜を作っていこう、完熟で非常に滋味豊富なものであるが、流通上では価値がない、流通にはのせることはできない。これを産直市、あるいは学校給食に持っていきますと非常に効果がありますし、さらにお金も生まれてくる、励みになる、という形で一石二鳥ならぬ三鳥四鳥ということで、学校給食と産直市これをさらに広げていくべきではないかと提言させていただきました。特に産直市において、いろいろなPOSシステムをはじめとする販売の仕方に対しての支援、品質の管理者制度の導入を提

案させていただくと共に、阿波産直市を大いにアピールさせていただいているところです。

平成 22 年度に 2 府 5 県の「関西広域連合」ができ、その第一号の議決議案は、高すぎる本四高速道路料金の全国共通料金制度導入となったところであり、いよいよ来年 26 年度から実現するはこびとなりました。全国共通料金制度を P R する方法を全国に公募させていただき、絵柄と「おどる宝島とくしま」のキャッチコピーを決めさせていただきました。東京オリンピック誘致で「おもてなし」が有名になりました。この発祥は、実は徳島四国なのです。四国霊場 88 カ所、お遍路道、そこでお接待する、おもてなし文化があります。特に徳島は 1 番から 23 番までで発心の道中とよばれ、昔からおもてなしの文化を育てています。来年は、開創 1200 年の大きな節目に当たります。まさにおもてなしを徳島から全国に発信していきたいと思ひます。

## パネルディスカッション

### 生き生きと暮らす力を与える食

**田木** 「私は男子厨房に入るべからず」の風習がまだ少し残っている年代に育ち、古希を迎えるまで台所に立ったことはありませんでした。ある日、妻の一言をきっかけに男女共同参画パートナーシップセミナー男性料理教室を受講し、そこで感じたこと、生活の変化、地域への発信について述べたいと思ひます。



パネリスト  
**田木 勲**

まず感じたことは、料理とは、食材をバランスよく組み合わせて調理をし、家族の嗜好を満足させつつ、健康管理をするという役割があり、思っていた以上に奥深いものだということです。分量



を計算したり段取りを考えたり、指先をよく動かす細かな作業もあり、脳トレや認知症の予防に効果を発揮するのではないかと感じました。

食は、健康管理の出発点。男性はもっと料理に関心をもつべきだと痛切に感じます。私も少しばかりですが、男女共同参画社会の入り口に立てたように思ひます。「男子厨房に入るべし」と声を大にして発信していきたいと思ひます。

二つ目は、私の生活に変化が表れたことについてお話しします。

私の生活に変化が始まったのは、クリスマスケーキに「ブッシュ・ド・ノエル」をつくったときからです。期待と不安の中での家族からの評価は高く、また家族のために料理をすることで、家族との会話が増え距離が縮まり、その後、ものづくりの共同作業をしたりで、絆が深まる。そして家族としての意識が高まり、生きる力となります。

三つ目は、地域への発信です。私の住んでいる阿南市羽ノ浦町に平均年齢 70 歳の「おやじの何でも塾」という団体があり、ボランティア活動に取り組んでいます。

このおやじ塾に料理の挑戦を提案し、男女共同参画事業料理教室の出前講座を申請し実施しました。多くのおやじたちがバンダナにエプロン姿で悪戦苦闘しましたが、目は生き生きと輝き、料理を楽しむおやじたちの姿がグルメ室に輝いていました。「もう 1 回やろう」と 2 回目の講座には、



会員以外の参加者もあり盛り上がりました。その後、阿南市食生活改善推進協議会の教室や他の料理教室にも参加する会員ができました。これは男女共同参画意識の表れではないかと私は思っています。おやし塾では料理がなくてはならない行事となり薬膳料理にも関心が高まっております。今後は、家庭での取組が課題となっております。

地域の地震防災訓練に炊き出し要員としておやし塾で参加し、婦人会との共同作業を通じて、男女共同参画意識を高めようとアピールに努めています。

最後に、料理教室を受講しての成果と提案を述べたいと思います。

私は、今後、老々介護の状態となったり、一人暮らしの状態になっても、安心して乗り越えられると思えるようになってきました。家族との会話が広がり、家族の一員としての自覚が高まり、地域とのつながりを広げることができ、生きる力となりました。私はそこから健康と気力を再生し、核家族で一人暮らしが進んでいく社会を、楽しく生き生きと過ごしていけると思えるようになってきたのです。

そこで、皆さんにも男女共同参画事業として、男性の集える機会と、場所づくりに取り組んでほしいなと思います。私のように一つのきっかけが思わぬ結果をもたらしてくれるのではないのでしょうか。健康な体と、挑戦する気力を生み出し、夢

を与え、生きる力を育む、そういう機会と場所を作り出すのも食育の役割の一つではないかと思えます。

子どもから高齢者まで。ライフステージに応じた食育が推進され、生涯食育社会となることを願って、行動を起こしていこうではありませんか。

## 地域の恵みを大切にする食育と人づくり

**松浦** 阿南市は四国の最東端に位置し、山・川・海に囲まれた、自然豊かな地でございます。中でも那賀川は四国一に選ばれた清流であり、そこで育った「鮎の姿寿司」は郷土料理のひとつであり、流域



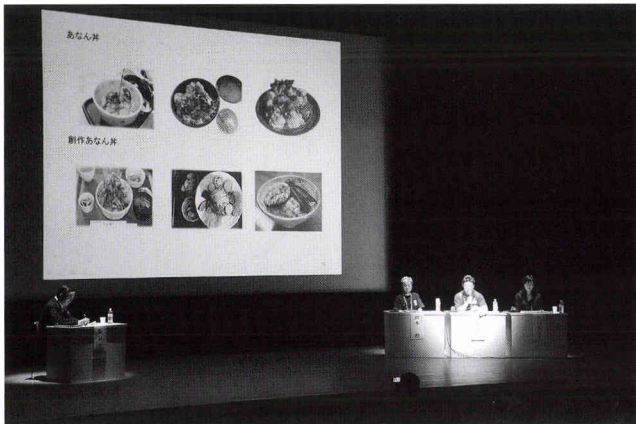
パネリスト  
松浦浩二

では、多種多様の農産物が豊富に収穫されています。海は、漁業が大変盛んで、「白魚」を始め、「シラス」などの多くの魚介類が水揚げされています。中でも「阿波鱧」は漁獲高日本一、「自然わかめ」も日本一です。山の幸もたくさん採れ、「しいたけ栽培」も盛んで、最近では菌床しいたけ栽培の「しいたけ侍」などのブランド品が全国に出荷されています。また竹林も多く、「たけのこ」の生産量は日本一です。

私は工務店を経営していますが、経営理念は「地・燦・知・匠」です。地域を燦と輝かすため叡智を絞る匠の集となる、地域に信頼され必要な企業となり地域に貢献する、人づくりを大事に、人間らしく生きられる地域社会に貢献するという、地域密着企業としてあたりまえのことですが、これがなかなか難しいのです。

私にとって知燦知匠の理念をを共有できるパートナーが阿南商工会議所青年部なのです。阿南商工会議所は中小零細企業ですので、その多くが地域に根ざした営業活動を行っています。阿南の町





が良くならなくては自分たちに未来はないし、阿南に活力がなければ子どもたちの未来もないと考え活動しています。

阿南市には、各種団体や生産者が出店する物産展「活竹祭」があり、青年部では開催当時より「活竹鍋」を無料配布しております。「活竹鍋」は、醤油ベースの鶏ガラに地元特産のたけのこ、にんじん、ちくわ、その他に豚肉、大根、ごぼう等をふんだんに入れ、大きな鍋で調理します。今年は630食を配布し市民に大変好評でした。この取組は、地域の食材を利用し、食を通して地域の人々との絆を深め、育み、男女が支え合い、食文化を伝承すること、また災害時などの炊き出しにもできる事業のひとつです。

2011年に始まりました郷土料理創造プロジェクト。これは食材豊かな阿南で名物を作る、地元食材を発信し、食文化を創造するということで「阿南丼」が生まれました。漁獲高日本一の高級食材である鱧（はも）を安価に提供する取組です。鱧以外の食材を使ったものを「創作阿南丼」とし、多くのメディアに取り上げられました。

食は文化であり、教育でもあります。食環境でその人の人格が作られると言われます。

私が考える食育とは、人づくりです。食の安全安心は、自分たちでつくるもので、与えられるものではありません。地域の人々が地域の生産者の生活を守り、地域の生産者が安心を保障する、「地

域循環型社会」すなわち「地産地消」が私たちの暮らしを守る基本だと考えます。

子どもたちの感性を磨くと共に、地域の食材を知ってもらうこと、自分たちが育った水で育った農産物や魚介類がどんなに美味しく大切な、食して感じてもらう。そして、この地域の食材をこれからどう守っていくのか、老いも若きも男も女も、子どもたちと共に考え学ぶことにより、森林保護や海洋保全といった自然環境から住環境に至るまでテーマが広がり、まちづくりまで考えてくれる子どもたちが育つでしょう。

食育は人づくりの始まりです、共に頑張りましょう。

## 企業活動を通じての食育

**久保** 大塚製薬は、疾病の治療を目指す医薬品関連事業と、健康な人の健康の保持増進を応援するニュートラシューティカルズ事業の二つの事業を営んでいます。私はニュートラシューティカルズ

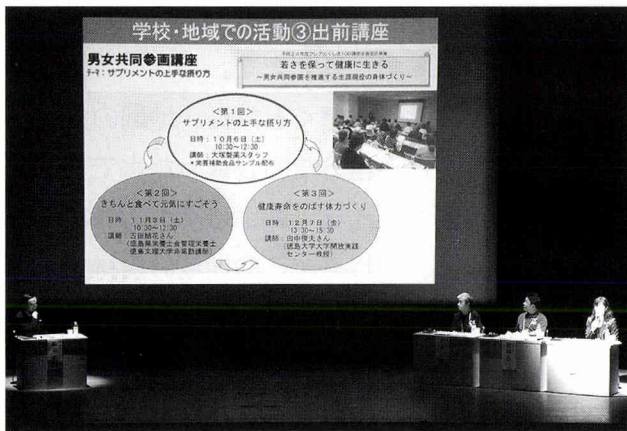


パネリスト  
久保恵美子

事業部に属する学術担当の栄養管理士として、皆様のよりよい生活に役立ててもらえるよう、企業が持つ栄養情報を提供する活動をしております。

独創的な製品を作る、健康に役立つ、世界の人々に貢献する、病気の治療だけでなく、健康な人の健康の維持増進についても考えて

いこうとする企業理念のもと、日本の伝統的な食文化の一つ、大豆の高い栄養価と可能性に注目しています。世界の人々が直接口にする大豆は生産量のわずか6%にしか過ぎず、若い世代の大豆摂取量は減るばかりです。大豆を食べることは、牛肉と比べると地球資源の節約にも役立ち、CO<sub>2</sub>排出の削減にもつながります。大豆が人の健康に役

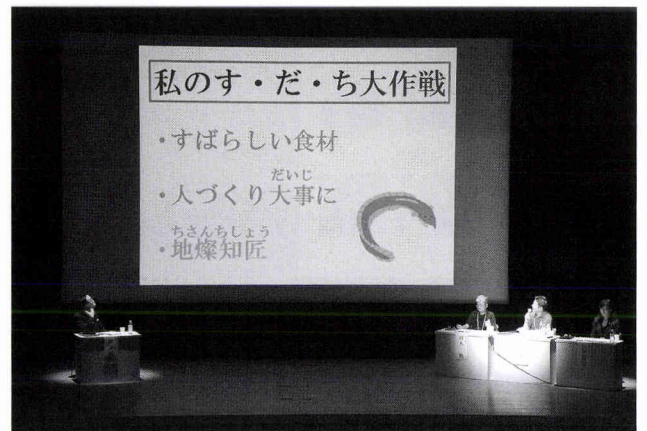


立つだけでなく、地球の健康にも役立つ、大豆ソイがいろいろな問題を解決できる、ソリューションできる「ソイリユーション」という大きなテーマで、世界に新しい大豆の食べ方なども提案しています。大豆を丸ごと粉にした大豆粉をふっくらと焼き上げた「ソイジョイ」、大豆丸ごとの力をと大豆炭酸飲料の「ソイッシュ」。健康は笑顔で楽しいものであるという考えから、振るとカラカラと音を立てるヘルシー大豆スナック「ソイカラ」など、どれも苦勞を重ねて世に送り出されました。今後は、これらの製品が健康長寿につながる良さを改めて知ってもらい、小さい頃から大豆を食べてもらえるよう、食育を更に推進することが課題です。

製品開発とともに食育に関する栄養情報を各方面に伝えることに力を入れています。指導者には全国で専門家によるエビデンシャル最新情報や冊子類の提供、学校地域には熱中症対策や学校保健委員会での情報提供、食生活の出前講座をしています。また、大豆の種植えから収穫の農業体験も実施しています。

「顧客目線」、すなわち本当に必要とされる製品、必要とされるサービスを提供して企業発展に努めることで地域に還元することができます。地域の方の声を良く聞いて、関係各機関と連携してより良い循環につなげていきたいと思っています。

健康に携わる企業に勤める管理栄養士として、



食べる力を与えられるよう役割を果たしていきたいと思っています。

## すだち大作戦

**飯泉** 徳島の食育推進計画では、「徳島す・だ・ち大作戦」を策定し、食を大切に考え、食を通して豊かな人間性を育むことができるよう取り組んでいます。「す」すこやか・「だ」だんらん・「ち」地産地消です。パネラーの方ならではの「私のす・だ・ち大作戦」を披露していただきます。

**田木** 「す」すだちのように、いろんな料理に重宝される、そんな料理でみんなが囲む食卓を地産地消で安心安全、にぎわう食事。

「だ」男性も台所に立ち、家事全般男女共同参画、ともに家族の健康を考えて、明るく楽しい夕食の団らん、心のケア。

「ち」地域から家庭から、食生活の改善で、生活習慣病予防。体動かす阿波踊り体操。体も心もすだちの力、阿波踊りのように子どもからお年寄りまで楽しみながらの食育でありたいと思っています。

**松浦** 「す」素晴らしい食材。阿南市の素晴らしい食材を今後どのように県外、世界に情報発信していくか、

「だ」大事なはその発信する人です。

「ち」地燦知匠。素晴らしい食材をもう一つ手を



加え、良い商品にしていく知恵と工夫、プロ意識を持って商品開発にあたる必要があります。

**久保** 「す」 バランスよい食事。食生活の改善のためには、まず朝食を見直すことだと思います。

「だ」 大豆の力。日本の素晴らしい食文化を関係機関と連携しながら大切に伝えていきたいと思ひます。

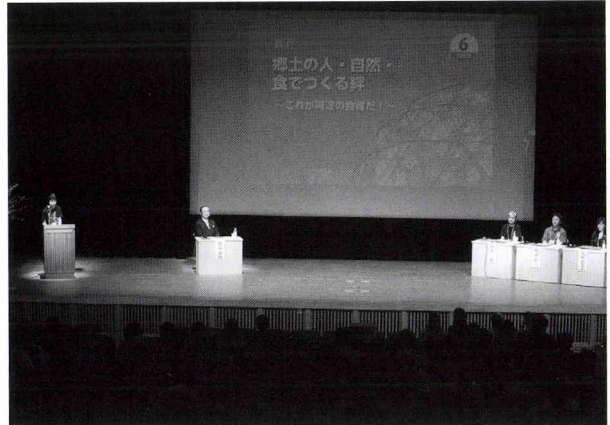
「ち」 正しい知識。子どもの頃から正しい知識を持ち、自分の体のことは自分で責任を持つために必要な情報を発信していきたいと思ひます。

## 私の食育キーワード

**田木** 「生涯恋人」。食育は生涯つきあっていく相手です。共に手を取り進む道、いついつまでも心も体も健康で、笑顔で過ごせる人生最高の相手だと思ひています。

**松浦** 「食遊楽 (しょくゆうらく)」。食材を使って調理するときも、食べる時もすべてに遊び心があり、楽しく遊び心を持って食事をしたいと思ひます。

**久保** 「活き活き」。子どもたちが安心して栄養をしっかりとって前に進もうと思ひるときには、活き活きとした大人が周囲にいないと無理なことだと思ひます。男女が共に主体的に地域や家庭で話し合って環境を整備していくことが、大人も活き活きできる大切な要素ではないかと思ひます。



**飯泉** 食育を通じて地域家庭で輪が広がっていく、男女共同参画にも大きくつながってくることをパネラーの皆さんから発表いただきました。

今日お越しいただいた皆様方には、それぞれの地域の食育をお考えいただくと共に、徳島の食材をぜひ愛していただければ幸いです。

そして、皆様方のすだち大作戦を、食育の大切さを、皆様方自らがその達人として、それぞれの地域で広げていただければ幸いです。



食育に関するパネル展示



参加者全員で会場いっぱいに阿波踊り体操

第7分科会 (ワーク・ライフ・バランス)

WLB ショー 私の自慢



コーディネーター

**渥美由喜**

内閣府男女共同参画会議専門委員  
厚生労働省政策評価に関する有識者会議委員  
東レ経営研究所ダイバーシティ&ワークライフバランス研究部長

実例発表者

**瀬下律子** (東京都)

公益社団法人東京都看護協会常務理事

**竹之内マリ子** (福岡県)

ドコモアイ九州(株)総務

**中村弥生** (三重県)

圃くろべ代表取締役

**前田明子** (三重県)

一般財団法人食品分析開発センター SUNATEC 総務・経理室長

**細田博樹** (徳島県)

三好市役所

**田中静江** (東京都)

大塚製薬(株)人事部部長補佐兼ダイバーシティ推進プロジェクト

**吉田基晴** (徳島県)

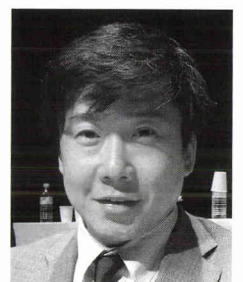
サイファー・テック美波 Lab 代表

はじめに

**野村分科会長** 私たちは、全国からワーク・ライフ・バランス実践者を募集し、発表をしてもらうという初めての企画をしました。そして本日、全国より7名の発表者が、自分たちの地域での実践や、自分たちの会社の実践を発表していただくことになりました。「ところ変われば品変わる」と申します。日本も広いので、自分の町や自分の周りにはないような発想からの発表が聞けるものと期待しています。皆さん方にワーク・ライフ・バランス推進のヒントをプレゼントできるショータイムになれば幸いです。この分野では、日本のオピニオンリーダーであります、渥美由喜さんをコーディネーターに迎え、8名で織りなすWLBショー「私の自慢」を存分にご堪能ください。

コメント

**渥美** ワーク・ライフ・バランスは、特定の人(子育てをしている人とか、私の家庭のように介護をしている人)だけの問題になりがちで、職場全体としては、ワーク・ライフ・アンバランスも仕方ないというような面がまだまだ多いんですね。私はワーク・ライフ・バランスにしても、男女共同参画にしても、大切なのは、共感と連鎖を起こすことだと思っています。「ああいう働き方っていいな」と、共感を持つ人が増えていくと結果的に、大きく社会は変わっていく。制度はかなり充実してきていますが、制度よりも職場風土をどう変えるかという意味では、風土を創



コーディネーター  
**渥美由喜**

るのは、共感の連鎖だと思っています。ワーク・ライフ・バランスは余裕があるからやるっていうのではなくて、職場で言えば、介護と看護は大きな経営課題になっていくので、そういう時に、どちらかをあきらめるのではなく、「お互い様」「思いやり」で、職場でも助け合っていく必要があります。単に助けてもらうだけじゃなく、助けてもらった側が、今度は支援する側にまわっていくという中で、しづとく、リスクマネジメントとして、本人もあきらめずに、仕事も介護も子育ても乗り切っていくそういう「スキル」だと思っています。

## 事例発表

**<発表1>瀬下 少子超高齢社会の中、看護職に対するニーズはますます高くなっています。ただし、看護職は夜勤があるほか、9割以上は女性で、子育てや介護など、女性特有のライフイベントに左右されず働き続けるには、多**



事例発表者  
瀬下律子

くの課題があります。近年一般社会でも職場のストレスによる鬱の増加や、少子化による労働力の確保が課題になっていますが、看護職も同様です。看護職の特徴として、夜勤交代制勤務、残業、緊張感の高い業務、また日々高度化する医療に対応するためには研修も欠かせません。生活では、家事、育児、介護等の役割もあります。生活と仕事が両立できるようワーク・ライフ・バランスを整え、離職退職をストップしていくことが喫緊の課題です。東京都看護協会では、看護職の定着を促進したいと考える病院を対象にワークショップを開催し、離職率の低下などの成果が見られました。小規模等、離職率の高い病院の看護

管理者が、なんとか離職率を下げたいという思いで参加しています。看護職の離職を防止し、定着を促進することは、安全で質の高い看護サービスの提供を可能にし、顧客から選ばれる病院となることと言えます。

ワークショップは6つのアクションを進めています。推進体制づくり、現状分析、アクションプランの作成、ワーク・ライフ・バランス視察の実施、評価と改善、そして取り組みの継続です。経営姿勢や、医療安全など、ワーク・ライフ・バランスの状況を知るだけでなく、その背景も知ることができる内容になっています。アクションプランの現状分析では、明らかになった課題を元に考えますが、課題解決のみにとらわれることなく、組織や各個人のミッションやビジョンを実現することを目的に、目標設定をするよう働きかけています。また、インデックス調査を行うことで、実施施設の課題を可視化できるため、全職員で情報を共有し、協力して改善に取り組めるという利点があります。しかし、その調査結果は、膨大な量の数値のデータで届くため、初めての施設では、どこをどのように見て、どのように判断し、アクションプランに結び付ければよいか、短時間に理解し判断するのはとても困難です。そのため、事前に調査結果の見方について説明会を行い、実施施設の状況が判断できるよう、東京都の参加全施設の平均値などを算出し、グラフ化したものを作成して提供しています。

これまでワークショップに参加した施設があげた目標と成果は、就業規則等の制度の周知による制度利用者の増加、業務改善による残業時間の削減や、有休取得率の向上、キャリア支援による看護職の職満足の向上、多様な勤務形態の導入、保育園の新設、お互い様意識など、病院風土の改善などがあり、離職率が低下したなどの成果が見られています。また、施設の推進メンバーである看

護管理者の意識が確実に変化すること、施設が本気でワーク・ライフ・バランスの改善に取り組んでいることを職員が知ることなど、ワーク・ライフ・バランス推進活動そのもののメリットがあったという報告もあり、事業目的を達成できているのではないかと判断しています。

**<発表2> 竹之内** NTTドコモのダイバーシティの取り組みは、①女性のキャリア開発支援、②ワーク・ライフ・バランスの推進、③ダイバーシティの定着、この3つの柱で進めています。私どもドコモアイ九州でも、子育て中の女性社員から、ワーキングを発足してほしいという声もあり、会社の仕組みの整備が必要と考え、ダイバーシティ推進ワーキングを発足しました。弊社の現状を分析し、課題を絞り、これらをつまえて、取り組みの方向性を、ダイバーシティ&ワーク・ライフ・バランスの全社的な理解・浸透と位置づけて、推進しました。



事例発表者  
竹之内マリ子

発足に当たり、社長を始め、経営幹部が出席する経営会議の中で、会社を取り巻く環境や、ドコモ九州支社のダイバーシティの取り組みや、状況、ワーキング発足の必要性の説明と併せて、DVDの視聴など、まずは幹部から勉強してもらいました。ダイバーシティ推進の考え方は、社員が仕事と生活のバランスを保ちながら、個人の能力を最大限発揮させる職場作りを実現するというように整理をしました。また、トップの認識や理解が大事ではないかと、まずは社長から「仕事と生活の調和をとりながら変革にチャレンジしていきましょう」とメッセージをもらい、社内誌に掲載し、全社員に発信をしました。労働組合と会社側で、ワークライフ委員会を設置し、双方で推進

して定期的に情報交換もしています。それから、社外との連携、自治体との連携も大切にしています。子育て応援、男女共同参画など、地元の様々な施策に参加しています。ワーク・ライフ・バランスの推進に取り組む企業とのネットワーク作り、モデル企業を創出することが目的で、他社のいろいろな情報を収集し、自分自身のスキルアップを図ってきました。

最初にワーキングで企画したのは、管理者を含む全社員向けの勉強会でした。アンケートから意見を集約し、専門家を招いてのセミナーを開催。各職場の代表の管理者と社員を対象とし、ワーク・ライフ・バランス実現に向けグループディスカッションを行い、社員同士の交流も図りました。育児支援の一環として、本人と上司、ダイバーシティ推進担当で育児休職前後の三者面談を実施したのは、安心して休暇に入り、円滑に復帰してもらうことが目的です。制度の説明、不安な点がないかをヒアリングしています。働きやすい職場環境作りを目的に、個別の女性社員（約200名）面談も職場ごとに実施しました。仕事上のこととか、いろいろ話は出てきて、「誰かに聞いてほしかったあ」とか、「言ってスッキリした」などの声が聞かれています。意見・要望は職場改善につなげていきます。今後も、ワーキングが柱になりながら、継続した活動、介護の勉強会等も計画して実施したいと思います。社員が仕事と生活のバランスを保ちながら、個人の能力を発揮できるように、そして女性社員、もちろん男性社員もそうですが、生き生きと活躍できるように更に取り組みを進めて参ります。

**<発表3> 中村** 私どもの会社は50名ほどの従業員と共に、私も日々切磋琢磨しながら、介護事業に取り組んでいる現在進行形の会社です。私がこの場に居させていただいているのは、職員が

らの推薦なんですね。介護事業というのは、皆さんご存じのとおり、とても人材不足です。そこで、うちの会社の取り組みが、少しでも皆さんに伝われば、ボトムアップ的な考え方なのですが、少しでも人材が豊かになるのではとい



事例発表者  
**中村 弥生**

うところで、「社長、1回行ってきてくださいよ」と言われまして、職員みんなに後押しをされながら、今日この場に立っています。

私は介護とは（もちろん介護ロボットとかありますけれども）「人の手でするものである」と思っております。その中で、人材不足をいかに解消するかという取り組みの方から入っています。後から「あ、これが、ワーク・ライフ・バランスだったんだ」とついてきたというのが現状です。介護職はまだ歴史が浅いので、今作り上げている最中ですが、介護とは生活全般を支えることですので、労使関係においては、男性も女性も、同じステージで働いているということを実感できる「互いが安心しあえる職場環境を」ということをテーマとしており、いろんな立場の職員たちのコラボがあって、うちの事業所が回っています。子育て真っ最中の若い職員、ママ集団、再就職の方、熟年パワフル集団、外国人職員たちそれぞれの立場で、勤務時間など、ワークシェアができて、お互いにカバーし合っています。それから、一人ひとりに会った、カリキュラムを用意して、みんなに楽しく、働きやすく、やりがいがあると、感じてもらえるようなプログラム作りをしています。

介護は地域密着型、地域とのつながりは重要で、その地区に合った、その人らしい壁の低い（皆が気軽に立ち寄れるような生活）そんな環境を作るために、こちらから発信したり、相手から

のボランティア要請があったりという、地域でのコミュニケーションを大切にしています。最後まで自分らしく生きていくためには、今、核家族化が進み、どちらが発症してもおかしくない中で、男女が共同して支え合える環境づくりがいかに大切かということを学びました。この関係性は社会においても同じことが言えると思っております。「それぞれの働き方で、それぞれがこんなに輝いていますということ伝えてきてください」と職員に後押しされて参りました。これだけは言えることは、人ってというのは、介護もそうですけれども、人の関係性はまず家庭から、夫婦から生まれるものだなと実感しています。そこを充実していけば、おそらく、この社会も女性の発言権であったり、地位が向上されるのかなと思っています。

**<発表4>前田 スナテック**

の業務内容は、厚生労働省の登録検査機関として、栄養成分、農薬検査、微生物検査など食に関わる検査、分析を行っております。職員数は、全部で104名、男性が30名、女性が74名と、女性



事例発表者  
**前田 明子**

比率が70%を超えております。5年以内に、育児、介護休業取得者がなんと全職員の半数以上になります。職場は育児休業や介護休業による労働力の不足、復帰後の職場の確保など、様々な問題が予想されます。今後、育児、介護休業ラッシュとなった時にも、仕事と家庭の両立ができる組織を目指し、6年前にワーク・ライフ・バランスプロジェクトチームを作り、制度や支援、仕組み作りに取り組み始めました。

私が一番自慢したいのは「職群転換」で、これは出産や介護などを機に、働き方を変えることにより、退職しなくても働き続けられる制度です。

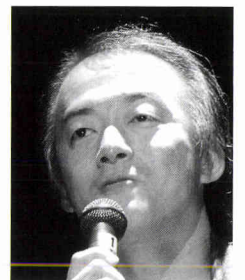
多様で、柔軟な働き方が可能なこの仕組みにより、企業にとって一番の損失である、育児、介護での退職を防ぎ、職員の能力を十分に発揮してもらえる、一番の要であると思います。次に「ジョブリターン制度」は、転勤などの家庭の事情により、退職した職員を再雇用する制度です。退職者には復帰の道を残し、過去の経験を活かして勤務でき、スナテックにとっても再雇用後即戦力で、一石二鳥の効果となります。

組織の基盤として、スナテック独自の改善方式、通称SPS活動により業務の効率化、多能効果を積極的に行い、改善活動は自分たちのチームだけでなく、横展開もできるように、実施内容をその都度、掲示板に掲示します。他にも、職員の心の健康を保つため、組織から一步離れた立場での対応の「相談窓口」を設置、「在宅勤務制度」、失効する有給休暇を積み立て特定の事由に使える「ストック休暇」など、いずれのケースも自分の業務を洗い出し、職場でしかできない仕事、また家庭でできる仕事など、自分の業務の棚卸をすることにより、本人が業務を抱え込むことなく、周りがサポートできるよい機会となりました。また、職員とのコミュニケーション、ご家族とのつながりを深めるために、家族参加型のイベントを開催し、スナテックの職員が、どんなメンバーで、どんな雰囲気の仕事をしているかということ、家族の方にも理解していただける場を設けています。次世代の独身の職員にも、自分たちの今後の道筋が、少しでもイメージできるよい機会であると思います。

今後の取り組み「企業内託児所」についても、2015年1月開所に向けてただ今準備を進めています。子育てしながら安心して働いてもらえることは、他の職員もその姿を近くで目にするこゝとで子育てに対する理解が深まり、すべての職員に仕事と家庭が両立しやすい職場を目指します。スナ

テックでは家庭の事情に関係なく、その人のライフスタイルに合わせて長く働き続けてもらうことでその人のスキルを伸ばし続けられ、「人材」が「人材」となり成長させていくことができます。これからも職員一人一人が志を高く持ち、仕事と生活、バランスよく働き続けられるよう「常若(トコワカ)」の気持ちを持った企業であり続けたいと思っております。

**<発表5>細田** まず私が、育休を取った理由を紹介します。妻と結婚しまして親とも同居しておりました。妻は県立病院の臨時の看護師です。育児休業制度は適用困難で、第1子・第2子は一旦退職し、再復帰という形をとってきました。夫婦共に職場に責任がありお互い好きな仕事ができているので、自分も3人目は職場にお願いして育休を取ろうと思っていました。私自身がすごく対外的な活動が多く、趣味も含めて非常に楽しく生活していたのですが、妻を見ると仕事と家との往復でした。



事例発表者  
細田博樹

だんだんと気持ちも変わり一回責任の役割分担を変えてみようというのがきっかけでした。池田町はすごい田舎ですので、両親からもものすごい反対を受けました。父は、「制度があるし、いずれはそういう時代になっていくのだろうが、何故今お前がするんや」と大反対、非常に世間体が悪いということ。両親は共働きでしたが、母は「私が仕事を辞めるからお前は家におらんと役場に行け」と言いました。あいにく孫の育休の適用はなかなかないので、孫を見るためといってもなぜ母が会社を辞めないかのかなと考えました。夜の2時、3時まで家族会議をした結果、ようやく「それだけやるのなら、頑張ってやれ」「どう



せ新聞が来るぞ、ニュースが来るぞ、その時は頑張っ  
て受けよ」と言ってくれて育休取得となりました。

私が休業を取るときに考えたのは、男女の役割  
だけをひっくり返すのでは意味がないのでどうい  
う風に仕事と家庭を、またそれぞれの活動、社会  
的なバランスを取っていくかを意識したつもりで  
す。私も育休をとったからといって決して家の事  
すべてを担ったのではありません。当然育休です  
から育児は主体的にしますが、家事については一  
定の分担がありました。場合によっては家で見て  
くれる人がいたら、いろいろな活動にも出て行く  
ことで片寄らない生活を意識してきました。生き  
る幅とか対外的な人間関係、ましてや自分のやり  
たい事が狭くならず、家事が誰かに片寄ること  
によって見えなくなっていくものがないようにする  
のが一番の思いでした。

私は決して妻に優しくしたいとの思いだけで、  
育休を取ったのではなくて「私が育休を取ってい  
る間は、一生かけてやれることとか、かけがえの  
ない友人であるとか、そういうのをしっかりと外  
でも見つけなよ」という課題を与えたつもりで  
す。妻もそれに応えてくれたと思います。誰かが  
新しいことをすることによってそれに続く方が出  
てきたり、結果的に自分とか家族のライフスタイル  
の選択肢が広がっていくということは非常に大  
事なことだと考えております。男性が絶対取る  
べきということではないのですが与えられた条件  
の中でいろいろな選択肢を自由に考えられること  
が大事なのであって、それがワーク・ライフ・バ  
ランスの充実につながっていくのではないかと  
いう風に考えています。

<発表6> 田中 大塚製薬は「Otsuka-people  
creating new products for better health  
worldwide」という、世界中の人々の健康のた

めに画期的な製品を作り続け  
るという企業理念がありま  
す。そのためには「成長と改  
革」が必要だというように考  
え、その存続を望まれる会社  
であるためにダイバーシティ  
推進ということを進めており  
ます。「ダイバーシティ」と



事例発表者  
田中静江

という言葉は、必ずしも女性だけを指しているわけ  
ではなく、国籍や人種、年齢、性別、身体的特  
徴、そういったもの全ての多様性を受け入れ、そ  
してその強みを活かしたいと考えています。

仮説としては、女性が働きやすい環境になれば  
性別や年齢、国籍にかかわらず意欲ある有能な社  
員がとどまり続けて革新を生み、このことによ  
って企業が成長できると考えております。取組は育  
児勤務のプラスα、失効する有給休暇の有効活  
用、再雇用制度、週1回の在宅勤務、NO 残業  
(WLB) デイなど、勤務に関する様々な配慮。中  
でも全国型の会社ですので、遠距離恋愛の果てに  
辞めざるを得ない人に対しての結婚時に限る異動  
配慮は劇的な効果を生みました。

また、ダイバーシティフォーラムという形で役  
員と社員が共に全国から集まる会や自主的な女性  
リーダー研究会、ワーク・ライフ・バランス研究  
会。また育児や出産を控えた人たちを集めてネッ  
トワークを作るための大塚ウーマンズネットワ  
ーク・ワークショップ。あるいは女性だけでなくイ  
クメンもイクジイも作ってもらいましょうと男性  
社員に対してのセミナーなどいろいろと取り組ん  
でおりますが、その中で一番の私の自慢は「ビー  
ンスターク保育徳島」であります。弊社は徳島出  
身ということで、地元出身の社員もたくさん居る  
のですが、ただ研究所の社員に関しては、なかな  
か徳島出身だけということは難しく全国から集  
まってもらっております。そういった方々が働き

やすい職場を目指し、保育園を設立いたしました。ビーンスタークというのはイングランドの民話のビーンスタークのことで、すくすくと育っていけるよという意図があります。園内には人工的な遊具は一切用いておらず、すべて普通のお山とか、木の切り株というものでやっております。また、杉の木をひいたとても素敵なホールがありましてみなさん裸足で走り回っておりますし、この杉は徳島県産の杉を使っております。この保育園を通じまして子どもたちに、安全で衛生的な保育環境を提供し、子どもの才能とか創造性とか個性などを伸ばしていくということを考えています。子どもたちの間ではこれほど自由な個性的な発想をしているのに、なぜ大人になると固定的な観念になってしまうのだろうと日々感じられるところでございまして、自由な発想、個性的な発想を求められている弊社としましては、このようにお子さんから学ばせていただく面がたくさんございます。

**<発表7>吉田** 私は「仕事をするなら東京、暮らすなら地方」とか「年をとったら地方に移住」とか「若いうちは仕事最優先」など、誰が決めたかわからないのですが、なんとなくそれに従って生きていることに違和感があり、こういう事に縛られない生き方ってないかと思っていました。私も都会にあこがれて都会に出ていたのですが、何かのために何かを捨てなくてはいけない生き方を強いられる場所のように感じました。お金の面であったり、仕事の面であったりですね。大切な物って別にお金や仕事だけじゃないので「大切な何かを捨てなくてもいいような生き方」を作れないかと考えながら、モニターに向



事例発表者  
吉田基晴

かっているのが日常のコンピュータ業界の私たちです。だからこそ、自然や文化などに寄り添って生きていきたいと思い、昨年5月人口7,700人の過疎化した町、私の地元でもある美波町という所に美波Labというオフィスを作りました。

これは技術的な研究所でもありますが、ライフスタイルとか、ワークスタイルの研究、挑戦というのも含め「ラボ(=)研究所」という名前にしています。美波ラボを作る時に私なりに働き方のキーワードを考えてみました。本業のITワークと個人が大好きな何かを変数のXと置き、仕事だけでもない、当然遊びだけでもない、両方大事なものを高い次元で両立させるような生き方ができないかと「半X半IT」これをテーマにしています。コンピュータの仕事の傍ら「農業したい」「サーフィン大好き」「釣り好き」とか、このXに当てはめると「半波半IT」となりますね。このテーマで人材募集を行ったところ「半農半IT」「半漁半IT」「半猟半IT」と、様々な賛同者が現れました。私も彼らに影響を受け、漁船を持ちました。船の名前は、私が呼ばれ続けてきた「阿武能丸(アブノーマル)」にしています。このラボでは仕事は当然ばりばりやっていますが、農業、養蜂をしたり、地元のお祭りや防災活動に参加したり、学校でIT授業の担当、お年寄りの方へのITレッスンなど様々な活動もやっています。

この活動を通じて、この徳島も含め地方では過疎化だ、限界集落だ、後継者がいないとか様々な問題が山積しているということが分かりました。一方で、徳島は超高速のインターネットが張り巡らされていますので、見方を変えるとこれは世界の最先端の地域だと私は思っています。自然は素晴らしく地元の人情の中で生きていける、最先端の課題とインフラもあるのでこの関係は考えてみるとビジネスにとっても素晴らしい場所だと思

い、本社も移転しました。地方だからこそ一流の仕事ができるんじゃないかなと思っていますし、すべてを大切にできる生き方ができるんじゃないかなと思っています。私はワーク・ライフ・バランスやダイバーシティなど、実は全く知らず今回の機会をいただき私たちに新しいワークスタイルを考えたい時に、通ずるものがあるのかなと感じています。こういう生き方をどんどん挑戦し発信していきたいと思っています。

## まとめ

**渥美** 今回は、ワーク・ライフ・バランスとダイバーシティの二つがキーワードなんですが、僕は実は裏腹の関係だと思っています。ダイバーシティに関して言えば、女性活用化が大きなひとつの柱で、それとともに、多様性だけでなく多面性ということもひとつの視点になります。育児・介護などやらざるを得ないからやるってこと以上に、それぞれの社員一人の人生が職場という環境の中で、そういう人の中の多様性と多面性の相乗効果が現れ多面性を持った社員が増えていくと、そこからイノベーションが生まれるという事が企業にとっては重要かと思います。要は消極的に仕方なしにやるのではなく、それはチャンスなんだと捉えることです。チェンジ・チャレンジ・チャンスと、「3つのCH」と言っているのですが、そういう考え方で果敢にやっていくことで職場を変えていきます。その後にはフォローアがついていくと、職場に対するまわりの人々の受け止め方も変わっていき、周囲にどんどん波及していく。

ライフは決してワークと同等にあるものではなくて、広く人生と考えればワークの基盤にあるものであって、そのライフっていうものがどんどん充実して土台が堅固になればよりよい仕事ができる。その土台はいろいろな関係者で、パートナー

あるいは子どもとか親、職場の同僚、ビジネスパートナー、そういう人たちと手を結びネットワークが広がっていく。そのネットワークがビジネスチャンスになってくる。個人としてワーク・ライフ・バランスをやったら幸せというだけじゃなく、企業が投資すると大きなリターンが返ってくる。今回のように業績が上がっているというのは、それなりの理由があるということです。投資している会社は、やればやるほど大きな経営効果があるからやっているのですが、やらないとなかなかそれに気づかないんですね。

最初になかなか一歩を踏み出せないのは、すぐに効果が出ないからでしょう。健全な職場改善、強靱な経営体制と風土が変わってくるには時間がかかります。そこをあきらめずに続けるということも大切です。今回もすでに取り組まれています。企業が行政のコラボがこれからは大切かなと思います。ワーク・ライフ・バランスを企業戦略以上に地域戦略として取り組むことに大きな経営効果があると思っています。ワーク・ライフ・バランス、子育て支援という取り組みは、単に企業に留めるのではなく地域にどんどん子どもが増えて育て、さらに持続可能性が高まる。未来の消費者労働者を大切にするという取り組みだから、行政とともに自分たちも率先して商売相手、ビジネスパートナーに広げている訳です。ワーク・ライフ・バランスに成功するかどうかが、大きく地域活性化とも繋がり、日本はひとつの分岐点に立っていると思います。これからは皆さん自身がキーパーソンだと思いますので、ご紹介いただいた素晴らしい事例も参考にしながら、さらに皆様の取り組みを広げ深めていっていただきたいと思います。



## 第8分科会（農林漁業）

# 生命(いのち)を育み希望あふれる地域づくり



コーディネーター  
**小松泰信**

岡山大学大学院  
環境生命科学研究科教授

パネリスト  
**榊野瑞恵**

有限会社柚冬庵代表取締役

パネリスト  
**鳴滝貴美子**

こまつしま漁と農ゆめ会議会長

パネリスト  
**栗飯原富士子**

水稻農家・JA あなん女性部長

## 「6次産業」と「男女共同参画」

**小松** 農林漁業という第1次産業は、まさに、それ自体が生命、いのちを持っているものたちの連続です。「生命」という2文字がキーワードになる産業がこの第1次産業、農林漁業です。育てながら、未来に希望を持ってあふれる地域づくりをやっていくべきではという問題意識で、8分科会のテーマを設定しました。



コーディネーター  
**小松泰信**

農林漁業はこれだけ重要であるにも関わらず、高齢化、担い手不足、作ったものがなかなかいい値にならない。TPPという問題など、いい話はなかなかない。しかし、現場は絆であるとか、消費者との交流、生産から流通まで一貫して行こうなど、さまざまな取組をやりながら、実は自分自身もいきいきと、そして地域にも貢献されている人

がたくさんいます。3人に共通した「6次産業」という言葉は、1次産業、2次産業、3次産業の頭数字の1と2と3を足しても6、1と2と3をかけても6、ということで6次産業といわれています。

しかし、農林漁業という1次産業が、1でどまっていたら、なかなか豊かにはなれない。原材料を作るだけに終わらず、少し一手を加え、加工、製造に入り、自分たちで売り、宣伝するという第2次、第3次産業的なことを行い、連携する。でも主導権は第1次産業が持ちながら、行っていかなければ、これからはなかなか報われないという、願いとか意識がこの「6次産業」に込められています。分科会ではこの「6次産業」と「男女共同参画」を共通キーワードに進めていきます。

## 我が家の農業経営とJAあなん女性部活動

**栗飯原** 私の地域は、平成16年に圃場整備が始まり、作業負担が少ない、適正な水田地帯です。私が嫁いできたときは、1.8ヘクタール。現在は、早期米を33ヘクタール栽培しています。17倍の面積に増えました。そして、ブロッコリー2ヘクタール、産直市用の野菜作りを20アール栽培している専業農家です。



パネリスト  
**栗飯原富士子**

私たち夫婦・息子夫婦・孫3人の7人家族で農業は息子夫婦とともに4名で従事しています。家族経営を平成16年3月に結び、4月、8月の農繁期以外は土日が休みで息子夫婦は、孫たちのバレーやサッカーの応援に出かけています。

息子夫婦は結婚して7年後、会社をそれぞれ退社し、就農しました。非農家出身のお嫁さんに「どうして百姓をしたいの?」と尋ねると、「お義父さん、お義母さんが楽しそうに農業をしている姿を見て、憧れたから」とのことです。息子夫婦は農業大学校に1年間通学し、野菜作りの基礎や、トラクター、コンバインなどの操作も勉強しました。二人が農業を始めて、今年で10年目になり、地域の方々からも「よく働くなあ」と声をかけていただいています。経営方針なども4人で話し合い決めています。

**経営特徴の1** 138枚の田んぼ数があり、4人にしかわからない名前がついています。肥料は子どもの名前がついたオリジナルの肥料で、機械も大型になり、倉庫にたくさんの機械があります。

**経営特徴の2** JAを主体としてお米を出荷し、精米機に色彩選別機を取り付け、品質アップに取り組んでいます。

**経営特徴の3** 息子夫婦が早生と奥手のブロッ

コリー2ヘクタールを栽培しています。育苗ハウスは12あり、7000箱の苗箱を置き、私は野菜作りを生き甲斐にがんばっています。

**経営特徴の4** 阿南市の大手企業を脱サラした35歳の青年にひとつのハウスを提供し、いろいろな野菜を栽培しています。お嫁さんが、カフェを経営し、新鮮な野菜が食材として使われています。青年は、支援センターの「アグリーズ」JA青壮年部の会に息子と出席し、たくさんの仲間ができました。地域農業を担う後継者として、私の地域では、40歳代3名、30歳代2名、20歳代1名、今年からは19歳が農業を始め、農業経営に励んでいます。やる気のある若者が農業に従事していることは、素晴らしいことだと思います。

### JAあなん女性部活動

2048名が部員のJAあなん女性部は、食農教育を活動の柱として、次世代を担う子どもたちとともに、農業体験スクールを毎年行っています。大豆栽培では収穫体験と、大豆を使って子どもたちと豆腐づくりを行っています。これからの農業を担っていくのは、やはり地域の子子どもたちです。農業や食の大切さを伝えていくことが私たちの使命だと考え、取り組んでいます。

また、みんなが参加できる農機具安全講習会を毎年開催しています。男女共同参画を学ぶことができる男性料理教室なども開催しています。そ





して、「女性の声を」JA運営に」と、10年前から活動をし、平成15年度から女性理事1名が誕生、今年6月には3名が選任されました。女性の視点を活かし、食農教育や6次産業化などに取り組んでいきたいと考えています。

JAブランドの商品化により、JAあなんの農産物のブランド力アップにつながっていく活動をこれからも続けていきます。

**今後の活動** ①家族とともに経営を強化し、地域農業を守る。②子どもたちに食や農業の大切さを伝える。③農業の楽しさを伝え、地域の後継者を育てる。地元の高校生を我が家に迎え、さまざまな農業体験を実施する、というひとつの夢があります。

**小松** 今日は農業とはあまり関係のない、関わっておられない方もたくさんいらっしゃると思い、ひとつだけ申し上げておきます。ヘクタールですが、1万平米ですね。覚えやすいのは、100メートルかける100メートルの正方形を頭に描いていただくと、あれが1ヘクタール、古典的に言うと、1町歩という話になるわけです。100メートルかける100メートルはというと、阿南は野球の市ということで、グラウンド、ホームベースからレフト、ライトのフェンスまでが82.3メートルぐらいあります。あそこからちょっとスタンドまで行くと、1辺が100メートルと。だからこれからは、野球を見るとときには、ホームベース

からあそこの正方形が1町歩。1ヘクタールと想像いただければ、嫁がれたころは、野球の面積が、2グラウンド、今は33グラウンドになっているということで、わあ、すごいということになるわけです。

## 木頭柚の6次産業化の取り組み

**神野** 非農家からゆず農家に嫁いで、30年になります。私の住む地域は高齢化率が48.7%で、学校は小・中学校あわせて60人を切る山間部の地域です。



パネリスト  
神野瑞恵

徳島県のゆずは全国第2位の産地で、「木頭ゆず」はトップシェアを誇り、ゆずの玉をそのまま出荷する青果主体の産地として形成されてきました。野菜とか露地野菜と比べると、「年金生活から始める柚栽培」と木頭ではよく言われますが、60歳から80歳でも十分に生産可能な産物です。しかし、コンテナで抱えることや、あまり高齢化してくるとなかなかいいものができなくなり、ブランド産地の維持が難しくなってきます。加工用原料出しも、全国どこでも栽培ができ、飽和状態で、原料がとても安くなってきました。

柚を取っても出さずと、引き受け先がないため、作るのが嫌になってくるという状態です。木頭柚産地が守れなくなるという心配の中、6次産業化で自らいろいろと商品を作り、販売することが盛んになってきました。

6次産業化ですが、会社柚冬庵はすでに平成2年から法人化し、6次産業に取り組んでいます。柚農家5軒が夫婦で出資し、立ち上げた会社です。当初は、私の嫁いだ先の両親が、このメンバーの5戸のうちの1戸で、私はまだ会社に携わ

らず、家で子育てをしていました。平成18年、5軒のメンバーの内、3軒が高齢化して辞めることになりました。残り2軒と、私の家と後継者がいるもう1軒の農家で引き継ぎ、出資金を買い取り、4人で新たに再出発しました。

その時、私が代表になりました。これまでは男性3人が社長でした。私もパートで平成7年ぐらいから、義母の代わりに勤めていました。総会は男性の社長が経理についていろいろと説明し、普段は全然現れず、作業はすべて女性が行い、柚味噌作り、ジュース作りをしていました。私は、中で作業を行っていない人が社長で経営していくことが不思議でした。その頃は、私もパートだったため、悶々とはしていましたが、特に深く突っ込まず、考えませんでした。

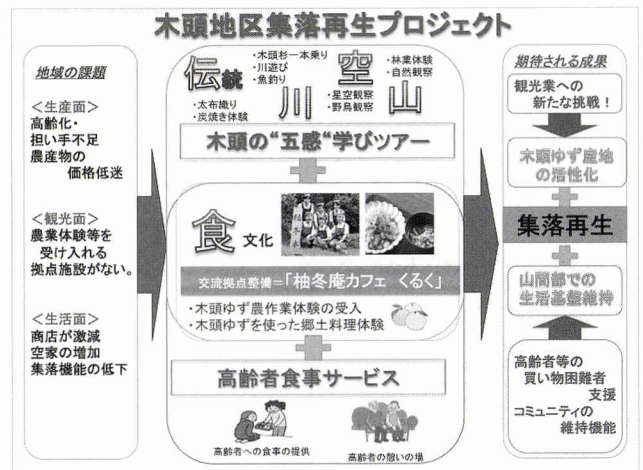
しかし、会社再出発時は、作業をしている現場の人間が代表として、経営のことも携わった方がよいと考え、私が代表に手を挙げました。

今はパートを7名雇い、柚ジュースやジャム、ポン酢などを製造し、工場を回しています。

私が就任した後、商品のパッケージを全部変えました。ジュースなどはこれまで900ミリリットルの瓶で売っていたのですが、核家族化が進み、大きな瓶では売れません。日常使いやギフト用に、小さい瓶に変えるという発想ができるのは、やはり台所を預かっている女性で、その視点が商品に反映されると、売り上げが伸びてきました。新たな販路を求め、東京ビッグサイトでの展示会や百貨店での出展を6次産業化企業と連携しながら実施しています。

柚冬庵は、商品を作って販売するだけでなく、地域と連携し活性化していくという思いがあります。子どもたちに郷土料理「かきませ」の調理体験や柚の収穫体験など、食育活動の実践もしています。

消費者の方々に、柚産地に直接来て、本場の味



を食べて欲しい、という思いが以前からありました。ようやく今年10月1日、柚冬庵カフェ「くるく」をオープンすることができました。「くるく」とは、木頭の方言で「来るところ」という意味で、みんなが集う場所にと名付けました。都市部からの観光客に美味しい柚料理を提供し、地域高齢者の拠り所として、食事サービスも考えています。

2年ほど前から、自宅でインターンシップの学生を受け入れ、1週間家で寝起きをともにしながら農作業をしています。学生からもっと訪れたいという要望に応え、「カフェくるく」を拠点に、これからも受け入れたいと考えます。

山村交流学習として、私の住んでいる少し奥に山村留学を一生懸命行っているグループがあります。連携して、1ターンやUターンの移住についても呼びかけていきたいと考えています。

地域の良さを知るため、学びツアーとして木頭で農業を体験する。また、地域の高齢者には宅配の食事サービスを提供することで人の雇用が生まれ、地域再生になり、とにかく今の地域の現状を守りたいと思います。柚冬庵という、小さな小さな加工会社と一緒にみんなでがんばります。

柚冬庵カフェ「くるく」を開くまでは、女性を中心でしたが、空き家を再生する際に本当に男の人の力が必要で貴重な力になりました。メンバー

の夫たちがみんな出て、空き家を改修するとき、とても助けられました。男の人と女の人と一緒に手を取り合って中山間地を守っていかなければいけないということを、今回痛感しました。

## 小松島漁と農ゆめ会議

**鳴滝** 小松島市和田島町は漁業の町で、船引き網や底引き網、わかめの養殖などが盛んです。中でもちりめんの BATCH 網は県下の漁獲高を誇って



パネリスト  
鳴滝貴美子

います。全国的にも珍しく、水揚げから加工までをすべて個人経営で行っています。できあがった「ちりめん」は、「和田島ちりめん」としてブランド化、販売しています。私は、22歳の時に、漁業とは全く無縁の徳島市内から、

漁師へと嫁ぎ、手伝いながら、家業について覚えていきました。現在は、夫婦と長男の3人、従業員6名で経営を行っています。平成10年に経営移譲され、同時に漁協女性部の活動に参加、平成17年、県漁業女性部連合会の会長になりました。全国女性部の活動を聞き、もっともっとがんばらなければいけない、何かをやらなければいけない、と思うようになりました。迷っているとき、まちづくりを手がけているNPOの松本さんから、漁と農で何か新しい活動ができないか、という提案があり、ゆめ会議の発足につながりました。

思いを形にするため、JF和田島女性部や檜淵の農家の人とともに、和田島漁協の参事や、まちづくりのプロである徳島大学の先生のサポートを受けながら、国の補助事業を活用し、地域活性化に向けた将来ビジョンの活動計画を立てました。事業は単年度なので、話し合いにスピード感が求



められ、住民主体の話し合いでまちづくりのビジョンを作っていくワークショップが始まりました。

ゆめ会議は、毎月第3日曜日の午前中に開催し、全員が発言することを基本としています。大半の参加者はワークショップが初めてで、紙を見つめている時間が長かったです。会を重ねる内に次第に慣れ、壁がその小さい紙で埋まってしまうほど、たくさん意見が出るようになりました。そしてできたのが、「漁と農の連携ゆめビジョン」です。目的は、漁業や農業の連携による新たな活動づくり、担い手づくり、仕事づくりです。そして、活動をA～Eの5つに分けました。

活動Aは、和田島地区のちりめんや他の水産物など、檜淵地区の竹林やたけのこなどの「既存資源の調査活用」です。活動Bは、私の家も含めほとんどの漁師はチリメンの加工までで、直接の販売をやっていません。消費者との交流を深めたいとの思いから、「6次産業化の促進」です。活動Cは、子どもたちに漁業や農業の自然を相手にしている職業の、大変さやおもしろさを知ってもらいたいと、「担い手育成、交流連携の促進」です。活動Dは、燃油高騰への対策として、「低炭素型活動促進」です。活動Eは、南海トラフ巨大地震への対策として「市民防災促進」です。

最初に、活動B「6次産業化の促進」活動C



「担い手育成、交流連携の促進」に取組ました。

ゆめ会議を運営するにあたって、①毎月第3日曜日開催、始まりと終わりの時間を守ります。②出席者全員が本題に入る前に、約1分程度近況報告をし、本題で軽やかに発言ができるようウォーミングアップをします。③場を和ます仕組みづくりとして、決して堅苦しい会議にはならないように、コーヒーを飲みながら、人数も15名程度に抑え、大きな声で話さなくてもよい会場で話し合いをしています。④明確な会議の着地点として、小さな活動でお金がかからず、和田島と檜淵の農家が協力できるような活動を常に基本としています。⑤カードを使用し、一人ひとりの意見を「見える化」をするとともに、前回の意見も再確認し、共有するようにしています。⑥広く意見を抽出し、全員で合意形成を図りながら絞り込みをし、まとめています。

「漁と農の連携ゆめビジョン」の会員にアンケートを取った結果、やりたいことの明確化は86%、地域活性化の期待は93%、会議への参加については、100%の人が参加したいと考えています。経済活動への期待は79%、自信を持って、積極的に様々な活動に取り組んでいるという結果になりました。

これまでの取組の成果ですが、「和田島ちりめん市」があります。去年10月に第1回、今年6月に第2回を開催することができました。第1回は用意していたちりめんが30分で完売し、多くの方に迷惑をかけてしまいました。第2回は十分なちりめんの量を用意しましたが、釜揚げしらすは早々に完売しました。1回目は約800人。2回目は、1,200人以上の人が来場しました。漁協青年部に駐車場の整理を頼み、漁協のスタッフも、休日返上で手伝っていただきました。最初は本当に無関心だった夫たちが、会場に足を運んで、テント設営から販売まで手伝いました。最初



は女性部だけの活動だったのですが、今では和田島漁業全体の活動となっています。

「キッズ漁師体験プロジェクト」というイベントを企画し、小学生の親子を対象に県下一円から参加がありました。わかめの芯抜き体験やちりめんの中に混ぜられている小魚などを探す「ちりめんモンスター」など、漁業への理解を深めました。

農業を理解してもらう「豊かな竹体験 in こまつしまプロジェクト」のイベントも実施し、整備された竹林を見学、タケノコ掘り体験もしました。

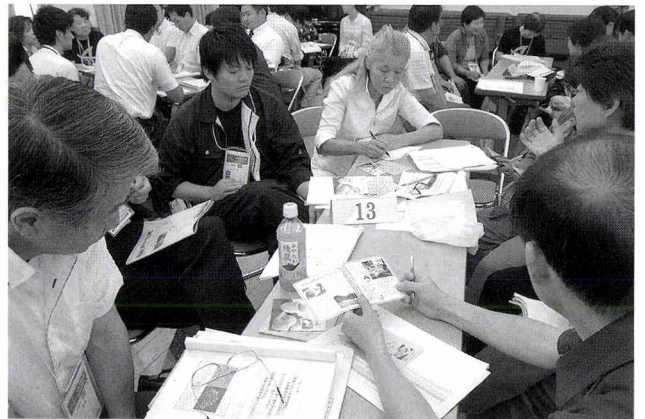
**今後の活動** ①農家との連携を図り、相互交流により、防災面でも協力体制づくりを図っていききたい。②6次産業化を進め、安全で安心な自慢のちりめんを、直接消費者の方に販売できる機会を増やしていきたい。③漁業を核とした地域の活性化を図り元気な漁業の町、和田島にしていきたい。  
**小松** ゆめ会議の運営ポイントを①から⑥あげています。これは、じっくり考えて行くと、非常に時間が限られた中で、集約的で、そして実りの多いことです。参加者全員が責任を持って決議、取り組むと言うことで、和田島の取り組みだけではなく会議全体の参考になると思います。

時間の関係で、少し省略された「漁と農の連携ゆめビジョン」の活動のうち、事前に我々が勉強会をやったとき、Dの活動について非常に興味がありました。補足的にこのDというのはどんな考えで、どういうことを言っているのか、教え

ていただきたいと思います。

**鳴滝** 低炭素型ということで、燃油という。うちは船が3はい、網を引く船が2はい、それを運搬する船が1はいとで、合計3はい。それをちりめんにする加工場に油の施設がありますが、船は軽油で、加工場の方はA重油と言います。それが、リッターほぼ95、6円です。船を1回漁に出すたびに、10万円余り要ります。魚の値段は安いのに、油が高いということで、全国的にも漁師たちは悩んでいます。油に代わる何かがあるのではないかとということで、太陽光とかいろいろ、今電気自動車とか開発されていますが、船も同じようにできるのではないかと考えています。

**小松** 補足的に言うと、地球温暖化にいくと低炭素ということで、自動車も排ガスを、CO<sub>2</sub>を出す。だから農業でも他のことでも、二酸化炭素を出していると、環境に悪いという話になります。環境に優しいと思っていた農産物直売所が、出荷する人もお客さんも車で二酸化炭素をまき散らしながら来る。どこのスーパーに行くにも、皆さんよく車を使用する。真面目に正直に悩んだ農産物直売所の人たちが何をしたかということ、「車で来るな、自転車で来い」という訳にはいかない。太陽光とか、いろんな次のエネルギー手段、CO<sub>2</sub>を出さないエネルギー手段を考えなければいけない。考えるが、時間がかかる。考えている間にもCO<sub>2</sub>を出す。そこで「カーボンオフセット」という考え方がある。神奈川県のア農協で、レジを通った人、一人につき1円ということで年間50万人ぐらい来るから50万のお金で市に街灯、LEDの電球を寄付する。これで、私たちのお店に来る人が出した二酸化炭素を減らす方向でやってくださいということです。出航漁に行くたびに、いくらかという貯金をしておいて、LED電球を寄付する。阿南市が誇るLED、これは電球の中でも一番CO<sub>2</sub>が低いそうです。



私、Dの活動を聞いたときに、「カーボンオフセット」の考え方は、今回の日本女性会議が開かれた、阿南市の産業にも関わると思いながら、機会があったらぜひご紹介したいと思っておりました。

#### 質疑応答

**小松** 3人の方々に共通しています、キーワード「男女共同参画」についてお聞きしたいと思います。農林漁業全部ですが、まだまだ男性社会の中でそれぞれの活動を実現・実践していくのに、どのように男性との関わり方や役割分担していったかを教えてください。

**鳴滝** ちりめん市では、青年部の人たちにテント設営から駐車場の整備、渋滞緩和のための交通整理をお願いしました。青年部の会で「頼むな」と言ったら、「これは強制で?」と。「強制では無いけれど、半強制かな」と言うと、「家で母親にご飯食べさせてもらえなかったら困るから、しかたがないので手伝おうか」というような返答でした。でも、ユニフォームを揃え、Tシャツを揃えて、「みんなでがんばって」と言ったら、自分から進んで、トランシーバーがあったほうが離れている距離の連絡が取りやすいのではとか、自分たちが経験したことで、話し合いながら準備をしました。

夫は本当に無関心でした。「何をしているのか」「わたしたちがすることは良いが、和田島の漁師がしていることで、恥はかかすなよ」と「ちりめんが30分で売れて、それはどういうことか」と、各家庭で女性が怒られたとのこと。私の子どもたち、夫だけでなく、網元のたくさんの漁師さんたちが手伝いました。

**榊野** 会社は有限会社です。男の人は、私の夫ともう一人の男性がいます。最初に私が代表になったときは、「とにかく好きなようにさせて」と。二人ともそんなに年もいってなかったので何も言わず、5年くらいは好きなようにさせてもらいました。催事についてゆずを販売すると、農協に出すより、いい値段で売れました。農家なので家のゆずが売れるというのが、結果です。売り上げが上がってきたことで、理解ができました。総会のたびごとに売り上げを伸ばす、数字を伸ばしていくと、男の人も自然と変わってきたのではと思います。

今回「カフェくるく」の運営には、積極的に照明やフロアのことを自らがんばって行いました。最初は男の人には全然相談もせず、一人で女性の視点でつっぱしりましたが、結果がついてくると、みんなが巻き込まれるということを思いました。

**小松** 最初から男女共同参画というよりも、とり

あえずは自分たちでできることで、認知させていくという感じですか。

**榊野** 会社なので、売り上げてお金を作っていくという結果です。結果がみんなを巻き込めるという感じです。

**栗飯原** 残念ながら、阿南市では女性農業委員はいません。女性が地域から立候補するのはなかなかの勇気がいるので、最初は女性枠のようなものを作っていただいて、立候補すればよいと思います。

JAの理事は、今年で2期目、4年目に入ります。理事で女性は私1名で、3年間1人でした。なかなか発言ができませんでした。その時、組合長はじめ役員の方が、「意見どうですか」と声をかけていただいたことで、私なりの発言もし自分に自信を持つことができました。今年、25年6月に女性理事3名が選任され、仲間ができました。現在では、男性の理事から「3人が協力してがんばれよ」と声をかけていただいています。

**小松** ぜひ、今日の時間を、もう一度ご自分の中で、振り返っていただき、考え方が合う人もいれば、ちょっと違うねという場合もあったかもしれませんが、全部自分の課題として引き寄せて、また自分たちの地元で、それなりのご精励をいただければと思っています。



## 第9分科会 (DV)

# DVのない地域づくり

～男たちの挑戦～



コーディネーター

**市場恵子**

社会心理学講師・カウンセラー

コーディネーター

**市場尚文**

小児科医・メンズリブフォーラム岡山  
世話人

パネリスト

**青木浩次**

阿南市在住

パネリスト

**福谷美樹夫**

地方公務員

パネリスト

**横手久典**

阿南市倫理法人会会長

**男性スタッフ** 男性にも地域づくりに積極的に関わってもらおうと、180名の男性にメッセージボードを持ってもらうプロジェクトを行い、その映像を開始前に上映いたしました。

**司会** 本分科会はDVについて、スタッフ全員が率直に語り合うことから全てがスタートしました。スタッフ自身の意識の変化とともに、分科会の内容が形づくられていきました。

### 基調講演

**市場恵子** まずは、私たちがどうしてここに2人いるのか、というあたりからお話します。私が



今、62歳、彼がこの前67歳になりました。若者が社会について、あるいは政治に対して、非常に意識を深め実際に行動していた時期に出会って、似たようなことを考えている人がいるなあと思って近づき、一緒に暮らそうかということになって、暮らし始めたわけです。最初は、「世直しを一緒にしよう」というプロポーズの言葉がありまして、彼の生まれ育った町である岡山に移住しました。はたと気が付いたら私は仕事にも就かず、ただ彼と一緒に暮らしを始めて、彼のほうが「行ってきます」そして私は真夜中に「おかえりなさい」と迎える。いわゆる専業主婦的な毎日が始まったわけです。これは計算外。彼は、力を得たようにいきいきと仕事と活動に行くわけですが、こっちはどんどん心がすさんでいく。刺激もないし、毎日ご飯作って洗濯をして「おかえり」って迎えます。

これは仕事につかないと、私、自分がだめになっちゃう。ある日、思い余って「仕事をした

い]と彼に言ったところ、「仕事ってのは大変なんだよ」とこういうわけです。「仕事は大変だから、稼ぐのは僕に任せろ。あとは君は自由な時間で好きなことをやったらいい」と。なんか違うぞと思いつつも妊娠がすぐに分かり、いざ働きたいと思った時にはすぐに転勤が決まり、専業主婦的な状況から始まったのが、私たちの生活でした。それでも「わが家はもう未来に向かって男女関係はなく、ともかく自分の身の回りのことはやりましょう」と言って家事分担も提案し、子どもたちもそのように育てました。ある時、彼に言われました。「君は女の集会に出るたびに強くなっていく」と。強くなったといっても暴力を振るうという意味ではなく、嫌なことにははっきり「いやだ」とか「私はそうは思わない。私はこう思う」というようなことをきっちり言い始めたわけです。それが30代の半ばを過ぎたころですかね。

**市場尚文** あまり自分の未熟さとか、頼りなさに気づいてない。自分は男性の中でも料理もできるし、まあ、ましなほうだと。一番いいとは言わなかったが、100人いると上から3番目くらいに位置づけて、自分を正当化していた時期がありました。子どもには暴力的に衝突することもあったりして、今思ったら本当に恥ずかしいことです。「2人で世直しをしよう」なんて言って結婚したぐらいですから、社会的にはずいぶん目覚めているつもりなんです。人権とか男女平等なんてことは、口では山ほど言っている。実際、男女平等と、言いながら家では子どもたちに暴力を振るったり。あるいは自分が上であるかの如く行動している。頭の上では、「男女平等わかったよ」と。実際の生活の中ではそうでない自分に気づくわけです。実はそういう錯覚を、私だけじゃなくて、いろんな人がしていると思います。力をたくさん持った人が、力をまだ持っていない、持たされていない人と向き合っていて、親しく付き合うとき



に起こりやすいのが「暴力」ですよ。

そこには、大人と子どもとか、上司と部下という力の差もあれば、男性と女性という場合の力の差が、まだまだこの社会には残っていると感じるわけです。

**市場恵子** 長い間この日本においては、お父さんが何か気に食わなくて、ちゃぶ台をバーンってひっくり返そうか、あるいは相手を馬鹿にしたり罵ろうか自由。そういう暴力が存在することは、被害を受けている人が声を上げない限りなかなか目に見えない。



コーディネーター  
**市場恵子**

なかなかDVが、みんなの意識の中に上らなかったのは、多分日常茶飯事で起きていたからなのではないかと思えます。もちろん女性から男性へも起きていますが、多くは夫から妻への暴力、今はきちんと取り組まれるようになってきました。

外の顔と中の顔が違う、あるいは密室で起きているこういう支配と暴力はなかなか外には出にくい。自尊感情を傷つけられ、恥の感情を持たされるので沈黙してしまうんですね。被害者が声を上げ始め、上がった声に対して「あなたを一人ぼっちにさせないよ」って手をつないで立ち上がった歴史が、日本ではこの10年20年の女たちが作ってきた足跡だと思うんですね。この分科会など学習の機会を経るごとに、地域の中にDVに対

する意識を深め、被害を受けてる人を一人ぼっちにさせない、手を差し伸べられる地域に変わっていけるといいなあと思っています。

**市場尚文** 今日のテーマは特に、「男たちの挑戦」ということで、男性のことについて少し主に話してみたいと思います。



コーディネーター  
**市場尚文**

家制度も男中心の歴史がある。男性は医学的に言うと、とっても弱い性なんです。

女性よりはるかに弱くて、例えば孤独にはすぐ耐えられなくなったり。出血しても女性は、体の二分の一出血してもぴんぴんしているんだけど、男性は三分の一出血したら死ぬぐらい。適応能力も悪い。男性ホルモンの関係で、筋骨たくましい形ができ、家でも男中心が当たり前の文化が定着しているけれど。そもそもの結婚のことを考えた場合に、一般的には男性のほうが年上ですし、経済力も上ですし体力も男性の方が強いとなれば、結婚するときには、男性が気をつけておかなければ、普通にいるだけでも力関係ができちゃうわけですね。DVは、基本的には、力関係、力の差があるとそこで起こると思います。結婚する段階で男性はそれを自覚しなければいけない。まだまだ浸透していません。

それから男がこうでどこが悪いとどこかで思ったりしていると、色々錯覚とか誤解が生まれてくる。特に男性は成長過程の中で表現する場を与えられないので表現力が乏しいです。大人になっても、表現力の悪いままいきますと、高校生の時期になると言い負かされて、つい問答無用という形で手が出てしまう。あるいは、感情表現できませんから、なかなか自分のストレスが発散できません。ですから、外ではいい顔しているけれども、家に帰ると、たまったストレスを弱い者にぶつけ

るという形ででることになる。

DVというのは、男性の歴史と同時に生き方、あるいは男性についての考え方、結婚についての考え方などが温床になっていて、ラッキーにも出ないかも知れないけど、ある人はすぐ出てしまうみたいなものがDVではないかと思ったりするんです。

**市場恵子** ジェンダーというものが氷山の下に眠っていて、そこではまだ、暴力は起きていないまでも、価値観とか考え方や、カップルの考え方や、かわり方でも出る、氷山の一角のようかと思えます。女性への暴力や、弱い人に向けられる人権侵害は、事件になる前の、考え方、人と人の向き合い方、パートナーシップが歪んでいる時に、人権侵害という形をとって出てくるのかなあと思えますね。

## パネルディスカッション

**市場恵子** 実行委員の男性の比率が4割のこの会議、まずはなぜこの活動に関わられたか、自己紹介方々お願いします。

**青木** 私がこの分科会に入ってきたきっかけは、人に頼まれるとよう断らんたちでございまして。一番人数が少ないところが第9分科会で、行ってみたらDVだったので、どうしようかと思ったのですが、そのまま後ろ向きの姿勢で入ったのが実態です。



パネリスト  
**青木浩次**

**横手** 私はこのビックイベントが、人口8万を切るような阿南で開かれるということで、「運転手でも、ポスター貼りでもなんでも手伝わせてください」と言いましたら「分科会に入ってください」ということで、軽い気持ちで入らせていただ

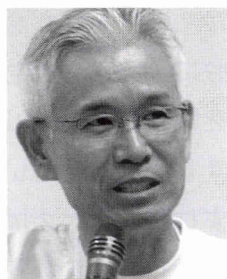
きました。

**市場尚文** 分科会に入るのもさることながら、パネリストになった決意もまた、みんなが聞きたいのではないかと思うのですが。

**横手** 言われたら断れん人が多いので、パネラーとしても「じゃあ喜んでさせてもらいます」ということでお引き受けいたしました。(笑)

**市場恵子** ありがとうございます。「NO」と言えないお二人でございました。後ろ向きで入った、軽い気持ちで入ったら、たまたまそこがDVだった。ようこそです。

**福谷** 私もパネリストになったのも不思議だし、スタッフになったのも不思議。あんまり関わりたくない、僕には関係ない問題だったんですよ。しかし1年前に知人の子どもさんがDVで亡くなり、意見を聞きたいと言われたんです



パネリスト  
福谷美樹夫

けれども何もできませんでした。強がりの男が何もできないというところから、DVは大変だと気付きました。それで、日々分科会準備に参加して、不思議なもので、「男が理解しないと」「男に理解させないと」絶対これは変わらないと思った。(拍手) いえ、これは自分の気持ちを言っているのですが。男って変えてくれる人がいないとだめだなあと思いました。私は女性の方々からDVについて教えてもらったことがすごくよかったです。それが正直な気持ちです。

**市場尚文** それでは、2つ目の質問です。分科会の準備をされてきて、DVについて学習したり話し合っていく中で、どんな気づきや変化があったか、話してもらえればと思います。

**横手** 僕の感覚では遠い話だなと思っておりました。でも、いろいろ話を聞いているうちに身近なところであって、驚きや怖さを感じました。男

性と女性のこと、ジェンダーですか、もう一度見直す時間と言うのか、自分の結婚生活を振り返る時間をいただいたのかなと思います。自分は会社を経営しているものから、外で仕事をして帰ってくると、当然妻が食事を作るのが当たり前という気持ちがありました。でも年を重ねていく上で、向こうもいろいろと、戦いを挑んでくる訳ですけれども・・・。

**福谷** 暴力がいけないというのは、知っているんですよ。僕は身体的な暴力は振るわない。しかし、精神的な暴力を振るうことが、往々にしてあったと思います。目に見えない圧力をかけると言おうか。身体的な暴力を振るうのは少数だと思うのですが、精神的暴力とか、経済的な暴力のほうが大きいのかなという気がします。

**市場尚文** 若い時は女性が折れていることがありますが、だんだんとパワーができてくると、我が家もそうです。家の中で正さないと、世の中は正してくれませんから。特に成功者、たとえば出世街道を進んでいるような人、事業に成功している人は、誰も批判することなどありませんからね。

**市場恵子** うちでは私よりも先に子どもが、父親批判をし始めたんですよ。敏感だから。「言うことと、やっτέρることが違うじゃないか」と。そして、言うことを聞かなくなる。

**市場尚文** 「外なる賞賛、内なる批判」と、言っていました。

**市場恵子** 「外ではあんなに賞賛されるのに、家に帰ったらなんでこんなにべっちゃんこにされるんだ」と。決して好戦的だったのではなくて、感じることをそのままに、オープンに向けていたのですね。

**福谷** 自分がやっていることが悪いって、どこか



パネリスト  
横手久典



で気づくのですが、それが止められないと言おうか、止めない、そういう自分がある。一度最初に「ああ、自分は優位なんだ」と思ったら、それをずっと通していこうとする男がいるんですよ。そここのところは、負けたくない。そこに気づくか気づかないかが、一番のターニングポイントかなという気がします。

**市場恵子** うちも言われましたよ。「君はだんだん優しくなくなってくる」と。

**市場尚文** 男女共同参画がなかなか進みにくいというのは、一番は、男性が今の自分の安楽な立場を上手にとぼけたり、無視したりしてやり過ごすということが、一番の大きな壁になっていると思いますね。そういう意味で、なんらかの形で足元が揺らいだり、内なる批判が出てきて初めて、変わっていくのではないかと経験から思ったりします。

**青木** 私も消極的参加で、会議には出てもどう取り組んでいったらいいのか、分かりませんでした。女性たちの話、経験した方の話も聞かせてもらったりしているうちに、少しずつわかるようになりました。私は男性ですけど、娘がいます。今年の3月に結婚したのですが、娘のことを思ったときに、もし、そういうことがあった時に離婚できるよう、「結婚しても会社辞めたらあかんぞ」と娘に言って、ここで勉強したことを話しました。何か少しずつ変わっていったかなあと思いま

す。私も知らんのですが、娘も知らん。女性の方も知りませんでしたね。

みんなにDVの話を聞いてほしいので、職場でDVの話をしてもらいました。話を聞いて、一人だけ泣き出した人がいました。昔の彼氏と一緒にいたときに、今日の話と同じだったということでした。実際にそういう経験をしている人もいるのに、もし相談があってもきっとのれなかつただろうということもあります。

**横手** 結婚して25年になりますが、だんだん会話もなくなって、苦しいですね。家に帰っても、冷たい雰囲気か漂っている。そんな中、この分科会に入って、最近はこの影響かどうか、「相手を知り」「相手のことを思う」「相手のことを尊重する」と言えばいいのか、少し意識が変わってきました。たとえば、家事を手伝うなどの小さいことです。洗濯物をたたむとか、ちょっとした洗い物するとか。それで妻の機嫌がよくなって、ちょっと、1度か2度くらい温度があがるんですよ。家でも職場でも、思いやる気持ちが大事なかなと思います。

**福谷** 私はこの分科会に入るまでは、DVの問題をどこに相談に行ったらいいのか知らなかった。ほかの人もほとんど知らないと思います。自分が関わるという気持ちがないと、この問題は見えてこない気がしました。知らない自分があるということを、まわりが教えてくれた。それも、この分科会の中では「あんたはだめだよ」という言い方をしなかったのです。『こういうこともありますよ』『気づくことが大切なんです』と、うまい人がいたんですよ。学ばせていただく人によって、よっぽど自分が変わったなと思いました。

**市場尚文** 分科会のサブタイトルは、「男たちの挑戦」ですが、いきなりエベレストに登るのは無理で、ぼつぼつと確実に登る一歩こそが挑戦として価値があると思います。この阿南の町の男性陣



が少しずつ一歩を進めている。この挑戦を大切に  
と実感してほしいと思います。

**市場恵子** お3人の話を伺っていて、相談にお見  
えになるのは、皆さんに学ぶ準備ができたという  
ことだと思います。

私は心理学を教える仕事を30代初めころから  
始めたのですが、まず、学生が、子ども時代に受  
けた性的虐待を打ち明けてくれるようになったの  
です。授業の中では扱っていないのに。たぶん長  
年、「誰かに聞いてほしい」「自分のこの辛い気持  
ちを受け止めてほしい」と思い続けてきて、私が  
学ぶ準備が徐々にできたことを敏感に察知して、  
勇気がいったと思うけれど打ち明けてくれたわけ  
です。

最初は、とまどいました。まだ無力でしたか  
ら。どうサポートしていいか、よくわからなくて、  
一生懸命勉強しました。どういう人の力を借り  
たらいいのかいろいろな情報を集めてまわり、  
人とつながっていきました。それが、私の学ぶ準  
備をもっと強くしてくれたと思います。

何よりもまず、被害を受けている人の気持ちに  
寄り添って、気持ちをゆっくりじっくり聞かせて  
もらうことが何よりの支援になると思います。自  
分にカードが増えてくれば、カードをその人の前  
に並べて、どのカードを選ぶかをじっくり待つて  
あげて、その支援をしていく。そうすると、何も  
できそうにない、打ちひしがれている被害者の人  
たちに力がちゃんとあって、自分で回復してい  
かれるのだと。その段階に、お3人が徐々に立っ  
ていけるのかなと、今わくわくしながら聞いてい  
ました。

**市場尚文** 3番目の質問に入ろうと思います。皆  
さんご自分のパートナーさんを、どのように呼  
ばれているのかなと。

**福谷** 僕、実は独身なんです。結婚はしてい  
たんです。子どもも2人いますし。今も食事に一緒

に行っています。例えば精神的な部分では「自分  
もあったのかな」と。それから相手に優しくな  
かった。「僕は偉いんだよ」という気持ちがあっ  
たと思います。DVは子どもにとってもまずいな  
ということに気が付きました。

やはり、男が変わらないと、女性たちや子ども  
を大切にできないと気が付きました。それは別れ  
てからかなという気がします。さっきから、どう  
答えようかと思いましたが、自分が何らかの形で  
DVをしていたということ、この分科会の中で  
気づかされました。

**市場尚文** 今は距離がありますから、元妻さんに  
声をかけるときには、どういう言葉になります  
か。名前を呼んだりする？

**福谷** 名前も呼びます。だから子どもによく言わ  
れます。「仲いいでえ」と。

**市場尚文** なるほど、そういうことはありますよ  
ね。離婚したけれども、かえっていい関係になっ  
て。

**横手** 最近、名前で呼ぶ努力をしている最中で  
す。それまでは、「おい」とかだったと思います。

**青木** 僕も名前で呼べばよかったかと、今になっ  
て思っています。独身の時は、名前で呼んでいた  
のにいつの間にか名前が消えてしまって。「おい」  
とかいうのは、こわくてよう言わなかったね。  
(笑い)「おかあさん」と言っています。子どもも  
おらん時に、「おかあさん」と呼ぶのは不自然な  
んですよね。



**市場尚文** 言葉は一見定着はしているけれども、気づいてみたらおかしいことってけっこうありますよね。女性の場合は「主人」なんてことで、納得しているかどうかはわかりませんが、使うことも多いと思います。言葉や呼び方というのは、つい使ったままで、知らないうちにきつい言葉になっていたり、ひとつの落とし穴だと思います。当たり前に行っているけれど、実はそれで相手をふんづけているみたいな、プレッシャーをかけていることがありますから。さて、次のキーワードは「地域づくり」です。

**青木** 自分の守備範囲でできることがあればそこで、DVについて話をする機会がもてればと、思いました。知ってもらおうことがやっぱり一番大事なことだと思います。職場で言えば、セクハラ、パワハラなど、組織の中で必ず研修されています。ですから、そういったところに、DVも入っていければいいかなと思っています。

家庭がうまくいってなかったら、仕事でも身にならないし、安全面でも問題が出るかもわからない、そういうのに結びつけて、職場でもやっていくことが大事かなと思います。それから、町内会とか、消防団に行けば男性もたくさんいますので、そういったところで話す機会がもてればいいのかと。DVというのは口に出さなければ、頭の中に入ってきませんから、そういう機会があれば、ぜひ。男性だけじゃなくて、女性も。女性もあまり興味がないんですね。実際に（DVを）受けていて口に出せない、という方もおいでだと思います。それとせっかくできた分科会を、何かの形で残していければ、一番いいかなと思います。

**横手** 話し合いで印象に残っているのが、「男性も女性も、夫も妻も、幸せになる権利があるんですよ」という言葉。全くその通りだなと思います。どっかでそれを忘れてしまっている。当初の相手を思いやる気持ちが、何年も経つと、どっか

で抜けていっているような気がしています。初心に戻ってもう一度そういう家庭を作っていきたいと思っています。DVは、パワハラやセクハラの延長線上にあることを認識しながら、私も勉強しながら、それを従業員に伝えながら、やっていかなければいけない。困っている人がいたら、きちんと受け止め、サポートできる人間になっていきたいと思っています。

**福谷** 具体的にこういうことができる、ということはまだ難しい。職場において、DVはあまり学ぶ機会がないんですね。DVっていじめみたいなもんですから、なくならんのとちゃうかと、一番最初は思いました。地域を作っていくためには、一言を言う。「それは嫌だ」とか「それってどういうことなん」ということを、職場とか地域の中で出していけないと、解決していかないと思うんです。

だから、自分も仲間も、男も女も、夫婦も互いに言いたいことが言える雰囲気づくりをしていけば、地域でも身近に持っていけるのかなと。青木さんみたいに、「それDV」って話になれば、気づく人もでてくる。どこに相談に行ったらいいのか、ということは今ははっきりと言えます。

**市場恵子** 女の人は子育て、看病、介護、あるいは家族のために作る食事、洗濯、掃除などの「ケア役割」に早くから従事する人が多いので、人との対人関係の中で、自分の力を上手に活かすことを、練習したり、学んできているのではないかと思うんですね。親であれば、子どもを虐待する力を持っているわけですが、虐待をせずに適切な愛情として表現するために、ずいぶん訓練してきているように思うんですよ、文化的にね。

一方、男の子は、「そんなことしなくていいよ」と役割を分けて「あなたは仕事をしていればいい」「競争すればいい」「成績を残せばいい」「部活でがんばりなさい」となっていくと、ケア役割



からどんどん外れて、そこで学び損ねるものがある。私はもっと当たり前のこととして、家事役割分担を男の人も、小さいうちから身につけていける社会にしていけば、いじめは減るのではないかと思っている者の一人です。非常に大きな一歩を、小さな町の分科会から歩みだせていることを、とてもうれしく思うし、関わらせていただいたことを誇りに思っています。

**市場尚文** 男性が、地域とかいろいろなところで、学ぶ機会を作るというのも大きなことでないかと思います。学ばなくても、男性が孤立しないように出ていく、それだけでもいいと思う。男性は、仕事でとか忙殺されて、定年までほとんど学ぶ場がない。ですから、仕事ではつながりがあるけれど、地域では孤立している。友達が少ない。私もかつては、同じ状態でした。男性が出てくる場所ということで、メンズリブ岡山では1994年から20年、毎月いろいろなテーマで講座を開いております。そういうきっかけがあると、集まる場ができる参考になるかと思います。

**市場恵子** ちょっとだけ、一言。参加すると、「はい勉強しました」っていう感じだったんですよ、男性たち。なんか違うと思っていた頃に、ご自身も鬱にかかれて、弱いところをさらけ出しながら語ってくださった精神科医の方がいらして。その人はぼろぼろになりながら、自分の男らしさの中で悩んでいることを語られて、その日をきっかけに男たちが学ぶだけじゃなくて、気持ちを語りだした。初めてでしたね。一年間の積み重ねと、講師が自ら心を開いて、生き様、生き方をみんなに共有してくださったことが、大きなきっかけになった気がするんですね。

今日何って、準備の中で、自分の心を開いたり、仲間とつながったりする体験を積み重ねてこられたんじゃないかと思うのですが。それが空気として伝わってきてうれしいですね。学んで頭だ

けで理解するというより、弱い部分も認め合いながら、つながってこられたと。

**横手** 僕もこの分科会に入るまではDVがどんなものか、はっきりとはわかってなかったし、そういう方はいっぱいおられる。パワハラ、セクハラは、研修しているわけですけども、DVについては、まだそこまで行ってない。倫理法人会という会でもDVの話をしていただく機会を作って、経営者自身に知ってもらうことをやりました。「ほんなことがあるんか」と驚かれて、僕がここに入った時と同じ状態なんですね。

**市場尚文** すばらしいと思います。講演で、「リアルメン」という詩を詠みましたが、その中に、「自分自身を笑い飛ばせること。失敗を認めたり、受け入れたりすること」これが実は男がなかなかできないところ。私もできませんでした。自分にこういう欠点があるとか、落ち度があることは認めたくないんですね。自分自身を笑い飛ばせたり、話せたりすることは非常に大事です。大切なことは、いいパートナーシップを創ろうということ。男たちの挑戦とは、まさしく仕事を頑張る一方で、人間関係もしっかりと関心を持って、いい関係を作っていく生き方をその始まりがこの分科会の結果につながると思います。

**市場恵子** 今日はお三人、それから会場のみなさん、ありがとうございました。女性も男性も、ありのままの自分を、まず自分が慈しみ、そして本当の意味で大切にしながら、他人ともかかわっていく。自分を大事にしなかったら、他人をきちんと大事にできないのかなあという気持ちになりました。みんな幸せになっていきたいと思いません。今日はどうもありがとうございました。

## 交流会報告

会場 / 阿南市スポーツ総合センター 時間 / 18:00~20:00 参加 / 800人(40テーブル)

参加者相互の交流は、日本女性会議の開催目的の一つである。阿南大会では地元の食材を生かしたメニューを作成し、地元のホテル2社に調理配膳していただいた。

テーブルメニューの他に、郷土料理メニューを室町時代の衣装に頭を桂包みした40名のボランティアにより、各テーブルに配膳と料理説明を行った。

また、食材、ワイン、コーヒーの提供を頂いた企業や両ホテル料理長様、多くのおもてなしボランティアと阿南市職員を中心とした阿波踊り「ささゆり連」と女性花火師さんに感謝いたします。

こんな思いで設営しました。

- 分科会で語り尽くせなかった思いを、講師・スタッフ・参加者とで「出会いの場」を深めたい。(分科会別のテーブル配置)
- 地元の食材を活かし、手作りで「阿南の竹」を器にして盛り付けお接待としたい。
- 日本女性会議30年と綿々つつないできた思いを、阿南の海で釣り上げた太刀魚を使って30mの手巻きずしにして一体感を共有したい。
- 日本人として遙かかなたの時代より持ち合わせてきた「食育」を、「いただきます」「ご馳走さま」の言葉で次世代につむぎたい。



事前試食会より

### 交流会次第

- 開会
- 大会長挨拶
- 実行委員長あいさつ
- 感謝の儀「いただきます」
- アトラクション
  - 日本女性会議30回を記念して30mの巻き寿司
  - 地元物産プレゼント  
お誕生日/最高齢者ほか
  - 郷土料理  
お接待係がテーブルへ
  - 阿波踊り ささゆり連
- 閉会「ごちそうさま」
- 花火

### メニュー

- 阿波尾鶏の冷製(6種)
- 阿波牛のローストビーフ
- 刺身(鯖・イカ・はまち)
- 鯖の西京漬け焼き
- たこのカルパッチョ
- 鱧の湯引き
- 鮎の甘露煮
- 肉じゃが
- 阿波とん豚の角煮
- 四川風えび炒め
- 野菜の天ぷら(かぼちゃ・なす)
- さつま芋のスティック揚げ
- レンコンのキンピラ
- キャロットサラダ
- 水菜のサラダ
- ちりめんいり
- 冷豆腐
- フィッシュカツ・豆竹輪・鯛の皮竹輪
- ならえ(郷土料理)
- 里芋のみそ田楽(郷土料理)
- 美肌鍋
- 五目ずし(郷土料理)
- 太刀魚の30m手巻きずし
- 甘味
  - 半殺し(郷土料理)
  - 球・和三盆のロールケーキ・栗のタルト
- 飲み物
  - ビール・ワイン・ジュース・コーヒー

\*半殺し・・・ぼた餅やおはぎのもち米を半づきにする  
球・・・『野球の町阿南』をモチーフにした饅頭

全体会

12

Saturday

9:30~10:00 ● 開会式  
(受付 8:30 ~) 【会場：阿南市スポーツ総合センター】

10:00~10:30 ● 基調報告

10:30~12:00 ● 記念講演

昼食

12:50~13:30 ● アトラクション

13:30~15:00 ● 30周年記念特別  
シンポジウム

15:00~15:30 ● 閉会式

30th Japan Women's Conference in ANNAN 2013

## 開会式

時間 / 受付 8:30~9:30 式典 9:30~10:00

前日の交流会終了後、夜間にも関わらず片付けと、全体会用の設営には運営スタッフ及び多くのボランティアの皆様約 150 名のお手伝いを頂き、近隣の学校や公民館からお借りした、2000 脚のパイプイスを配置した。

「次代へつむぎたい」との思いもあり、オープニングから開会宣言を、地元の劇団夢創（ゆめつくり）の子どもたちの、元気なダンスと歌そして 3.11 を通して体験した「おもいやり」のメッセージで全体会議を開会した。

### 開会式次第

オープニング

開会宣言

歓迎のことば 実行委員長 渡辺純子

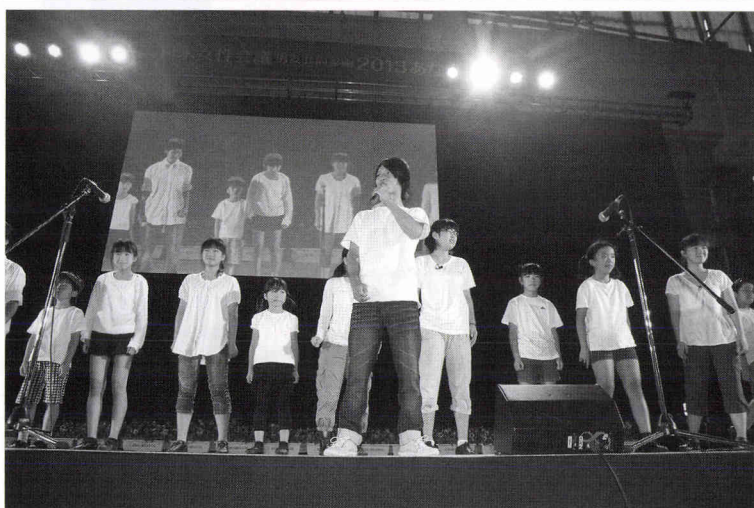
来賓祝辞 徳島県知事 飯泉嘉門様

阿南市議会議長 島尾重機様

閉会



劇団夢創の子どもたちの  
 元気なダンスと歌声でオープニング  
 開会宣言でスタート



## ご来賓

徳島県知事 飯泉 嘉門様

阿南市議会議長 島尾 重機様

内閣府男女共同参画局長 佐村知子様

徳島県選出参議院議員 中西 祐介様

徳島県選出参議院議員 三木 亨様

徳島県選出衆議院議員 山口 俊一様

徳島県選出衆議院議員 後藤田 正純様

阿南市選出県議会議員 嘉見 博之様

阿南市選出県議会議員 児島 勝様

阿南市選出県議会議員 松崎 清治様

阿南市選出県議会議員 達田 良子様

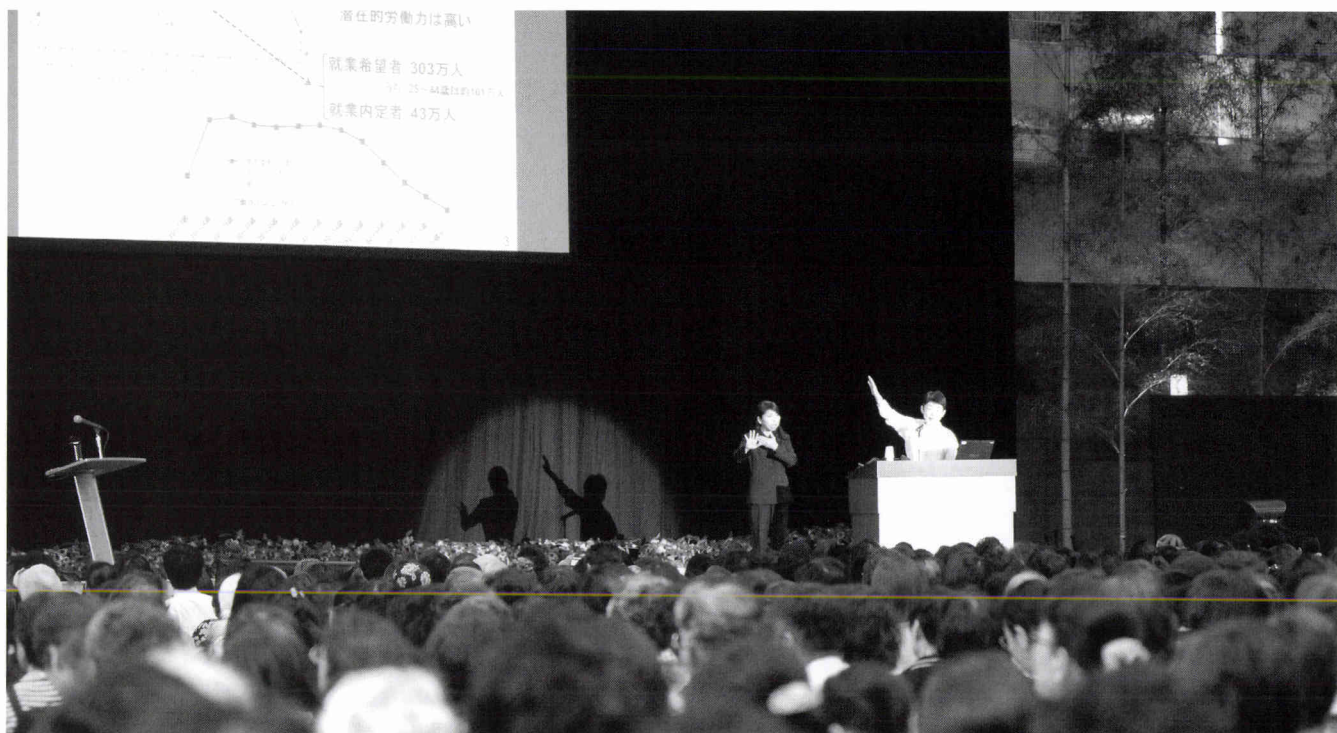


## 基調報告

# 日本の男女共同参画施策の現状と今後の課題について

内閣府男女共同参画局長

佐村 知子



おはようございます。

秋は催し物が重なり、昨日岡山で主催の催しがあり、東京から岡山そして阿南へと移動し、昨日の懇親会にやっと間に合いました。多くの参加者の皆様もご苦労さまです。懇親会では金時豆入りのお寿司や皆様の熱気や阿波踊り、そして花火などすばらしい手作りの料理やアトラクションに感激しました。

もっと嬉しくなったのは、今朝の会場で、「昨日の分科会では今年は男性が多かった」という話を女性からも男性からも聞きました。また、「楽しかったよね」といっている方や「これだけ盛り上がったのを、これからも続けないとね」との話をお聞きし、分科会にでられなくて残念だったと思い、今大会は大成功だと感じました。ほんとうに嬉しいし、皆様ごくろうさまでした。

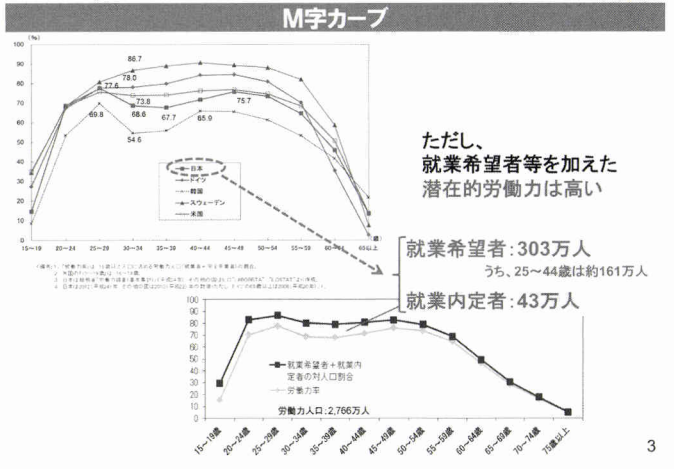
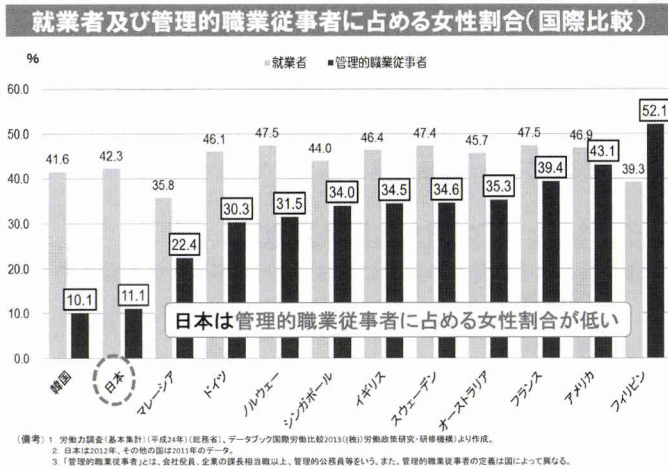
今政府は、強い日本・豊かな地域を取り戻すために、安倍総理は少子高齢化のなかで女性が活躍することを進めていくことが、日本の成長戦略の柱であると考え多様な政策を行っている。

## 女性の就業状況

世界全体の中、労働者全体に占める女性労働者の割合は40%程度で日本は平均並みであるが、日本は女性の管理職やリーダーの占める割合が11.1%と少ないのが日本の課題である。2020年までに管理職のしめる割合を30%に今後増やしていこうと政府目標をたてている。

年代別労働比率の国際比較をすると台形型でなく日本、韓国は真ん中がへこんで、M字カーブになっている。なぜこうなるかといえば、結婚をしたとき、第一子出産を機に仕事を離れ家庭に入る





女性が多いからである。日本でも男性や子どもがいない女性は 諸外国と同じである。

職場に復帰しても、現実には正規雇用に戻りにくく、働きたいと思っても、就業チャンスに恵まれないのが現状であるが、女性の潜在的労働力は、経済力を押し上げる要因となることが発表されている。

## 総理から経済界に要請

安倍総理が日本の経済団体同友会等に日本の経済力を上げるために三つの要請をしたなかで、二つが女性に関わるものである。そのひとつが「子どもが3歳になるまで、育児休業や短時間勤務を取得したい男女が取得しやすいように職場環境を整備」と「2020年30%」の政府目標の達成に向けて、全上場企業において積極的に役員・管理職に女性を登用。まずは役員に一人は女性を登用する」ことを要請した。

3歳まで家で子どもを見なさいではなく、3歳までに男女で働きやすいような環境を企業に要請した。

三つめは、「学生がしっかり勉強できるように、就職の企業訪問の時期を遅らせる」であった。

## 女性の活躍推進は成長戦略の中核

平成25年6月閣議決定の「日本再興戦略」には、「女性の活躍推進」として、「出産・子育て等による離職を減少させるとともに、指導的地位に占める女性の割合の増加を図り、女性の中に眠る高い能力を十分に開花させ、活躍できるようにすることは、成長戦略の中核である」としてのる。

女性の高い能力を活用することを成長戦略の中核としている。経済ばかりと言われるかたもありますが、少子高齢化の中で火がつき、押し上げている。

### 総理から経済界への要請 平成25年4月19日



### 第3分野 男性、子どもについての男女共同参画

#### 基本的考え方

- **男性についての男女共同参画**  
男女共同参画社会の形成は、男性もより暮らしやすくなるものとの理解を深める。
- **子どもについての男女共同参画**  
次代を担う子どもたちが、子どもの頃から男女共同参画の理解を深め、将来を見通して自己形成できることが重要。

#### 男性についての男女共同参画施策

- 男性についての男女共同参画に関する意識調査(平成23年度)
- 男性についての男女共同参画シンポジウム(平成23・24・25年度)
- 男性についての男女共同参画促進のための人材育成事業(平成26年度予算要求中)  
:家事、育児、介護、地域活動などへの男性参画の意義について理解促進を図るため、各地域・各分野において核となる人材を育成する。

#### 子どもについての男女共同参画施策

- 男女共同参画社会の実現の加速に向けた学習機会充実事業(文部科学省)  
・100人男子会 男子学生のための男女共同参画ワールド・カフェ(平成24年度)  
・男女共同参画の視点からの多様なキャリア形成支援(平成25年度)

## 第3次男女共同参画基本計画より

平成22年に見直された、第3次男女共同参画基本計画の第3分野では、男性についての「男女共同参画」を掲げた。

男性についての男女共同参画は、女性の活躍を推進することだけでなく、男性もより暮らしやすくなるものとの理解を深めていただきたいということ。

女性が仕事や政治等で活躍を推進することは、男性から見ると家庭や地域社会、PTAなどへの取り組みができていないことを良しとするか、チャレンジすることで新たな展開が出てくるかもしれない。

災害の時には、男女の悩みは違う。女性に対しては暴力やストレスを心配する、男性の場合は地域で活動していないので、一人で悩んだり相談する相手がいなかったりが原因で、隠ったり、アルコールに依存したりする悩みがでてくる。

男性についての男女共同参画は、女性のためでなく「みんなで暮らしやすいための社会」をめざしている。

子どもについての男女共同参画は、次代を担う子どもにとって、子どもの頃から男女共同参画への理解を深めることが大事であることですが、子どもにとってとなると教育分野となり、効果的な

取り組みを模索している。

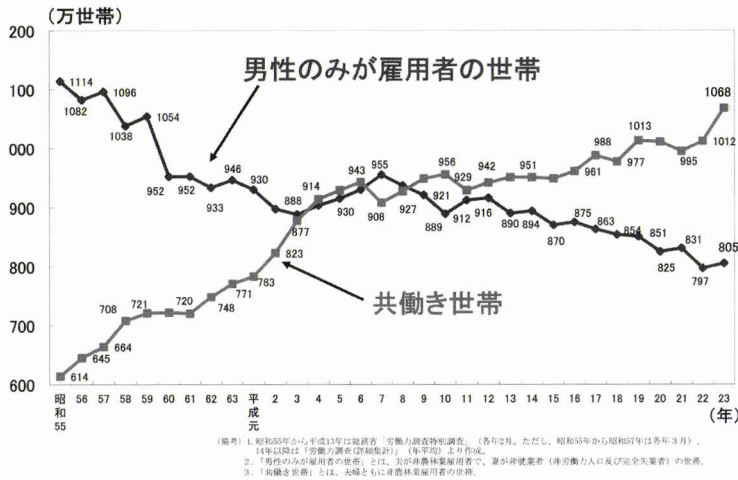
男性についての男女共同参画を進めていくために、意識調査や家事、育児を積極的にしているグループがいっしょに全国でシンポジウムなどを開催している。また、26年度には人材育成事業も計画している。これは、女性が仕事に出るときメンターやロールモデルがある。しかし、男性が地域活動をするときは、どうやっていいのかわからないことがある。企業で育休を取るのは厳しい。男性の場合の男女共同参画を進めるときも、メンターやロールモデルやサポーターが必要でないだろうかという点からの人材を育成しようとする事業です。

(子どもについての男女共同参画施策 図参照)





### 共働き世帯数の推移

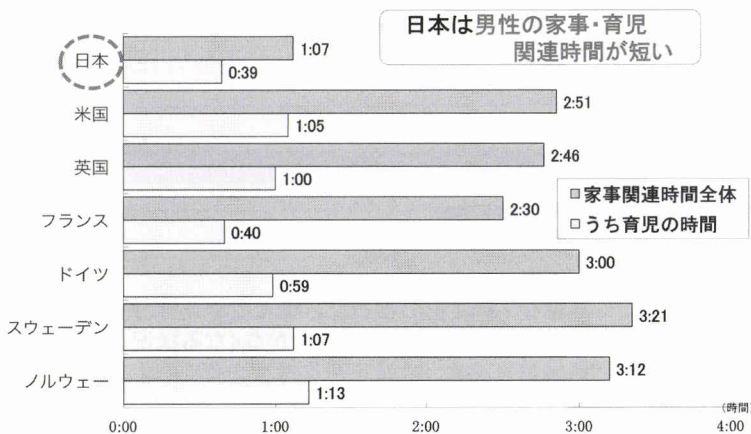


### 男性の家事・育児への参加

総務省が一日を15分単位で集計したデータではあるが、日本では諸外国と比較しても男性が家事・育児に関わる時間が短く大きな差がある。ノルウェーと比較すると日本の男性の家事は1/3・育児に関しては1/2以下と短いといえる。

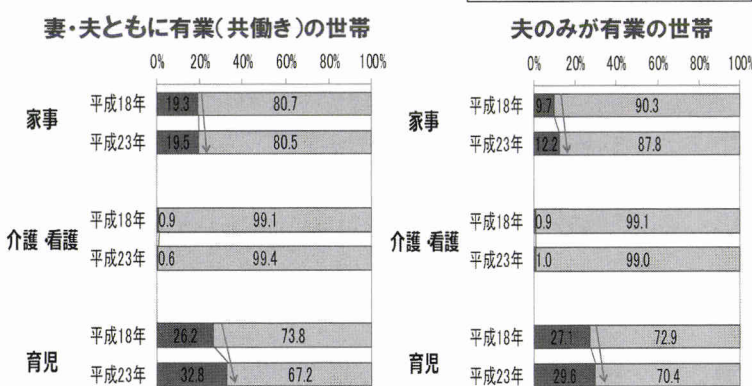
6歳未満の子どもを持つ男性の家事関連の行動者率から、ほんとうに行動しているかという、育児は3割で家事は共働きでも2割の男性。逆にいうと7割が育児ゼロ。8割が共働き男性で、家事ゼロである。統計にも癖もあり、育児はお風呂当番や土日に遊ぶなど15分以上まともまわっていることもあり、育児の数字は出やすいが、家事は本当にやらない人と手伝っても時間がでにくい感があるが、実態はこういう状況になっている。

### 男性の家事・育児への参加 (6歳未満児のいる夫の家事・育児関連時間(1日当たり))



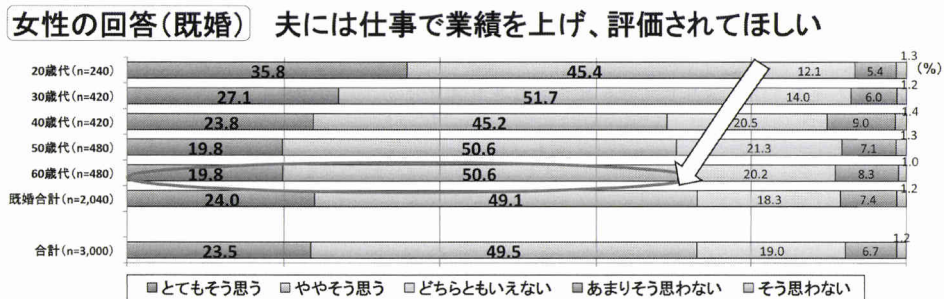
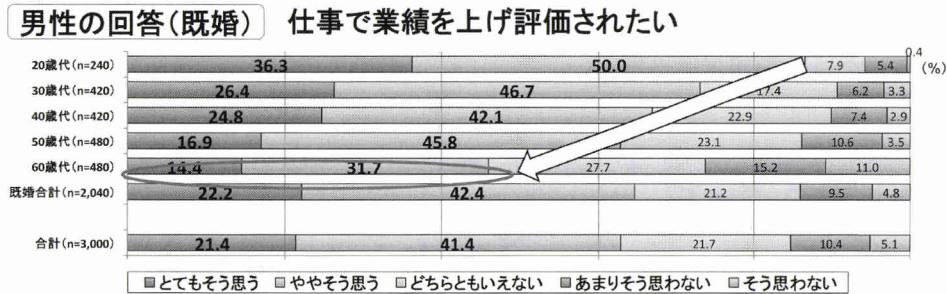
### 6歳未満の子どもを持つ夫の家事関連の行動者率

育児は3割。家事は共働きでも2割。



(備考) 1. 総務省「平成18年、23年社会生活基本調査」より作成。  
2. 数値は夫婦と子どもが同居する世帯における6歳未満の子どもの持つ夫の1日当たりの家事関連の行動者率(割合)。  
※行動者率...該当する種類の行動した人の割合(%)、非行動者率...100%-行動者率で算出している。

男性にとっての男女共同参画に関する意識調査(2012年 内閣府)



## 男女の意識の違い

男女共同参画に関する意識調査で、仕事の業績に対する年代別、男女の意識を比較すると、男性の回答では、20歳代に86.3%あった評価されたいは、60歳代では46.1%となっているが、女性の回答では20歳代81.2%から60歳代では70.4%となっている。特に60歳代での男女の意識の差が大きい。

これは女性期待や受け方が難しく、せっかくな一緒にいるのだからと女性が夫に期待したり、息子に期待したりする。たとえば、息子が嫁のために育児休暇を取ろうとすると、出世が遅れるのではないかと心配するお母さんの質問を受けたことがある。女性の側が男性が育児や家事をしようとしたときに拒否したり、女性の意識も大切であり仕事の評価に対する男女の意識差にも関連しているのではないかと。自分が職業をもっている方とそうでない方の意識が異なると思う。

男性の男女共同参画に関する問題は、男性の意識改革の問題でもあり、女性の側の意識の問題も大きいのではないかと懸念するところである。

## 第14分野 地域、防災・環境その他の分野における男女共同参画の推進

### 基本的考え方

- **地域**  
高齢化・過疎化の進行など様々な変化が生じており、男女が共に担わないと立ち行かなくなる状況。  
地域力を高め、持続可能な社会を築くには、地域における男女共同参画が不可欠。
- **防災・環境等**  
組織の運営や活動の進め方において男女共同参画を推進。

### 地域における男女共同参画

#### 【都道府県、市町村の取組】

- ①男女共同参画宣言都市奨励事業
- ②男女共同参画フォーラム

#### 【国の取組】

- ③全国会議
- ④男女共同参画推進連携会議
- ⑤センター等との情報交換会
- ⑥地域における女性活躍促進事業

国、地方公共団体、民間団体、国民各界各層の情報共有・連携により、効果的かつ多様な取組を展開



## 記念講演

時間 / 10:30~12:00

# 男女が織りなす食育

～作り手の心・いただく心～



料理によって私たちは、体の栄養と心の栄養を受け取っている。

料理は女性が作るものと思っている男性が多いが、男性も子どもも料理を覚えてほしい。料理は知れば知るほど楽しくなる。

家庭内で会話が少なくなってきた時には、食卓の上の料理の素材について話してもらいたい。そして、作ってくれた人への気持ちを必ず口にしてほしい。日々の暮らしの豊かさは、毎日の食事や食卓でつくられていくと思います。

講師

## 浜内 千波

料理研究家

● 徳島県出身

『家庭料理をちゃんと伝えたい』……という思いで、料理教室を主宰。

『料理は、もっともっと夢のある楽しいもの』をモットーに、テレビ番組の出演、講演会、雑誌や書籍の執筆活動、各種料理講習会への参画を積極的に行い、その発想のユニークさやクリエイティブな仕事には定評があります。また、そうした理論の実践の場を、食品メーカー・外食産業・流通業・宿泊ホテル業に、さらには広告業界の中にも見い出して、活動の場を広げております。さらに、より快適なキッチンライフを目指して、便利で、楽しいキッチン用品、Chinamiブランドを立ち上げるなど精力的な活動をしています。

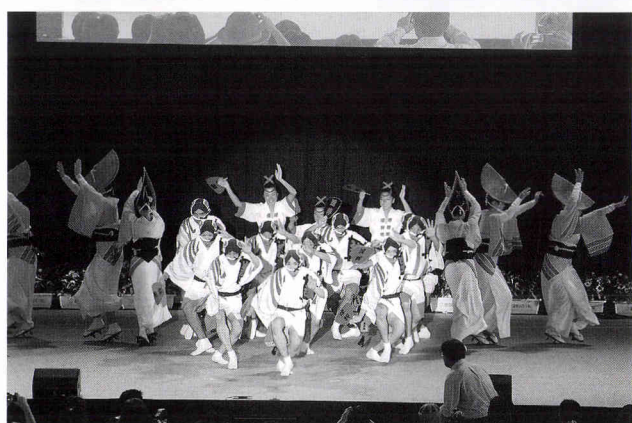
■ 株式会社ファミリーッキングスクール主宰 <http://www.fcs-g.co.jp/profile>

# アトラクション

時間 / 12:50~13:30

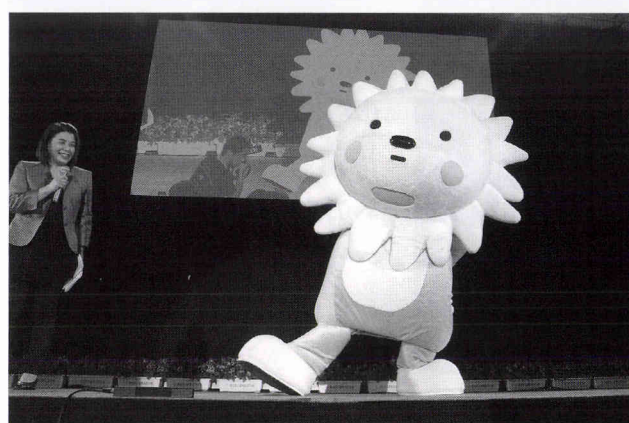
## 阿南市イメージアップキャラクターあななん初登場!

### 阿波踊り



大会に合わせて製作した、阿南市イメージアップキャラクターあななんは、市民から公募したイラストを元に製作されたキャラクターで、本大会が初披露の場となりました。

阿南市より達粋連と徳島よりうずき連により、本場の阿波踊りを紹介しました。両連とも徳島阿波踊り期間中舞台での選抜阿波踊りにも出演している有名連で、個性ある洗練された踊りと舞台構成はすばらしく、皆様に楽しんでいただけました。



#### あななんプロフィール

いちばん最初に太陽が昇る  
四国最東端の”光のまち阿南”に咲く  
ひまわりから生まれた  
花と光のたてがみを持った  
百獣の王ライオンのような不思議な生物  
豊かな自然の光と  
人々が創りだす新しい光のエネルギーを  
たっぷり浴びて  
元気にのびのび育っています。

30周年記念シンポジウム

いきいきわくわく小さなまちから新たなるステージ！

～日本女性会議の30年をふり返し、そしてこれから…～



コーディネーター  
**市場恵子**

社会心理学講師・カウンセラー

パネリスト  
**渥美由喜**

内閣府男女共同参画会議専門委員  
厚生労働省政策評価に関する有識者会議委員  
東レ経営研究所  
ダイバーシティ&ワーク・ライフ・バランス研究部長

パネリスト  
**堀江敦子**

スリール株式会社代表取締役

パネリスト  
**大山治彦**

四国学院大学社会福祉学部教授  
メンズセンター運営委員長

パネリスト  
**山本恭代**

徳島大学病院泌尿器科講師・医学博士  
徳島大学 AWA サポートセンター  
ワーク・ライフ・バランス支援部門委員



コーディネーター  
**市場恵子**

**市場** 今回の大きなテーマを5人で展開します。パネリストの方々の背景、個人的になさっていること、感じていることを発表してもらいます。5人でかみ合わせをしていきます。阿南からの発進というのは男性にも意識改革を、そ

して参画をというところがメインですが、もう一つは若い世代にもつなげたいと次世代へということだったと思います。まず最初に述べていただく堀江さんは28歳です。雇用機会均等法が制定されたその年に産声を上げ、学生、会社員を経て、社会人として若い世代にバトンタッチをと、日々活動していらっしゃいます。

自分らしく笑顔で当たり前、仕事・子育てができる社会に

**堀江** スリールの代表をしている堀江です。大学時代は働く女性の子育て支援を研究していました。卒業後は、IT企業に入社し、マーケティング業務を3年半行っていました。

私は中学時代からこどもが大好きで、大学時代はベビーシッターとして、200人から300人くらいお世話をしてきました。会社の中で、ワーク・ライフ・バランスという働き方とか、子育てとの両立をコンサルティングする資格を取得しました。2010年8月に会社を退社し11月にスリール株式会社を設立しました。



パネリスト  
**堀江敦子**



「ワーク・ライフインターン事業を実施しています。ワーク・ライフインターンって初めて聞いたぞ」という感じだと思いますが、私が作った言葉です。この3年間で大学生200人ぐらいが関わり、内容は共働きの家を訪ねお子様を預かります。その代わりに働くことや子育てすることをリアルに学んでいく。そういったインターンシップです。彼らにとったらキャリア教育になっていくんです。家庭にとってみたら子どもを見ていただけるので子育てサポートになっていきます。もっと長期的に考えていくと「子どもってかわいいなあ」「産みたいなあ」「育てたいなあ」と思うことが少子化対策にもつながると考えております。こうしたことを解決していくものとしてソーシャルビジネスとも言われてきました。

こういった会社を25歳の時に立ち上げました。「そんなに早くどうして?」と思われるかもしれませんが、説明をさせていただきます。

まず、会社の中で見た子育てに対する当事者意識の無さ、というのが私を駆り立てました。

大学時代は生後1ヶ月半のお子さんを週3回4時間預かっていました。子どもがいくら泣いても大丈夫で、20歳の時には「肝っ玉母さん」と呼ばれていました。(笑)

私はずっと子どもをお預かりしていたので仕事と子育てを両立するのが当たり前、そう思いながら会社に入っていました。

大好きな会社だったし、またすごく忙しい会社で、10時11時に帰るのが当たり前だったので。そんな中で、5時に帰って保育園に子どもを迎えに行く時間短縮勤務をされているワーキングマザーの人がいたのです。うちの会社でもそういう方がいるんだと思って、「この会社は子育てしやすい会社なんですか?」と聞いてみました。そうしたら、「5時には帰っていますが、そうとは言えないかな?」という返事が返ってきました。

彼女はもともと営業成績トップの女性だったので。でも結婚して、出産して、復帰はしたけれど、成績は落ちていく。上司に抗議しても「5時に帰っているからしょうがないよね」と言われたと聞き、ショックを受けました。自分らしく働きながら子どもに愛情を注ぐという、当たり前の要求がなぜこんなに満たされないんだろうと衝撃を受けました。

私が子どもを産むときにはそういう時代にしておきたくないと思い、ちょっと動き出そうと思いました。子育て中の人々が声を上げないのなら、若手社員で成績を上げている人たちが、「働き続けるためにはこの環境をよくしていきましょう」といえばこの会社も変わっていくかなと思いました。50人の同僚に声掛けをしたのですが、「がんばってね」と拍手喝采はしてくれたけれど、一緒に動いてくれる人はいなかった。国も少子化対策は20年やっています。でも進んでいない。そこで子育て中の人だけでなく、これからパートナーを得ようとする人たちにも働きかけてみよう。私がしてきた体験をすることで意識が変わり行動が変わると思い、会社を立ち上げ事業をはじめました。単なる子育てサポート・ベビーシッターとして働くだけではなく、独自の4か月間のホームステイ制度をとっています。大学生がどのような家庭に入りたいかを履歴書・エントリーシートに書き出してもらいます。学生が2人態勢でインターンシップ生活を4か月間、家族のように、保育所の送り迎えから家族のイベントまで共にし、仕事と家庭の両立のリアルな内容を見たり体験しながら、キャリアの話を直接聞くことができるプログラムです。子どもは親を尊敬しているし、実際に仕事と子育てを両立させている方のお話もリアルに聞け、いろいろなやり方を教えてもらえるなど、「両立は大変だけどなんとかできる」という自信につながっていきます。それが仕事に対し

て前向きな考えになり家庭に対しても変化が見られる。利用サイドからは「来てくれているお姉ちゃんは次いつ？」と変わり、親からはリフレッシュができ、子どもに余裕をもって接することができる」と評価をもらっています。

現在都内の200人の学生がインターンシップ事業を体験しています。こんな形で学生、社会人、家庭と今までバラバラだったものを「インターンシップ」という形で実施している。事前に働くことや家庭を持つことをイメージして笑顔で子育てできるような人が増えていけばと思っている。学生実態調査として「夫は仕事、妻は家事」に賛成かどうかを問いました。20代の半数がこの考えに賛成で「専業主婦になりたい」との人も59%ある。仕事と子育ての両立は大変そうと漠然とネガティブなイメージがある。この人たちがインターンシップでどう学ぶでしょうか。子どもと接することで、「子育ては大変だけど楽しい」とか、子どもが両親の共働きを誇りに思っていて、自慢しているのを見て、「自分もこんな親になりたい」とか、両立に前向きな気持ちになれる。また、家庭の方にも変化があって、子どもを預けることで、子どもが楽しんでいる時間に自分も勉強したり、リフレッシュする時間が持て、生活に余裕ができ、転職やキャリアアップに対しても前向きになれる。「預けることが安心に変わって行き、未来の投資に繋がっていった」と喜んでいただいています。ただ単にベビーシッターをすることだけだけではなくて、子育てに当事者意識を持っていない人を繋げて行って、当事者意識を持ってもらうといったような取組になっている。現在は、「次世代に意識改革」ということで、大学生や若手の社会人に対して実施しているのですが、プラス企業に対しても意識の改革、環境の改革をしてもらい、行政とともにい

いものを作っていきたい。現代に合った形で世代間をつなぎたい。自分らしく笑顔で当たり前、仕事・子育てができる社会になればいいなあと思います。

**市場** 2番手の渥美由喜さんです。ワーク・ライフ・バランスをテーマにいろいろなところで研修、コンサルタントをしてこられ、同時に家庭では、7歳と3歳のお子さまのおとうさんです。まさしく実践を積みながら、ワーク・ライフ・バランスを広げていらっしゃる方です。

### ワーク(ワかちあい)・ライフ(らくあり、くあり)・バランス(バトンリレー)

**渥美** こんにちは、私はずっと企業の現場を回ってきた人間です。内閣府の男女共同参画という月刊誌で5年間連載をしてきました。共働きの妻と一緒に小さい子どもたちを育てています。4年前から父の介護と、2年前からは下の子が難病になって看護もしています。よくワーク・ライフ・バランスは、余裕がある企業が取り組むものという誤解があるが、違います。何があっても仕事をあきらめず、ディスクマネジメント、あらゆる職場で介護と仕事をする。これからの大きな課題としてどう乗り越えるか？これが大きな問題です。また制約がありながら頑張っているには、生産性を高めざるを得ない。これも企業のおおきなメリットです。レジメをたくさん用意しました。



パネラー  
渥美由喜

まず、企業を回ってきて、最近非常に女性に追い風が吹いているのを感じます。佐村局長の話の中で、安倍総理から経済界へ4月の要請の中で「女性役員1人登用を願いたい」と聞いたとき、

「選挙が近いので？心にもないことを」と思った自分を今は恥じています。

わずか半年で、主な上場企業は女性役員数ほぼ倍増に近く増やしています。トップの一言の影響は大きいです。内閣府が今年、年内に女性活躍指標の「見える化」を予定しています。

企業に対しても、女性活躍指標をオープンにして公表するということを考えていて、将来的には有価証券の公表の義務化も議論されている。企業が自分たちの女性管理職意識をオープンにし始めている。これまでは数値目標を持つ企業の大半はかくしていました。それは男性からの「逆差別ではないか」とか、女性たちが、頑張っただけで就いているのに、「女性だからいいね」とか男性から言われると困るので隠していた企業は多かったが、ここ半年で、イオンでは2020年までに女性管理職を50%に増やす。日本を代表する金融機関でも10年かけて40代半ばの女性の役員を増やしていくというキャリアパスを決めている。

ハイリターン投資であることがわかっているから、これは自分が持っている4000社の財務データでの結果です。

過去5年間では一般企業では経常利益を3割落としている一方で、WLB先進企業では1割強の経常利益を伸ばしている。わずか5年で4割の差がついている。なぜかというところ3つあります。1つはプロダクトイノベーション(消費者の視点で商品を、サービスに付加価値)、2つめはプロセスイノベーション(制約社員だからこそできる業務プロセスの効率化)、そしてパラレル・キャリア(ワークのキャリアとライフのキャリア)で対人サービスや部下のマネジメントに不可欠です。堀江さんのように小さい子どもたちと接することは、ヒューマンスキルを高めることになります。ローソンの社長がいま力を入れている商品は、成功事例として調理が楽な「切り身パックの魚」で



ある。パナソニック電工の「自動オンオフ照明」を開発した女性から話を聞いたのですが、子どもが夜トイレに起きたとき、自分の子育て体験から、暗いと危険というので思いついたそうです。このように女性自身の体験の中からヒット商品は生まれた。これは、4000人のワーキングマザーアンケートの結果、7割の女性が「子育てなどで時間制約があるからこそ効率を上げることを考えざるを得ない」との回答をしているのでもよくわかる。

パラレルキャリアということでは、企業で「ライフの山あり谷ありカーブ」の研修をしています。起伏が大きい女性のライフスタイルは無我夢中で働く時期があって、出産、子どもの教育など落ち込み期があり、あとペースがつかめて充実期となる。それに対して男性は起伏が少ない単純なカーブとなっている。出産を機に男性はより会社で頑張るようになるけれど妻は大変である。男性の意識改革の取組が民間企業ではスタートしている。いくつかの企業では、男性上司が自分の女性部下を登用できなければ評価を下げられるといったやり方もスタートしている。これは逆差別ではなく、いくつかの企業でフロントランナーの女性たちを抜擢した男性は5-6倍の確率で役員になっている。見る目がある人です。とはいえ、女性は管理職になるのを敬遠しがちだとも聞きます。理由のひとつとして、男性は名誉欲で満足す

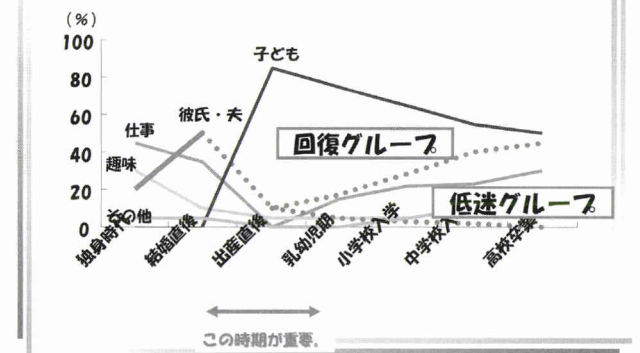
るが、女性は「長時間労働だし、残業代がつかなくなる」などメリットを感じないともとられている。そういう場合は管理職自身のワーク・ライフ・バランスの業務改善を進めている。

私も女性部下が多いんですが『メリット』を話すようにしている。自分の採用が高まると自分の都合に合わせられるということがあるので、昇格した方がやりやすくなるよ。あともう一つの理由として「自信が持てない」という女性がいるが、これは男性上司の間違ったマネジメントの結果で、女性だから厳しい所にはいかせられないといった男性がスポイルしてきた結果である。

私はよく、フェア・ケア・シビアという話をよくします。第1段階はいろんな社員へのきめ細やかな対応をするケア、いろんなニーズ、いろんなリスクに対応する。第2段階の役職が上がっていく段階ではフェアに時間当たりの生産を定時まででできた仕事に対して、きちんと評価する。第3段階の配慮はするが、遠慮はしない、シビアの話ですが、前のオリンピックの大松監督のようなやり方では成果は上げられません。なでしこジャパンの佐々木監督の女性部下マネジメントには学ぶことがあり、特徴として、「俺についてこい」とは絶対いわない。横から目線といった、立ち位置は横で、ゴールを掲げてそこを共有していく。監督の男性選手と女性選手の扱いは全然違います。男子は比べることでライバル意識を持たせ、あこがれの選手を引き合いに出す。しかし、女子には、ほかの選手を引き合いに出さず比べない。また、本人が自覚している自信の部分褒めて、より自信を持たせる。

佐々木監督の女性マネジメントには学ぶポイントがあって、よく使うのがきっかけ3大ホラー①熟年離婚ホラー②介護ホラー③マネジ

## (6) 女性の愛情曲線



メントホラーです。

私が手掛けた女性愛情曲線の調査では、愛情100%いろんな項目を配分してもらってライフステージでどう変わっていくのかを調べたものです。結婚直後は夫に対する愛情が踊りでて、これは一時期のもので、子どもが生まれたら子どもへの愛情が上がり、夫への愛情は下がる。一つのパターンとして夫への愛情曲線が下がったままの低迷グループがあり、これは「出産や乳児期の一番大変な時期に夫が何もしなかった。私一人で子育てした」といった人たちの数値が高かった。もう一つの回復グループの数値が高い理由としては夫と一緒に子育てをした人たちです。

昨年の9月に、NHKでこの愛情曲線が取り上げられました。これまでは「育児ノイローゼ」や「産後うつ」は母親の問題という一面的な見方をされがちだったが、これは夫の不作為責任を含む、社会のあり方に大きな問題があるといえる。この手口が斬新だったのでしょうか？わずか1時間で1500枚のファックスが送られてきました。男性からの攻撃もあったが、99.9%は妻から夫への恨みつらみでした。

介護ホラーというのは、家族に要介護者がいる方はどの職場でも一割はいます。これが10年後、15年後で倍増します。『仕事をしながら介護をど

う乗り越えていくか』が問題で、自分の親は妻がしてくれるというのは間違っている。介護離職している人の男性の増加率は女性の倍である。子育ては夫が何もしなくても妻はするが、夫の親に対しては「なんで私だけが？」となる。

管理職で介護しているのは男性が多い。妻の言葉や部下の言葉に対応できない管理職の男性はやっていけなくなる。きめ細やかに対応しなくてはダメだ。私の下の子どもは難病で今後どうなるかわからない。子どもを看取することは非常につらい。でも「一番つらいのはこの子だから最後の瞬間まで笑顔でいよう」と言った妻の言葉に教えられた。

私はそれまで不幸が起きないのが幸せだと思っていたが、仮に起こったとしても、「逃げず、押し付けず」一人で抱え込まないで、周りに協力してもらって乗り越えるプロセスが大事であることに気付いた。子育てで楽しいこと、うれしいことは妻と分かち合って倍増し、辛いことは分かち合って半減する。辛いという文字は一本付け加えることで幸いという字になる。家庭でも職場でも、近くのパートナーや上司に手を差し伸べてもらう事によって、辛い思いをしている人生が大きく幸いになります。「男女共同参画」とはそういうものではないかと思えます。

ワーク(ワカちあい)・ライフ(らくあり、くあり)・バランス(バトンリレー)と言っています。昨日からの阿南市の皆さんのお接待には、感銘を受けています。老若男女力を合わせて、特に子どもたちのミュージカルなど素晴らしかったです。だから、ぜひ阿南市からワーク・ライフ・バランスが広がって欲しいと思います。

**市場** 感動しました。3番目の山本さんは、現在2人のお子様を育てながら、徳島大学で泌尿器科医として勤務しています。徳島大学のAWAサポートセンターでの実践や、個人的な思いを語っ

ていただきます。

## 男女が互いに尊重して、持てる能力を十分発揮できるような男女共同参画社会

**山本** このような機会をありがとうございます。お二人のお話を聞きいてしまいました。徳島大学での取組を話します。普段は泌尿器科医です。ロボット手術、内視鏡のカメラの手術もしていますが、女性泌尿器科では女性特有の疾患をみています。全国でも女性の泌尿器科医は5%で県内には2人しかいません。



パネリスト  
山本恭代

日本女性会議には、私の母が10年前から時々参加していました。母、私、娘へと世代のつながりを感じ、感謝しながらお話をします。

徳島大学には3つのキャンパスがあります。今までの女性研究者間には交流がありませんでした。これまでの実態は、女性の教員の採用率は高いが、教員として残る人は全国平均からすると低く、大学院生とかは多いのですが、講師、准教授、教授と上位職になるほど少なくなっています。学内の調査では、35歳から40代の子育て世代でぐっと人数が減っています。大学では子育て世代の女性研究者を支援することで上位職に応募可能な女性研究者を増加させようということを目的にやっています。

徳島大学のこれまでの男女共同参画の推進の歩みですが、平成17年から女性研究者の環境を考えるワーキングが発達していて、そのあとワーク・ライフ・バランスの推進フォーラムですとか、人事課の男女共同参画室が設置されました。平成21年前学長、平成22年現学長が男女共同



参画宣言を出しまして、トップダウンという形で進んでまいりました。また、科学技術振興調整費という名目で国も助成研究者支援をしていますので、平成22年にAWAサポートシステムとして提出し、認可されました。到達目標は、女性研究者数の増加、業績の向上、ワーク・ライフ・バランスの実現を上げています。私たちもフォーラムでシンポジストさせていただいたり、女性研究者の支援のプロジェクトチームに入れていただいたりして今に至っています。

実行部隊を担っているのがAWAサポートセンターです。センター長や工学部、総合科学部などから人材が集まり、3つの部門から男女共同参画に対する計画を立てて実行します。

AWAサポートセンターの推進体制の整備としてセンター長、コーディネーター、キャリアカウンセラー、技術補佐の方々がいます。アナウンスしていこうと広報誌、育児介護支援など冊子を作り、ホームページを開設しています。またロールモデル集を提供して、学生・大学院生にもアナウンスをしたり、他の大学との情報収集としてシンポジウムにも参加しています。

男性管理職の意識も変えていくための啓発セミナーも行っています。また、人材育成として高校生、小中学生にも啓発イベントを実施しています。女性研究者の異文化間の交流も、普段の生活

から離れ、宿泊などをしながら研究発表をしたりして支援しています。人材バンクをつくり、メンター制度や研究支援の制度を設けています。

また、大学院生などは女性研究者のところに来てもらい、学生のうちから子育てをしながら、仕事をしている女性研究者をまじかに見て、研究も手伝いながら自分のキャリアアップをしてもらっています。より上位の職に女性をとということで私も採用されました。

ワーク・ライフ・バランスの支援部門ですが、ファミリーサポートセンターと大学のAWAサポートセンターがタイアップして、学生にベビーシッター登録をしてもらっています。利用したい教職員が登録して、お互いに支援をしようシステムなので、ロールモデルとして身近に接し、今後の将来像を描くのには有効だと考えます。保育施設も充実していて、女性職員の休憩室なども常設され、トイレなどの衛生環境も整っています。16%だった女性の比率が昨年度末には20%に増え、まず数の面で支援活動の効果が始まっています。

審査論文や起用、国際学会の発表、国内の発表のいずれも増え、科研費も増えています。この制度が始まって3年ですが、中身も身を結びつつあり、これからどう広がっていくかが課題とされています。一つの大学だけでなく、行政とのつながり、他大学とのつながり、地域や企業との連携などで、女性支援を広げていくのが私たちの目標です。

徳島県は昔はアワの国と呼ばれていました。古事記に出てくるイザナギとイザナミの娘オオゲツヒメの国で、ここから阿波が始まって現在の徳島県になったといわれています。

男女が互いに尊重して、持てる能力を十分発揮できるような男女共同参画社会を作ることができれば、日本は世界一健康長寿で豊かになれるはず

です。「いきいきわくわく小さなまちから新たなステージ」今回のテーマですが、阿南から始まり、徳島大学から始まり、地域、世界へと目指したいと思っています。

**市場** ありがとうございます。一緒に聞きながらわくわくしてきました。何か希望が持てるお話でした。次は大山治彦さんです。

### 「男らしくするな」ではなく、 「こだわりすぎるな」ということを

**大山** 今日話すのは、大学で教えているジェンダー・セクシュアリティについて。まさしく男女共同参画が専門です。父から男らしくないと怒られ、また周りからいじめられた経験があって、男は男らしくなければならぬとずっと悩んできた。



パネリスト  
大山治彦

高校・大学のころフェミニズムのブームが出てきて、上野千鶴子さんとか小倉千賀子さんが本を出した時期がちょうど青年期だったんです。その中に「女は女らしくなくていい。自分らしく・・・」を読んで、「なんだ、自分も男らしくなくてもいい、自分らしく生きればいいんだ」と思い、それでほっとした。青年期を支えてくれたのは、ジェンダー研究であったり、フェミニズムであったり、仲間と作った「メンズリブ」でした。男性問題専門の団体をやっている。

私は、今年47歳になりました。オリンピック直後に生まれた世代で、父親は78歳、母親は72歳です。私は独身です。今、男性の未婚率が上がっている。また、結婚をしても離婚率が増えてきた。母親、娘 妻 嫁がいて女性のネットワークに支えられてきた生き方はこれからはもうないだろうと私は思います。

男性がこの先、自分が一人で年老いていく中で様々な問題に直面するでしょう。これも男性ジェンダーの問題として取り組んでいきたいなあと考えているところです。冗談半分、本気半分ですが、父親が残ったら困るなど。そう息子が思ってしまう状況は何だろう？自分が一人で生きていて、ふと思うのは、NHKの造語ですが「無縁社会」という言葉です。その典型としては孤独死いわゆる孤立死で、その犠牲者はほとんどが男性です。男性が男らしく頑張っ生きていければいるほど生活能力が奪われている。男らしく頑張った男性の問題が出てきている。きょう午前中に内閣府佐村局長からお話があったように、男性にも問題があって、「女性を助けるだけでなく男性自身が幸せになるためにも大切です」というような旨の話をなされたと思うのですが。見事にそういう時代になってきているんじゃないかなと思う。男性が自分の問題として男女共同参画を、特にケア、身辺自立の問題をまじめに考えないといけないというふうに思っている。

そういう意味で、児童虐待が一番世話をしている女性・母からが多い。高齢者虐待は必ずしも男性介護者が一位ではないが、息子による加害が一番多い。女性とは違いケアの訓練がないまんまいきなり「やりなさい」と。しかも子育てと違って終わりが見えない。しかも周りから男性ということで支援が期待しにくい。周りが助けないということではなくて、男性が「助けて」と言うことができない。弱音を吐けない。

私も、男らしくないと言われたことを、言葉にするまでどれだけかかったか。今、男らしいというあり様がいかにかに男性を傷つけているか。勘違いしないでほしいのですが、男たちがもう少し男らしさにこだわりすぎない社会にしていくのが新しい目標ではないか。「男らしくするな」ではなく、「こだわりすぎるな」ということです。男ら

しさが自分を支えてくれるときは構わない。

現実には困ったことに女性は「男らしい男」が好きだという現実がある以上、若い人にはヒットしない。ただども自分を傷つけてしまうような、周りを傷つけてしまうようなときはその男らしさの鎧を脱ぐという技を身につけてもいいのかなと思う。そういった社会を男女共同参画の中で目指していけたらいいと思う。そのためには男性自身の意識改革が必要ですが、世の女性が女々しい男性を容認していかなければと思う。

皆さんにお願いしたいと思います。お子さんや、お孫さん、曾孫さんを孤独死させたくなければ、あまり世話を焼かないでください。きちんと身辺自立の能力をつけさせてください。女の子だけにお手伝いさせるのではなくて、男の子にもさせてください。たとえ洗濯物を送りつけても、そのまま送り返すぐらいにしてください。お母さんの愛情は今も楽でも、あとで苦しめることになります。もし夫に絶望しても息子の方に手を出すのはやめてください。そうしないとまた、夫のような男性を作って次の世代の女性に迷惑をかけます。

男の子に身辺自立の能力を身につけさせてほしい。食育も学校できちんと男女関係なく調理実習させてほしい。「お弁当を作ってほしい」と言いますが、共働きで忙しいのに、さらに何でと思う。

午前中の話で、気になったことは、子どもは何かというと確かに手間もかかって大変ですがその時間を待ってあげることが大切だと思うけれど、これだけ忙しい社会、共働きの中で待てる時間はどれだけあるのか。個人の努力でなんとかだけではなく、社会をどうするかという視点も同時に担わないとだめです。そういう意味では労働時間を短くするとか、子どもを待て

る社会、家事や育児に参加できる社会を作っていく。すると個人が努力しなくてもやれる社会になる。女性たちが頑張らなくても、男性と同じキャリアを踏めるような社会にしないといけない。社会の仕組みということも論点として付け加えておきたい。

今まで、基本的に男女のカップルを前提に話してきました。けれど、シングルで生きる男性、同性のカップルで生きる人たちもいる。それを考えて新しい社会を構想していく。今までからこれからへと考えたとき、これからの課題だと思います。

**市場** ありがとうございます。時間通り。こつてりと心に届くメッセージをお話ししていただきました。ここからは5人でやりとりをしていきたいと思っています。

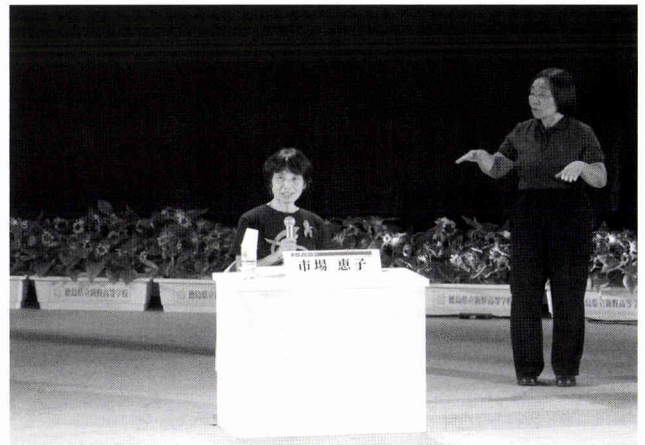
申し遅れましたが私は、すべて非常勤ですが、3つの大学で心理学を教えながら一方で公的な機関の心理相談員をしています。学生や相談に来た人たちと向き合っている中で、「世の中は変わってきたぞ」を実感しつつあります。この30年を振り返るというテーマですが、30年を積み重ねてきて、後退をしていることもあるが、人々の意識は確実に変わってきているなと思います。4人の発言者を選んだ人に拍手です。素晴らしい人選をしていただきました。

先ほどから語られていました、育児・介護・家事、もろもろのケアですが、それは他者へのケアもあり、セルフケアと言われる自分のケアも含め、私たちは生きていくうえで、ケアの役割は外せませんが共に生きてきた。どちらかということ、ジェンダーという視点でいえば女性に任されきてきた。しかも無償です。そのたくさんのケアを担ぎ、セルフケアはなおざりしてきた先達たちの苦労の上に今がある。しかしこれからは「すこし違うぞ」というのが男の生きづらさとして表れて



きた。今までは男性は一級市民、女性は二級市民といわれ、大山さんの話の中で、男らしくないという言葉の中に『女々しい』とか、『女のくさったやつ』というのは、「商品として考えれば2級品よりもっと落ちるよ」という意味であったのだと思います。優劣意識をちょっと横において、あるいは超えて、多様性という概念が浸透してきました。

また一方で、持続可能だという言葉も現れてきた。その持続可能あるいは多様性を視野にこれからの未来をつくっていかねばならないところにある。まだまだこの30年という歩みは男女平等と唱えながらも人々の意識は徐々にしか変わってきていない。私たちの意見を届ける法制度を決める政治の現場にも女性の代表者が少ない上に、ジェンダーの視点を持った人たちがたくさんまだまだ入りきれていないので、法制度もまだかな?という思いもある。とはいえ、私たちの前にはこの男女共同参画というキーワードをもとにそれぞれの民間での試み、また、企業や大学での試みやグループを組んだり、ネットワークを広げながら同じ目標に向かって歩いて来たのかなあと感じます。一級市民という言葉を使ってしまったが、ケアをする人が劣っているというこの価値観、もうそろそろ改めていいのではないのでしょうか。誰もがケアをされて大きくなっていきます。そしていつかまた、年老いたり、病気になったり、障がい者になったりすればケアをされる側にまわります。誰しもが生きる上でケアしたり、されたりという社会です。このケアというものをできるだけ男性にも「楽しいよ」「やってごらん」「成長につながることになるよ」と言ったりしてやってもらい、トムソーヤが、叔母さんから罰として無理やりやらされたペンキ塗りをわざと楽しくやっているうちに仲間のみんなが面白そうだなあと集まってきたように、やってみれば、そん



な文化のようにやってみれば、繋がってみれば、楽しくやっていけるよというふうに、それを一人で抱え込まないで、家の中だけに閉じ込めていくのではなくて、仲間と社会でやって行こうという時代を迎えているのかなあ。と、4人の話を聞きながら実感しているところです。4人でお互い、もう少し聞きたいところや同感するところを話し合ってください。どなたからでも。

**堀江** 皆さんの話を聞いていて学ぶことばかりでした。男性に聞いてみたい。男性は当事者意識をもてていない。子育てにしても遠い所のことだし、興味をもってもやらない。一緒に参画してもらうにはどうしたらいいかお聞きしたい。

**市場** 大山さんからどうぞ。

**大山** 2つのスパンで考えてみてもいいかなと。一つは今女性のことをやるのは男性がおちるととらえがちです。本来やらなくてもいいことをやらされているという感覚になっている。とても男らしくないことをさせられるという気持ちになるんだと思います。

一つは方便として「やった方が男らしいよ」「かっこいいよ」という戦略があると思う。その中でこだわり自身がこの問題を起こしているんだという『気づくジェンダーの視点』を長期にわたって入れていくというようなやり方が一つ。人間の場合は頭から変わっていかないんじゃない

かと思うんです。意識改革という言葉をよく使いますが、『行動を変えた』方が早い。さっさとゴミ捨てに行かせればいい。さっさと包丁を握らせればいい。家庭の中でやらせてみればいい。やっていけば、それが習いになっていく。渥美さんいかがですか。

**渥美** トムソーヤ作戦です。『かわいい子には家事をさせよ』ということで、息子たちをいかに楽しく巻き込むか。親が楽しく家事をやっていると家事は嫌なものだと思われるので、実際に洗濯を干しているときに、口笛や鼻歌などでしていると「お父さん何をしているの」と興味を持って寄ってくる。褒めたりしながら楽しませる。一緒に楽しむことが大切です。また、私が失業した時は妻に助けられてきました。家族はお互いに補っていくことが大切です。若い人には、「保険には投資が必要だから最低限家事育児はできた方がいい」と言っています。いずれ自分に返ってくるのだからと。

## 日本女性会議の30年を振り返り そして、これから

**市場** ありがとうございます。長期的に考えるというところと、周りの皆さんにアクションを起こしていくということですね。

大学で「ジェンダーと育児」の講義をもっているんですが、クレイマークレイマーという映画を学生に見せている。妻が出て行ったあと、シングルファザーが息子を抱えて苦戦苦闘するのを見せる。その苦戦の中から人間として見事に成長し、人間として素晴らしい人となっていくのを見て、男子学生の中から価値観の転換が起こる。「育児ってやる価値があるかもしれない」「妻だけに任せることではないかもしれない」というふうにならずとも当事者のモデルを超

えなくてもすぐれた作品の中で、頭を打たれるということもありうる。

日本女性会議が始まってちょうど30年目という節目の年に、今まで、大きな都市で開催されてきたが、「この小さな町でやってみよう」という機運が生まれ、「よし一緒にやろう」とたくさんのボランティアの人や実行委員に関わってくれたこと、これがまさに、30年の年月の上に積み重なった一つの大きな宝物ではないかと思っています。

これからにも目を向け、来年は北海道、再来年は倉敷？持続可能な成長へとつながることを願っている。介護、育児、家事が焦点になっている。いわゆる「男性の仕事ではない」と思われていたところに価値を見出してきた。ある意味では義務、労苦ではなく、たくさんの実りがあり、花が咲いていくと、これからの未来を指し示しているのではないのでしょうか。これからを含めながら、4人の方には時間的には3分くらいでお話し願います。では大山さんから

**大山** 男が男らしく生きるだけでは、つらい社会になってしまった。男らしさにこだわらない社会をどう男女で作っていくのか？今後の課題として、具体化していくことが必要である。

小さい時から教育したりチャンスを与えたりしていくことが必要であり、また自分のように50歳近くになった人はどうするのか。新しい社会にどう、適応するのか。本人が考える時期です。

私はよくシングル男性同士3人で夕飯の会をしています。この会に来なかったら何かあったのかなと思ったり、健康状態もわかる。またライバル意識が少しあるので新しいものを作って持って行って驚かしたり、それを見て今度はこれをしようかと思ったりする。

男性同士の助け合いの輪をどう作るか、男同士のつながりをどう作るのか。男縁ということをもど

う作るのかがこれからの課題ではないか。

**市場** 女縁という言葉を上野千鶴子さんが使われていましたが、男縁という新しい言葉が出てきたようです。男性たちは負けるな、泣くな、がんばれ、愚痴を言うなと育てられてきて、助けてと言えなかった時代、助けてと言える場所や仲間が増えていくと助けてと言える社会が少しずつ形づけられるかなと感じられました。

**山本** 私自身は2人の子育てをしているんですが、上の子と下の子が7年あいています。この7年で子育ての環境が変わっていることがよくわかります。保育園に行ってもお父さんの送り迎えが増えている。子育ての環境が変わっていることがよくわかります。これが自然になってきたなと現実を感じている。

いろんな支援策が標準になってきているので、うまく利用してほしいと思い、社会は少しずつ進んでいるなと実感しています。ピンチはチャンスという言葉は今、壇上で思いました。

**市場** 追い詰められたり、困ったときほど今までの鎧を脱ぐチャンスではないかと思えます。自分たちが今まで守ってきた、頼ってきた価値観が通用しないということがピンチ、苦境かも知れないので価値観が通用しない、他の選択肢がないときは、助けを求めたり、相談すると、自分が持っていなかった選択肢が増える。意外と一人ぼっちではなかった。世の中捨てたもんじゃないぞと。

今朝の劇団のミュージカルでもしきりに3.11東日本に心をむけ、日本をどう作るかと、熱く語ってくれた。「声を上げてみる」「横を見てみる」「今までの価値観を見直してみる」ということが次のチャンスを生むかもしれないというふうに思いました。

**渥美** 私は「良かった探し」「良かったづくり」についてお話しさせていただきます。職場で、男女とも、育児、介護し、働いて良かった、生きて

いてよかったという社会が男女共同参画だと思います。介護する男子は『介男子』というが。下の子が生まれてよかったと思える自分でできることをしていきたいし、父が長生きしてよかったとサポートしていきたいと思っています。

私は、よく周りから「大変でしょうね」と言われますが、ポジティブシンキングでピンチはチャンスだと。その通りです。こんな時に自分は不幸だととらえてしまえば本当にダメにしてしまうので、私はこんな時「良かった探し」に努めてやっています。人生を生きていていっぱい良いことはあります。忘れないで良かったノートにメモっています。

例えば、2年前に息子が脳腫瘍と診断された。小児病棟で寝泊まりしながらいろんなことを考えた。夜の小児病棟は泣き声がこだまします。付き添う親は少なく、小さい子たちは泣きます。「ママ」と。「パパ」とはあまり言いませんね。(笑) 同じ病室に筋ジストロフィーの女の子がいて、わずか2週間で歩けなくなるほど、進行の速い状態だった。その子が小さい子を励ますんです。同じ部屋なので、1歳児の息子のところにきて、一生懸命慰めてくれる。泣いている子を笑わせようとしてくれる。自分より小さい子のためにこんなにできるんだと、感動しました。残念ながら天国に召されましたが、たくさんその子から学ばせてもらいました。本当に会えてよかったと思いました。私は、阿南に来てよかったと思っています。皆さんが男女共同参画は地域で取り組んでいて、めげることもあると思いますが、そんなことは気にせず、私も皆さんと一緒に励ましあって「良かった作り」、「良かった探し」をしていきたいと思っています。

**市場** 「良かったね」で一つ思い出したことがあります。障がいを持った人たち、また子どもたちは生まれてこなければよかったのにと思われた

り、社会の中で生きていく居場所がなかったりした時代があったかもしれません。でも今は当事者が声を上げ、当事者自身が自分の人生をありのまま生きていける時代です。障がいは個性である。ポジティブシンキング、価値観の転換ですね。ありのままの自分で生きていける社会を作りたいと、まさに社会を動きながら変えてきてくださった歴史がある。かつて、ブラックイズビューティフルという言葉がありました。黒いこと自体が美しくないと思込まされた時代、つまり白人中心社会では、他者からの定義づけの中で自尊感情や自己肯定感を問われてきた。でも、黒いこと自身が美しいのだ。生まれながらに黒いこと自体が素晴らしいのだという自己定義をして立ち上がった歴史が『エンパワーメント』ですね。

それぞれが置かれた立場で比較や評価ではなくて、「今自分のいる場所から、自分らしく輝く道を付けて行こうよ」というのもこの日本女性会議30年の歴史のあゆみの結果だと思います。「良かった探し」とってもいいですね。

あるとき、新車を買った日にガレージに入れていて、車の後ろをへこませてしまった人が、がっかりして、障がいを持っている子どもに愚痴ったところ、その少女が、「残念だったね。辛かったね」と言った後、「怪我しなくてよかったね」というかと思ったらそうではなく「今度からバックする時に気を付けるようになるよね」と言ったそうです。いっぱい見つかりますね。それをみんなで見つけていけたらいいですね。価値観を転換する時代です。今まで社会の周辺に押しやられていた優勢主義をもう一回見直して、ありのままの私達一人ひとりが生きていく社会をそして認め合える、手を貸し合える社会になっていけるように願います。

**堀江** 私自身が男女雇用機会均等法ができた年

に生まれました。28年間で当たり前前に女性も就職する時代が変わってきました。ただ、当たり前前にどんな状況でも働き続けられるかということ、子育てだったり、介護だったりとなんか難しくなっている。

私も父の看護をしましたが、働き方が難しい部分もあった。どんな状況でも働き続ける。またこちらでも楽しめるといったところをこれからやらなければならぬと思う。若いこれからの世代に関して言うと知識と体験と自信の3ポイントで話すと、知識が古い自分の親の時代の男女間だったりとか、頭の中で引きずりながらも現状は何となく働き続けなければいけないんだろうなと、いうことを感じながらも、リアルがわからないから自信がなくなってしまっている。そこに対してリアルな現状を教えてあげると、もしかしてこんなふうにはできるかもしれないとか知識がついてきて、「なんだ出来るんだ」と自信が変わっていくのです。今は変わっているのにもかかわらず意識の仕事観、子育て観、は変わっていない。時代は変わっていることを認識して、理解した上で、自分はどう生きるかを考えるのが大事だと思う。そこで重要なのが交渉力で、「私はこうしていきたい」「こういうふう生きていきたい」と「自分一人では無理だから、あなたもこうしてね」とシェアをしていく。

この阿南での日本女性会議も仲間を集めてお互いがシェアすることで、やりきれたのではないのでしょうか。制度や既成概念にとらわれず、自分がどんなふう生きていきたいのか。周りにどうしてほしいのか。シェアすることを恐れずに交渉力をもって、やっていってください。先輩方ご協力してください。ありがとうございました。

**市場** 昨日の交流会や分科会では上は80、90代の方もいます。老若男女が集まって、これからの日本、世界を作っていくんだという思いの下に、この会議が小さな町でたくさんの人のエネルギー

を集めて開催されました。昨日の第9分科会を担当しましたが、そこで読み残した詩がありますのでご紹介します。アメリカのアフリカ系黒人、ブラックユール作詞・作曲でジャズの歌「私は完全なる命の存在」の訳文です。

私のこの人生を一生涯共にするのは  
何より私自身なのだから、  
今のこのまんまの私を愛します。  
ありのままの私で十分だと  
いつも認めてあげます。  
この私を慈しみ、誇りに思い大切にします。  
私自身の親友でいてあげます。  
生涯をずーっと共に  
歩みたいと思える人になります。  
人のことも気にかけてあげられるよう、  
まず自分自身をいつも大切にしていきます。  
私の愛と命を常に育み成長させ、  
人々と分かち合うようにしていきます。

皆さんの話を聞きながらこのフレーズが頭の中で何度も何度もリフレインしていました。大きなところでは中央から政府から発信される法律、制度、情報化かもしれないが、もしかしたらこの社会を変えていける一番の原動力は、一人ひとりの心と周りの人たちとのネットワークからかもしれない。

どちらもパートナーシップを組みながら、どっちが優れているとかどっちが先だとかではなく、まず私の中にある「男女共同参画」を私自身が始めてみようではありませんか。こんないい機会をつくっていただいた阿波の皆さん、阿南の皆さん、多くのボランティアの皆さん、ありがとうございました。



## 閉会式

時間 / 10:30~12:00



2000名規模の日本女性会議を受け入れるであろうか、という不安と期待を心の隅で抱えながら「いつか阿南で」の夢実現のあなん大会もいよいよ閉会式。

前日深夜に大会長が体調を崩し緊急入院をし、大会長より「代理人を立てずに運営委員で・・・」との指示のもと進行。

来年開催の札幌市より次期開催のPRにつづき運営いただいた多くのスタッフを代表して、各分科会担当の委員長さんを紹介登壇いただき、「男（ひと）と女（ひと）思いやりと感謝の気持ちで共に汗をながす男女共同参画」とのメッセージを全国に発信。

参加者全員で本大会のスローガンを斉唱。日本女性会議30回を記念し30個のジャンボ風船が会場を舞い一体となって閉会した。

いきいき わくわく

ちいさなまちから新たなるステージ！

ほんとうにありがとうございました。

### 閉会式次第

開会

お礼のことば  
次期開催地 PR

実行委員長 渡辺純子

札幌市副市長 井上唯文様

大会メッセージ

運営委員一同

閉会





# エクスカーション

実施日 10月11日、10月13日

エクスカーションとして、前泊者を対象に10月11日プレコースと、県内の観光体験プラン4コースを設定して、参加要項で募集をした。

各コース実行定員を決めていましたが、旅行社の配慮と手配で全コースが実施することができました。

## エクスカーション参加者

(A) プレコース	36人
(B) 南阿波海岸めぐり	12人
(C) 鳴門渦潮観光・人形浄瑠璃鑑賞	34人
(D) 秘境祖谷溪と脇町うだつの町	32人
(E) 体験！ミニ遍路	15人

### A 金曜午前プラン プレコース

【日 程】10月11日(金)  
【旅行代金】お一人様 8,000円  
(ロープウェイ代金往復2,400円含む)

募集人員40名(最少催行人員30名)/添乗員同行/昼食付

大会初日の午前の時間を利用して四国88ヶ所霊場第21番太龍寺を訪れます。川越え、山越えの大パノラミックロープウェイをお楽しみ下さい。

お天気がよければ紀伊水道が一望できます。昼食は精進料理をご用意いたします。前泊可能な方、大会終了後すぐ帰路に着きたい方やご予約のある方等におすすめです。

徳島駅(8:00頃)⇒阿南駅⇒道の駅～ロープウェイ～太龍寺～ロープウェイ(昼食)～道の駅⇒会場(13:00頃)

### B 日曜 日帰りプラン ① 南阿波海岸めぐり

【日 程】10月13日(日)  
【旅行代金】お一人様 8,000円

募集人員40名(最少催行人員30名)/添乗員同行/昼食付

厄除根本祈願寺として有名な四国88ヶ所霊場第23番札所薬王寺、アカウミガメが上陸する大浜海岸・うみがめ博物館・標高52mの岩山に波の浸食であいた直径30mの自然の神秘を感じる大穴をご覧ください。新鮮な海産食材をふんだんに使った昼食付。

また、この日は8台のチョーサ(太鼓屋台)が勇壮に大浜海岸に練る漁師町の名残を残す秋祭りも行われます。

※交通事情により徳島駅着が遅れる場合もあります。予めご了承下さい。

徳島駅(8:00頃)阿南駅⇒薬王寺⇒大浜海岸・うみがめ博物館⇒えびす洞⇒徳島駅⇒徳島空港(16:30頃)

### C 日曜 日帰りプラン ② 鳴門渦潮観光・人形浄瑠璃鑑賞

【日 程】10月13日(日)  
【旅行代金】お一人様 8,500円

募集人員40名(最少催行人員30名)/添乗員同行/昼食付

海の上を歩いてみよう! 豪快な渦潮や鳴門海峡の景観が一望できる大鳴門橋遊歩道「渦の道」で「海上散歩」お楽しみいただけます。床から激流渦巻く海面がスリル満点にご覧いただけます。その後、浄瑠璃「傾城阿波の鳴門」のモデルとなった庄屋「坂東十郎兵衛」の屋敷跡にて、十郎兵衛の遺品の見学や人形浄瑠璃芝居の上演をお楽しみいただけます。

徳島駅(8:00頃)⇒阿南駅⇒渦の道⇒阿波十郎兵衛屋敷⇒徳島駅⇒徳島空港(16:30頃)

### D 日曜 日帰りプラン ③ 秘境祖谷溪と脇町うだつの町

【日 程】10月13日(日)  
【旅行代金】お一人様 5,500円

募集人員40名(最少催行人員30名)/添乗員同行

平家一族の哀話を秘める秘境祖谷にかかるシラクチカズラで作られた長さ45m、幅2m、水面上14mのかずら橋をお渡りいただき、午後からは重要伝統的建造物群保存地区に指定された藍商の町を散策します(自由昼食・ガイド付散策)「うだつ」を備えた建造物が立ち並び現在では見られなくなった歴史ある日本家屋を見学することができる人気の地です。

阿南駅(8:00頃)⇒徳島駅⇒祖谷のかずら橋⇒脇町うだつの町並散策⇒徳島駅⇒徳島空港(16:30頃)

### E 日曜 日帰りプラン ④ 体験!! ミニ遍路

【日 程】10月13日(日)  
【旅行代金】お一人様 7,500円

募集人員40名(最少催行人員30名)/添乗員同行/昼食付

遍路ころがしと言われるほど険しい山寺の一つ第12番札所焼山寺をお参りした後、四国88ヶ所霊場で唯一の女性住職第13番大日寺で精進料理の昼食をお召し上がりいただけます。その後、第14番札所常楽寺から、第15番札所国分寺を徒歩にてめぐる歩き遍路を体験していただけます。全行程は約800mですので、お気軽にご参加いただけます。

阿南駅(8:00頃)⇒徳島駅⇒12番札所焼山寺⇒3番札所大日寺⇒14番札所常楽寺…(歩き遍路体験)…15番札所国分寺⇒徳島駅⇒徳島空港(16:00頃)

## 阿南大会の宿泊状況

大会を開催するにあたり、不安材料の一つに地方での開催であり、宿泊と移動交通手段であった。参加者のご理解とJR四国様のご配慮により、大きな混乱もなくローカル単線1両車両の中が交流の場となり、良い体験をしたとの話も聞き安心しました。

下表の宿泊者数は、大会本部を通じた数字なのでこの他にも、阿南市内の民宿や旅館にも多くの県外からの参加がありました。ありがとうございました。

宿 泊 地	10日	11日	12日	13日	計
阿南市内	32	207	32	0	271
徳島市	95	368	127	7	597
計	127	575	159	7	868

## 開催までの経緯

- 2004年10月 松山市開催 阿南市女性協議会として日本女性会議に参加。  
「こんな素晴らしい大会をいつか阿南で開催したい」と感動。  
以後福井、下関、富山、堺大会と毎年参加者を募り参加。
- 2007年10月 広島大会に阿南市女性協議会会員が参加。  
11月 阿南市で開催企画のため下関大会旅行社の方と面談し、企画書を市長さんに提出。  
予算や諸条件を考えると開催は困難。阿南版女性会議の提案あり。
- 2009年9月 日本女性会議開催の思いを抱き、「男女共同参画会議 in 阿南」を開催。  
「いきいき わくわく どきどき わかちあう気づき」をテーマに100名を超える実行委員が企画運営をし参加費一般2000円（学生1000円）、1214名（一般1070、学生144）の登録者があり大盛会であった。
- 2010年10月 京都大会に阿南市女性協議会会員が参加。
- 2011年10月 松江大会に阿南市女性協議会会員参加。車中「2013年阿南市で開催」の意思を誓う。  
12月 阿南市女性100人委員会にて「2013年日本女性会議開催」を阿南でとの提言。  
渡辺企画書を、市長さんに提出阿南での開催を熱望。
- 2012年1月 有志で誘致準備会（8人会）設立。  
各方面に開催企画趣旨と阿南市が立候補の要請活動はじめる。  
3月 松江市へ研修、日本女性会議2011松江大会実行委員に松江方式を学ぶ  
「日本女性会議2013年誘致しよう会」設立会 松江より3人、阿南市民167人参加  
6月5日 阿南市より仙台市へ2013年開催地の立候補を提出。  
11日 日本女性会議2012仙台大会実行委員会より決定通知いただく。  
27日 上京し内閣府副大臣、男女共同参画局長に阿南大会企画を報告。  
大会名称に「男女共同参画」を加える意向を伝える。
- 7月17日 日本女性会議2013年誘致しよう会を「日本女性会議2013を成功させよう会」に改名。  
阿南市女性協議会共催で「日本女性会議2013阿南大会がんばろう！パーティー」を開催。  
473人の市民が集まり、収益金は実行委員会に寄付。
- 8月21日 日本女性会議〈男女共同参画〉2013実行委員会設立総会  
10月4日 大会ロゴマーク決定
- 10月26日 阿南市長、市議会議員、阿南市女性協議会ほか約50名のPR隊で日本女性会議2012仙台に参加。  
阿南大会のPRを行う。
- 2013年1月 阿南市役所に大会広報懸垂幕設置  
2月14日 第2回実行委員会  
4月3日 ニュースレター創刊 全国に発送  
5月29日 第3回実行委員会  
6月5日 大会募集要項 全国に発送  
7月 市内にのぼり、横断幕設置。阿南夏祭りで広報活動行う  
8月 阿南市職員担当者との打ち合わせ  
新野高校でひまわりの種まき  
新聞エコバック制作講習会  
プレ分科会を開催  
9月 昼食、交流会料理の試食会  
ウエルカムロード清掃活動  
10月 ボランティア説明会





**【物産展】**

県内の企業や団体、専科などから24店が出店。産品の魅力を語り求める人々にぎわった。

**【男性の参加】**

大会における男性の参加者は471人と過去最高。市民ボランティアもあっては全体の4割にも上った。

**【演出】**

繰り返さない脅威を明瞭な演出で、聴衆に伝わりやすい演出。フィアールでは感動する場面もあった。

**【感動】**

阿南の人々の心づくしと参加者の心を打った。実況で感動の瞬間も伝えられ、会場の熱気は最高潮に。

**【料理】**

30種類の郷土料理が竹の葉に盛り付けられた。30周年を記念して30m巻きずしも出る賑わった。

**【おもてなし】**

「ウエルカムかかし」、「パッチワークオルト」、「ひまわり」、「お茶席」などで、おもてなしの心をカタチに。



# 日本女性会議でみせた阿南の底力!

阿南市の歴史に大きな1ページが刻まれました。

10月11日から3日間、県内外から2,309人が参加して「日本女性会議(男女共同参画)2013あなん」が盛大に開催されました。延べ7,000人のボランティアを動員し、「あ・い・う・え・おもてなし」を合言葉に一致団結。「市民の底力」で、地方の都市でも開催できることを証明しました。「男と女、思いやりと感謝の気持ちで共に汗を流す男女共同参画」のメッセージを全国に発信し、地域社会で共同参画を实践していくための着実な一歩を踏み出しました。

阿南市で開催された「日本女性会議」では、30年の歴史の中で初めて「男女共同参画」の言葉が表された。これまでの開催市の中でも、一番小さな阿南市が「いきいきわくわく」のステージから新たなカタチで、市民・企業・行政が一体となって大会を運営する独自の取り組みが実現しました。阿南市の歴史に大きな1ページが刻まれました。阿南市は、阿南市の歴史に大きな1ページが刻まれました。阿南市は、阿南市の歴史に大きな1ページが刻まれました。

阿南市で開催された「日本女性会議」では、30年の歴史の中で初めて「男女共同参画」の言葉が表された。これまでの開催市の中でも、一番小さな阿南市が「いきいきわくわく」のステージから新たなカタチで、市民・企業・行政が一体となって大会を運営する独自の取り組みが実現しました。阿南市の歴史に大きな1ページが刻まれました。阿南市は、阿南市の歴史に大きな1ページが刻まれました。

**【アトラクション】**

地元有名産の産品展、うすき巻が本場の和風調りや後援、阿南市の歴史を伝えるお土産をプレゼント。

**【交流会】**

牛蒡城が栄えた江戸幕府時代の衣装を着た身元女性スタッフから、阿南の歴史と発展を語る。

**【分科会】**

9つのテーマ別に幅広い議論が交わられた。第9分科会(DV)では、男性の視点から議論が行われた。

**【ボランティア】**

準備から本番まで、延べ7,000人のボランティアを動員。新築エコハウスで徳島・阿南の魅力をPRした。

**【基調報告・記念講演・シンポジウム】**

内閣府男女共同参画局長の佐知子さんによる基調報告、料理研究家の宮内千歳さんによる記念講演のあと、30周年記念シンポジウムでは、有識者による議論が交わられた。



15 阿南市2013.12

14 阿南市2013.12



歩んできた道のり  
そのものが  
男女共同参画

実行委員長 渡辺 純子

市民の熱意とおもてなし  
で成功させた  
歴史に残る大会

大会長 岩瀬 嘉仁

回想  
Recollection

Watanabe Junko

Iwasa Yoshitomo

北は北海道から南は沖縄まで、全国47の都道府県から予想を上回る3,000人参加の大会を開催しました。30周年の節目となる日本女性会議を開催することができました。今年大会は、1年余りわたる準備から当日の開催まで、さまざまな分野で携わってくださった延べ7,000人のボランティアの方々の貴重な協力をいただいたことに、改めて感謝の気持ちを込めてお礼申し上げます。阿南市は、阿南市の歴史に大きな1ページが刻まれました。阿南市は、阿南市の歴史に大きな1ページが刻まれました。

北は北海道から南は沖縄まで、全国47の都道府県から予想を上回る3,000人参加の大会を開催しました。30周年の節目となる日本女性会議を開催することができました。今年大会は、1年余りわたる準備から当日の開催まで、さまざまな分野で携わってくださった延べ7,000人のボランティアの方々の貴重な協力をいただいたことに、改めて感謝の気持ちを込めてお礼申し上げます。阿南市は、阿南市の歴史に大きな1ページが刻まれました。阿南市は、阿南市の歴史に大きな1ページが刻まれました。

**● 分科会**

9つのテーマで分科会が行われ、パネルディスカッションやワークショップなどで幅広い議論が交わりました。それぞれの分科会長に、成果や感想などについて話を伺いました。

- 分科会 1 介護と地域医療**  
人生の最晩年を心豊かに過ごすためには、人とのつながり、社会に参加することができると実感しました。日々女性性をスタートに男と女が協力し合って、孤立を防ぐ取組を地域で進めていきたい。
- 分科会 2 防災**  
テーマを「女性防災リーダーの育成のために〜災害前後に女性の視点から〜」と設定し、みんなが主体的な参加を促すべく、いろいろな立場の女性を呼び寄せました。スタッフは会場の運営を通して、防災に対する意識と知識のレベルを高めました。
- 分科会 3 子ども**  
さまざまな世代の大人たちが集い、話し合い、夢や希望が未来の大人たち(子どもたち)のために「今自分にできること」を考え、表明しました。一人ひとりが無償を込め、行動する大切さを確認した有意義な分科会となりました。
- 分科会 4 まちおこし**  
百発して百中されるものは真の力になる。あれだけの時間をかけ、会議を重ね、ボランティア活動にも参加したことが成功につながったと思う。スタッフの皆さん、思いやりと感謝の気持ちで、阿南市を盛り上げてくださいます。ありがとうございます。
- 分科会 5 セカンドライフ**  
高齢を幸齢と捉え、セカンドライフをどのように輝いて生きていくかを、熱く語り合いたい会議でした。当日の分科会終了後、「こんな楽しい会議は初めてでした。ありがとうございます」のお言葉にスタッフ間の笑顔がはじけました。皆さまありがとうございます。
- 分科会 6 食育**  
食育の実践が、地域の活性化や男女が共に元気に生活を送ることに貢献するきっかけになると期待されており、食を大切にし、食を通じて豊かな人間性を育む阿南市・自然・食でつくる絆が感じられた分科会でした。
- 分科会 7 ワーク・ライフ・バランス**  
コーディネーターの運営から(産生労働者労働者会)は、自分が男女共同参画社会を創る責任者で、自分自身の責任をもち、7人の発表内容の要約をまとめた。人々の多様性が生かされる社会が、今こそ求められている。
- 分科会 8 農林漁業**  
私たちは「生命を育む希望にあふれる地域づくり」をテーマに議論を深めました。阿南市は「こんな楽しい会議は初めてでした。ありがとうございます」と、阿南市が小さいけれど、声をかけていただくと、第8分科会が成功したのかとスタッフと喜び合いました。
- 分科会 9 DV (ドメスティックバイオレンス)**  
DVというテーマと男女共同参画をどうにかにかつなげるかどうかが最も議論を重ねました。スタッフ全員の気持のよさを発揮することが、成功に結びついたのだと思います。ありがとうございます。

17 阿南市2013.12

16 阿南市2013.12

## 参加者集計と傾向

都道府県名	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明	計	男	女
北海道	0	0	5	4	7	9	2	0	0	4	31	8	23
岩手県	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3	0	3
宮城県	0	0	0	2	1	1	0	0	0	2	6	3	3
青森県	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	0	2
秋田県	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	3	0	3
山形県	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1
福島県	0	0	1	1	2	2	1	0	0	0	7	0	7
新潟県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
長野県	0	0	0	0	9	18	22	2	0	0	51	9	42
山梨県	0	2	1	1	16	20	14	3	0	0	57	10	47
群馬県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
栃木県	0	1	2	9	17	12	3	0	0	0	44	8	36
茨城県	0	0	1	1	4	16	4	0	0	2	28	3	25
東京都	0	1	1	4	7	10	3	0	0	1	27	4	23
埼玉県	0	1	0	5	6	9	3	0	0	8	32	8	24
千葉県	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	1	1
神奈川県	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0	2
石川県	0	0	0	0	1	5	0	0	0	0	6	0	6
富山県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福井県	0	1	0	2	6	12	13	2	0	4	40	4	36
静岡県	0	0	0	1	2	0	0	0	0	2	5	3	2
愛知県	0	2	0	1	9	11	3	0	0	3	29	1	28
三重県	0	1	0	6	8	6	1	0	0	5	27	6	21
岐阜県	0	1	0	1	4	1	0	0	0	0	7	2	5
和歌山県	0	1	1	2	4	10	5	2	0	0	25	3	22
京都府	0	2	1	3	9	6	13	3	0	0	37	3	34
大阪府	0	4	3	3	18	22	21	1	0	2	74	4	70
兵庫県	0	0	1	4	3	0	1	0	0	1	10	1	9
奈良県	0	2	0	2	11	24	13	4	0	10	66	2	64
滋賀県	0	1	2	0	5	5	3	1	0	4	21	2	19
鳥取県	0	0	1	6	10	35	17	1	0	14	84	8	76
岡山県	0	0	3	3	9	15	20	2	0	5	57	5	52
島根県	0	0	2	3	8	7	3	0	0	2	25	6	19
広島県	0	0	2	2	11	19	13	0	0	4	51	2	49
山口県	0	0	0	1	1	4	4	0	0	0	10	2	8
香川県	0	1	1	5	13	15	4	0	0	17	56	3	53
高知県	0	1	0	2	4	12	5	1	0	4	29	3	26
愛媛県	0	1	0	5	12	23	17	1	0	1	60	1	59
福岡県	0	4	4	9	22	28	6	0	0	12	85	16	69
大分県	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	4	1	3
宮崎県	0	0	0	0	0	3	3	0	0	0	6	0	6
佐賀県	0	0	1	2	0	6	1	0	0	4	14	0	14
長崎県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0
熊本県	0	2	2	3	3	2	0	0	0	2	14	6	8
鹿児島県	0	0	2	0	1	2	1	0	0	0	6	2	4
沖縄県	0	0	1	1	0	8	2	0	0	0	12	0	12
小計	0	29	40	95	252	383	221	23	0	114	1,157	141	1,016
徳島県	3	51	65	133	243	363	200	26	1	67	1,152	323	829
合計	3	80	105	228	495	746	421	49	1	181	2,309	464	1,845



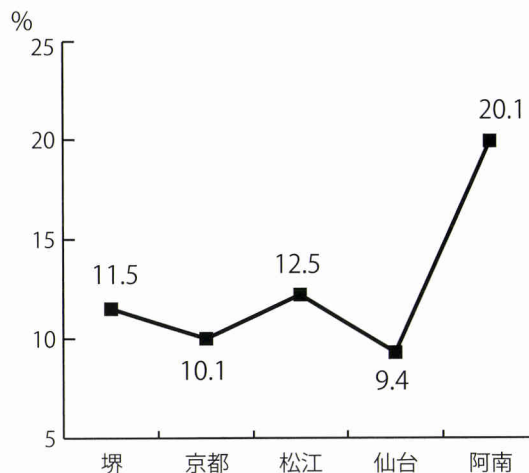
日本女性会議〈男女共同参画〉2013 あなん大会（以下あなん大会）を企画するにあたり、日本女性会議のあゆみを振り返り、女性だけが学ぶのではなく、男性と共に学ぶ必要があると考え、大会名称に「男女共同参画」を始めて表記しました。

また、企画運営にも積極的に男性に呼びかけ、ともに取り組んできた結果が、あなん大会の参加者集計に現れました。

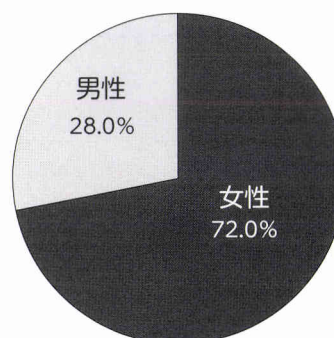
### 日本女性会議男性参加者

年度	開催地	女性	男性	合計
2009	堺	2,884	375	3,259
2010	京都	2,463	276	2,739
2011	松江	1,858	266	2,124
2012	仙台	1,893	196	2,089
2013	阿南	1,845	464	2,309

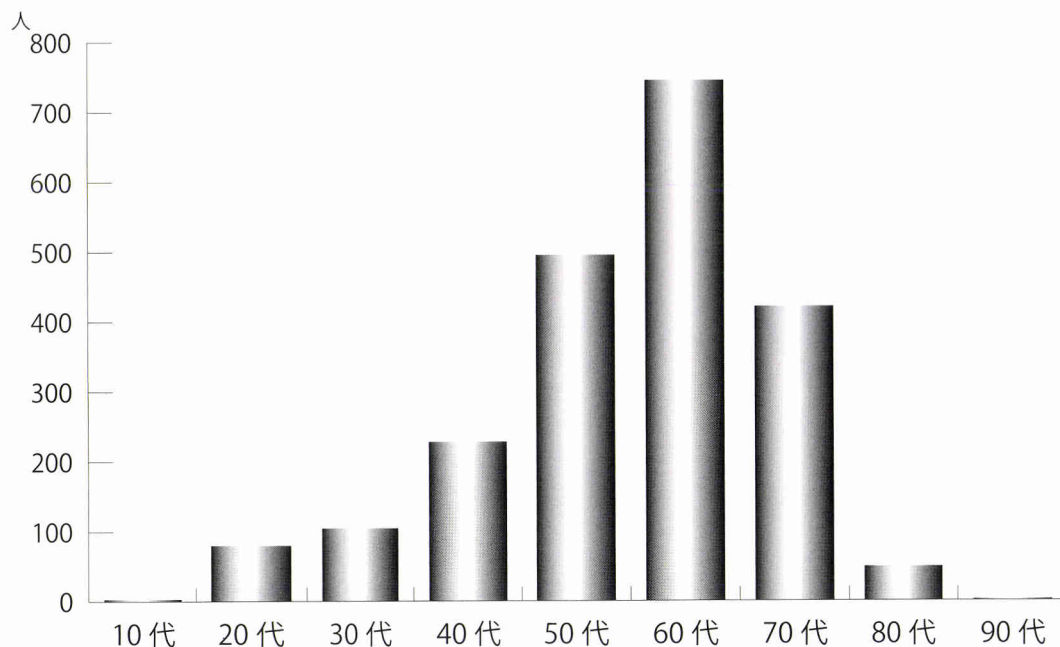
### 日本女性会議男性参加者割合



### あなん大会の徳島県内参加者



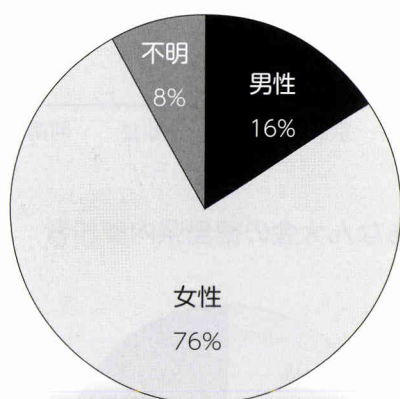
### あなん大会年代別参加者数



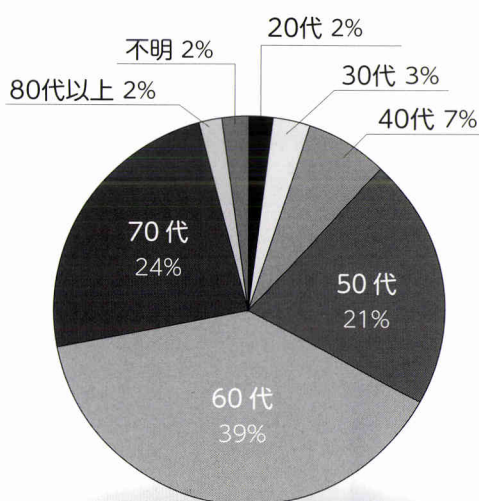
## 参加者アンケートより

大会参加者アンケートにご協力ありがとうございました。582名の回答をいただき、阿南大会の反省と今後地方都市での開催も視野にいたした「日本女性会議新たなステージ！」の参考になればいいなどの思いで集計しました。

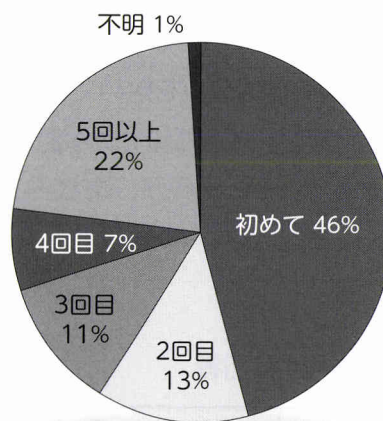
参加者男女別



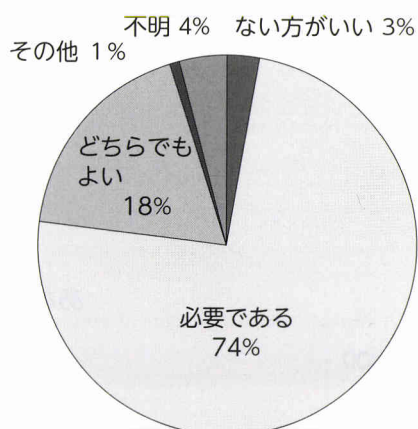
参加者年代別



日本女性会議参加回数



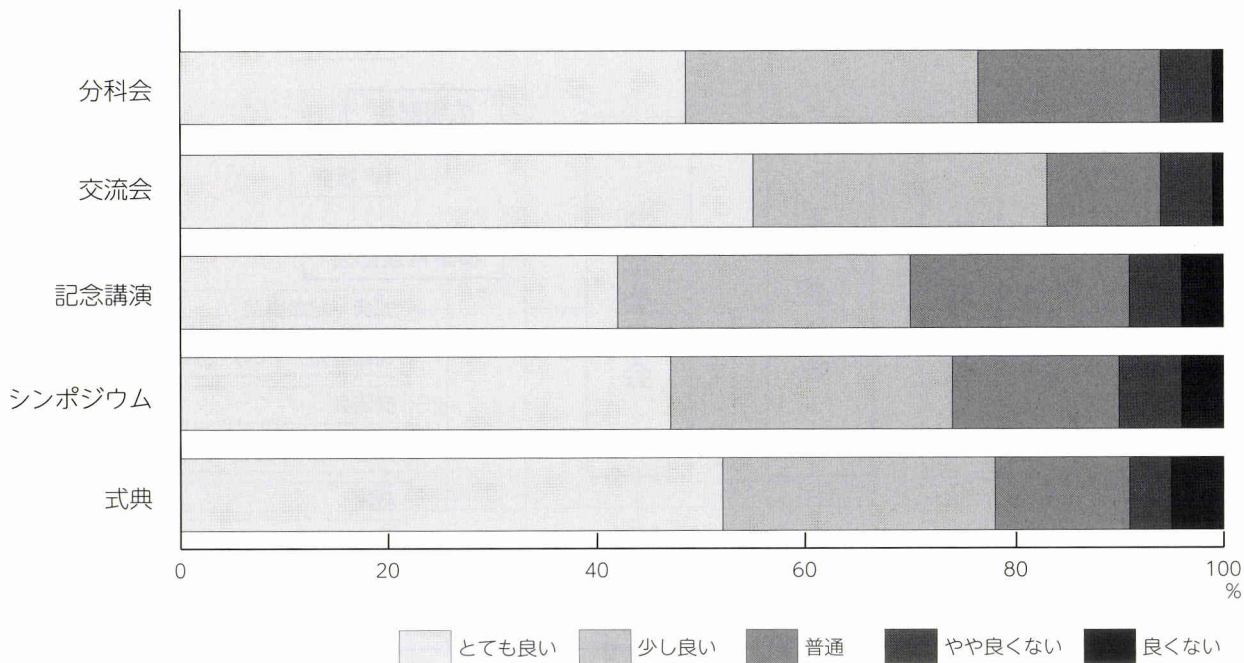
日本女性会議大会名称に「男女共同参画」の記載について



私たちは、「日本女性会議は男女共同参画社会の実現に向けた課題の解決策を探るとともに、参加者相互の交流の促進や情報のネットワーク化を図ることを目的とした全国規模の会議」と位置づけ、大会名称に初めて「男女共同参画」を明記しました。どちらでもいいを含めると92%の賛同を得られました。

今後の開催の名称に活かされることを期待いたします。

### プログラム別評価より



大会を開催するにあたり、おもてなしは「お接待の心と仲間の心意気」で心配は少なかったが、全国より勉強され、またリピーターさんも多いので内容については最後まで心配しました。

先催地よりの「全国大会です。レベルを落とさないよう」の言葉。記念講演講師選択からシンポジウムの組み立てや分科会。特に分科会のメンバーには大変ご苦労をかけ、当初予定をしていなかったが、本番と同じスタイルでプレ分科会を開催し本番に臨みました。

結果、各プログラムとも「私たちのねらい」も伝わったようで、総合評価も合格点は頂けたと思います。

地方での開催とはいえ、音響や会場空調、会場アクセスなど反省点は多々ありますが、感謝のことばや、多くの笑顔、お礼状やメールを頂き、あらためて日本女性会議が開催できたことに感謝しています。

### アンケートコメントより

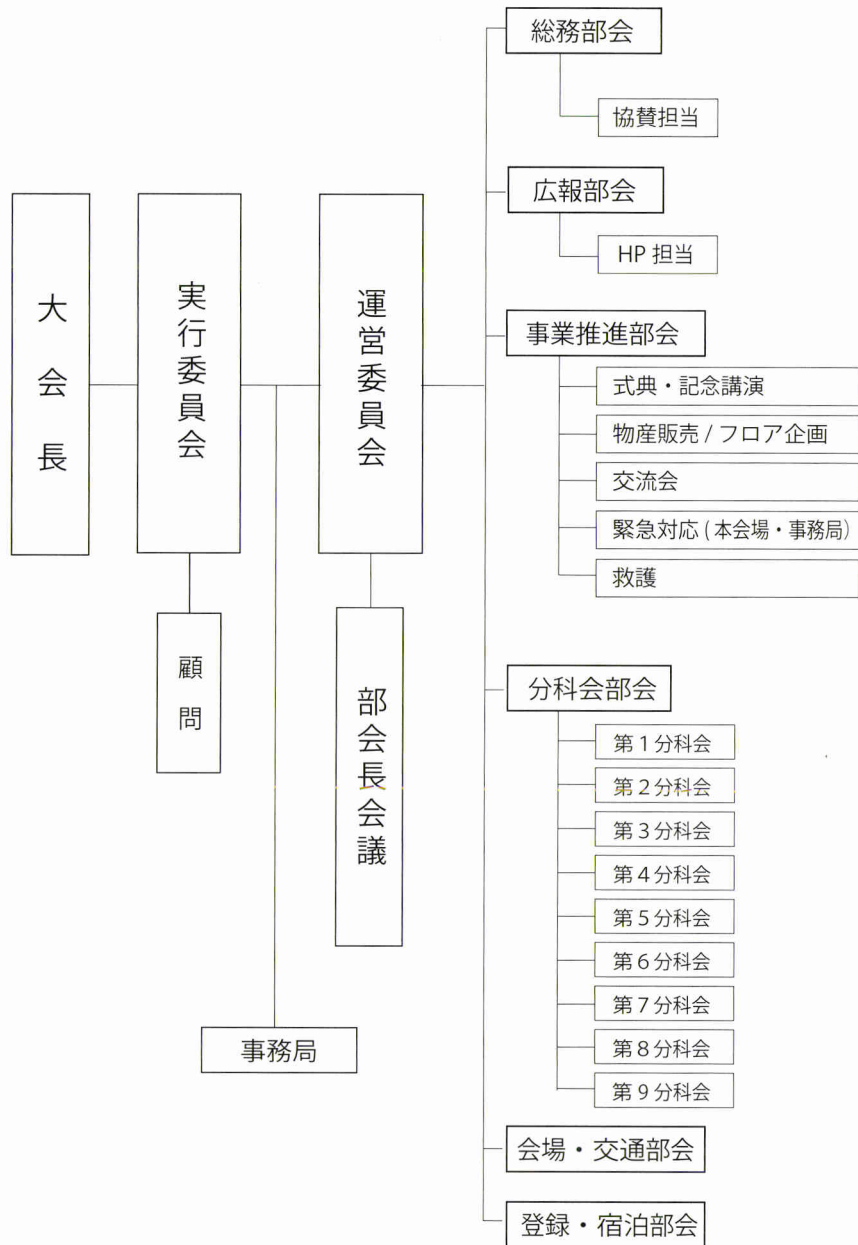
- 会場に男性が多かったのには驚いた。
- オープニングの子どもたちのメッセージに感動。
- 子どもや、高校生、若い人の挨拶や活躍が随所に見られ、元気を頂いた。
- ボランティアの多さと笑顔、おもてなしに感動。
- 交流会の料理で、阿南の素晴らしさを実感して、たくさん頂いた「ごちそうさま」。
- 交流会では、テーブルが分科会ごとに設定されていて、分科会の延長で大いに盛り上がった。
- この小さな町で、よくこれだけの大会運営が出来たと感動。

大会長の岩浅嘉仁阿南市長の体調に お心遣いを頂いた皆様へ

すっかり元気になって、「健康管理も公務」と復帰しています。ご心配おかけ致しました。そして、ありがとうございました。

# 大会運営組織

大会組織図



阿南大会を企画運営するために、下記の目的で実行委員会を設立した。

実行委員会は、日本女性会議〈男女共同参画〉2013 あなん（以下「あなん大会」という。）が市民団体、企業、個人と行政が協働で取り組み、円滑な運営と事業の推進を図ることを目的とする。

また、実行委員会の下に、運営委員会を置くことを定め

- (1) 実行委員会に提出する資料の整理及び検討に関すること。
  - (2) あなん大会に関する企画及び運営の検討並びに実動に関すること。
  - (3) あなん大会の広報活動及び報道の検討並びに実動に関すること。
  - (4) あなん大会の収支並びに開催に必要な事項の検討並びに実動に関すること。
- として実施した。



日本女性会議〈男女共同参画〉2013 あなん 実行委員会名簿

役 職	所 属	氏 名
大会長	阿南市長	岩浅 嘉仁
顧 問	阿南商工会議所会頭	平尾 勲雄
	徳島県農業協同組合中央会会長	荒井 義之
	JA あなん代表理事組合長	中西 庄次郎
	阿南市議会議長	島尾 重機
実行委員長	阿南市女性協議会会長	渡辺 純子
副実行委員長	阿南工業高等専門学校校長	吉田 靖
副実行委員長	男女共同参画有識者	河内 順子
監事	阿南信用金庫理事長	佐竹 義治
	四国税理士会阿南支部支部長	吉積 和伸
実行委員	阿南市議会文教厚生委員長	久米 良久
	阿南市教育委員会教育委員長	里美 文子
	阿南市政策監	西田 修
	阿南市参与	勝瀬 修平
	阿南商工会議所専務	上杉 豊久
	阿南市人権教育協議会会長	仁木 正弘
	阿南市森林組合代表理事組合長	内藤 富士雄
	阿南市PTA連合会会長	白濱 誉記
	四国旅客鉄道(株) 徳島企画部部長	吉田 敏弘
	前阿南市女性協議会会長	齒朶山 加代
	前JA徳島女性組織協議会会長	大栗 邦子
	男女共同参画有識者	乾 晴美
	徳島県保健福祉部部長	小谷 敏弘
	徳島県南部総合県民局局长	鎌田 義人
	那賀川町商工会事務局長	中西 斉
	羽ノ浦町商工会主任経営指導員	樫原 誠治
	運営委員会部会長会議議長	片山 毅
	運営委員会事務局長	橋本 雅代

運営委員

委員長 渡辺 純子  
 部会長会議 議長 片山 毅  
 部会長会議 副議長 尾崎 範子  
 委員 小泉 隆一  
 仁木 敬子  
 久米 眞砂子  
 美馬 育子  
 福井 義範  
 杉原 洋子  
 渡部 輝美  
 事務局 橋本 雅代  
 福長 翔子

阿南市職員スタッフ

勝瀬 修平 (日本女性会議 担当参与)  
 佐藤 賢治 尾崎 正俊  
 佐野 雅史 市瀬 幸  
 宮田 美香 伊勢紀美代  
 海部 仁貴 近藤 義昭  
 数藤 康彦 岩佐真由美  
 石本誠一郎 條 司  
 半瀬 恒夫 湯浅 誠治  
 大川富士夫 米田 勉  
 岸 浩範 高島 見佳  
 松内 徹 木本 祥司  
 石本 憲司 田神 雅史  
 数藤 正規 尾崎 悠  
 (順不同)

※運営事務局職員数を行政より全国大会規模の業務があるという理由や、先催県の対応を参考に配慮いただいたが、専任2名で行い事務作業のお手伝いを、運営委員や市民ボランティアの協力で行った。

2013.10.11 現在

## 日本女性会議 (男女共同参画) 2013あなん 分科会スタッフ

### 第1分科会

分科長 齋 芳宏  
西岡 絢子  
石立 刮子  
秋月 卓実  
近藤 泰司  
井坂 稔  
近藤 泰子  
岩佐 久美  
善成 敏子  
井上 かおり  
西村 浩子  
松原 和子  
三木野 相子  
神原 静子  
福長 理  
阿利 文江  
長田 泰代

### 第2分科会

分科長 湯城 豊勝  
吉原 信子  
山本 健  
尾崎 正代  
松田 賢二  
山崎 忠雄  
小川 美紀  
池田 重政  
松下 学  
山本 栄  
小坂 孝子  
青木 正繁  
土方 和子  
東條 清子  
島尾 洋子  
伊藤 佳子

### 第3分科会

分科長 阿部 和代  
安田 浩子  
福島 好子  
尺長 良子  
程野 和子  
松原 阿佐子  
谷口 啓子  
上地 敏子  
天羽 千賀子  
今川 愛子  
田中 房子  
西岡 賦文  
長町 達也  
仁木 康之  
一ノ宮 哲也  
原田 善人  
松本 眞澄  
近藤 清子  
溝田 美恵子  
西山 和孝  
宮崎 浩  
立田 佳代子  
片山 和子  
萩平 真治  
萩原 陽子  
津山 淳子

### 第4分科会

分科長 日下 旭  
日下 俊子  
廣田 邦子  
鎌田 サチ子  
福本 潤子  
湯浅 みどり  
広瀬 伊月  
日下 美代

宮繁 敏美  
渡辺 幸江  
多喜田 聖子  
川田 八重子  
河野 孝子  
篠原 京子  
遠藤 富美代  
泉 和博  
春木 勉  
吉尾 卓典  
篠原 基  
表原 節子  
紅露 清恵  
太居 容子  
石居 佑斗  
小林 トヨ子  
野村 千寿子  
萩野 敦士  
武市 篤浩  
福岡 一郎

### 第5分科会

分科長 美馬 義明  
田村 恭子  
見谷 正行  
保岡 好江  
達田 美喜夫  
湯浅 裕美  
渡辺 カツコ  
小濱 薫  
車田 マサ子  
西條 瑞子  
大津 光江  
山田 幸祐  
土肥 穰  
小濱 綾子  
池添 哲哉  
荒瀬 左知子

村田 壽子  
久田 由美  
早竹 史子  
岸本 悦子  
木本 左起子  
中岡 恭祐

### 第6分科会

分科長 谷 篤子  
尾崎 澄子  
伊藤 富美代  
田上 和江  
泉 陽子  
魁生 悦子  
井村 玉恵  
田上 直江  
猪井 茂美  
四宮 珠美  
玉木 まち子  
本津 勝子  
和淵 清美  
宮本 美千代  
阿部 和恵  
田上 洋子  
青木 弘子  
川田 千恵子  
三枝 賀代子  
長久 生實  
入江 潤子  
横手 千恵子  
望月 一徳  
環 征夫  
田木 勲  
松浦 浩二  
久保 恵美子





第7分科会

分科長 野村 誠也  
西田 祥典  
福岡 俊和  
森口 敏生  
坂本 光美  
野口 通世  
阿部 里司  
河内 順子  
高開 千代子  
川下 佳代子  
幸木 千夏  
山下 マスミ  
島本 淳  
大坂 和弘  
長田 里美  
三牧 千鶴子  
天羽 佐知子

七條 輝美  
宮本 啓子  
大久保 明  
露口 玲子  
羽尻 利門  
吉岡 誠  
西谷 幸子

第8分科会

分科長 栗飯原富士子  
須藤スミ子  
福持 艶子  
美間 敏子  
中平 香  
北藤 明美  
葛木 ひで  
田村 典代  
西谷 廣子

川口 由紀子  
吉村 節子  
大黒 弘子  
吉岡 照子  
松家 清子  
松岡 孝子  
吉田 純子  
町田 哲子  
岡本 真理  
大久保 久美子  
瀬藤 嘉子  
西村 信昭  
株木 博子  
河野 真弓  
福島 かをる  
山西 順子

第9分科会

分科長 福本 尚子  
西岡 由紀  
株木 孝之  
一楽 明美  
山橋 潔子  
河野 和代  
西崎 弘美  
岐 千代美  
福田 紀子  
森 淑子  
秋田 多美子  
鳥居 千代  
青木 浩次  
福谷 美樹夫  
横手 久典

分科会別主な部会開催記録

	2012年			2013年										合計
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	
1分科会	1	2	1	1	1	1	2	1	2	1	2	3	0	18
2分科会	1	1	1	2	0	2	1	1	1	1	1	2	1	15
3分科会	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	0	12
4分科会	1	3	3	1	1	2	1	1	1	2	2	3	0	21
5分科会	1	1	1	2	1	1	1	1	1	3	2	3	1	19
6分科会	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	13
7分科会	1	1	1	1	2	1	1	0	1	1	1	3	0	14
8分科会	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	0	12
9分科会	2	1	1	1	1	1	1	1	3	2	2	2	1	19
合計	7	12	11	11	9	11	10	8	12	13	14	21	4	143

## ボランティア参加記録

分野	作業内容	ボランティア団体名等	参加人数	日数等	のべ人数
事務局	事務局作業	運営委員	4	900	3,600
分科会	企画打ち合わせ	9分科会スタッフ	15	143	2,145
広報PR	ニュースレター発送(2回)	市民ボランティア	30	2	60
	夏祭りPR	市民ボランティア	30	1	30
	のぼりたて	市民ボランティア	15	1	15
	仙台PRすだち袋詰め	市民ボランティア	20	3	60
おもてなし	ようこそ案山子制作	市民ボランティア	40	5	200
	案山子撤収	市民ボランティア	25	1	25
	パッチワーク	市民パッチワーク会	15	3	45
	ウエルカム演奏	ままプラス anana mama	20	1	20
	竹伐採、交流会竹の器制作	市民ボランティア	22	3	66
	会場周辺清掃	市民・女性協議会他	150	1	150
	抹茶おもてなし	小学校茶道クラブ他	25	2	50
	ひまわりプランター栽培・搬入	新野高校 市民ボランティア	10	20	200
	当日配布すだち袋詰め	JA あなん	20	3	60
会場設営	駐車場 草刈り	市民ボランティア	15	2	30
	駐車場整備・撤去	市民ボランティア	10	3	30
	体育館養生作業	市民ボランティア	150	1	150
大会運営	エコバック作成	徳島新聞むつみ会	85	5	425
	エコバック作成	市民ボランティア	20	10	200
	分科会プレ運営	分科会スタッフ他	20	9	180
	記録写真撮影	市民写真愛好家ボランティア	23	2	46
	会場パイプイス借り上げ	市民ボランティア	45	2	90
	交流会から式典転換	市民ボランティア	150	1	150
	分科会運営	分科会スタッフ	15	9	135
	交流会お接待	市民ボランティア	60	1	60
	交通整理案内係	市民ボランティア	30	2	60
	会場撤収	市民ボランティア	120	1	120
合 計					8,402

上記記載以外にも、阿南市女性協議会、阿南市ボランティア協会、町の保健室、阿南医師会中央病院、阿南那賀女性歯科医師他たくさんの団体、個人の方々よりご支援をいただきました。ありがとうございました。

## 編集後記

---

“いきいきわくわく小さなまちから新たなるステージ!”を大会テーマのもと開会しました「日本女性会議〈男女共同参画〉2013 あなん」は皆様のご協力により無事閉会することができました。

随分と時がたちましたが、ようやく報告書を発刊することができここにあらためてお世話になった全ての方々に深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

2日間に及ぶ大会の内容を文字にすると膨大なものになり、これを簡潔にまとめることは大変な作業でしたが、参加者の皆様方の熱い想いをしっかり残したいと思い、運営委員一同、作業に取り組み、ようやく皆様にお届けすることになりました。

思いおせば阿南市で開催することを決め、「実行委員会」を設立し、実働隊としての「運営委員会」を組織してから、この地方の小さな町で「男女共同参画」の更なる推進のためには男性の協力や男女の意識改革がなくてはありえないと、より多数の男性参加を目指しました。おかげで男性は20%を超える参加者があり、過去の日本女性会議では最高の参加率でした。

今大会では、いろいろな願いが完全に実現したとは言えませんが、30回を節目の年ととらえ、この地方から新たなるステップを歩みたいという願いが、少しでも前向きに動きだすことができたのではないかと思います。

尚、私たちは、この大会を一過性に終わらせたくないという思いから、3つの分科会が引き続き活動を始め出しましたことを、ここで皆様方にご報告させていただきます。

皆様本当にありがとうございました。

運営委員一同

---

## 日本女性会議〈男女共同参画〉2013 あなん 報告書

発行日 平成26年3月20日

編集 日本女性会議〈男女共同参画〉2013 あなん運営委員会

発行 日本女性会議〈男女共同参画〉2013 あなん実行委員会

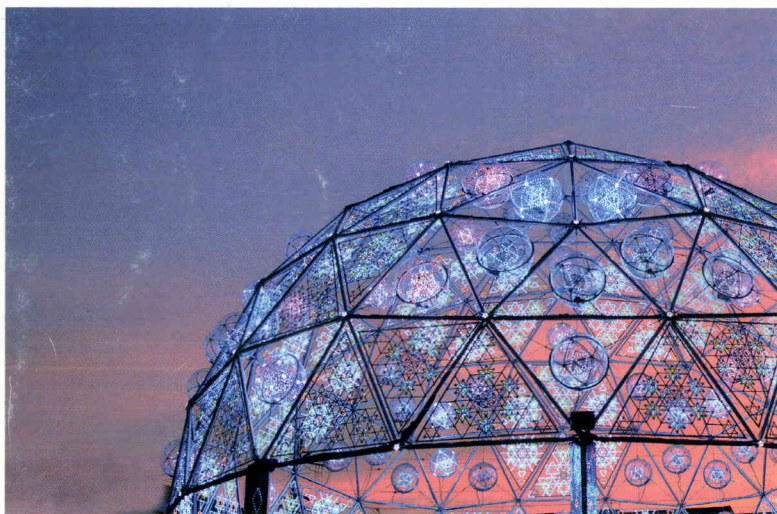
阿南市役所

〒774-8501 徳島県阿南市富岡町トノ町12番地3

電話：0884-22-1111（代表）

人権・男女参画課 男女共同参画室

電話：0884-22-7401 E-Mail：josei@city.anan.tokushima.jp



後援

内閣府・厚生労働省・文部科学省・徳島県・徳島県教育委員会・徳島県市長会・徳島県町村会・阿南市教育委員会・徳島大学・鳴門教育大学・四国大学・阿南工業高等専門学校・徳島新聞社・四国放送株式会社・NHK徳島放送局・株式会社エフエム徳島

日本女性会議〈男女共同参画〉2013あなん実行委員会事務局

〒774-0030 徳島県阿南市富岡町北通9番地 男女共同参画室分室内

Tel.0884-24-3750 Fax.0884-24-3751 E-mail: info@jwc2013anan.com

<http://www.jwc2013anan.com>